



- 一 滿ノ鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ルコト
- 一 浦羅斯德線ニ使用スヘキ船舶ハ契約者專屬ノモノニシテ命令書實施ノ際船舶十五年未滿ノ鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ルコト
- 一 神戶小樽線ニ使用スヘキ船舶ハ契約者專屬ノモノニシテ鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ルコト
- 一 本州北海道連絡線ニ使用スヘキ船舶ハ契約者專屬ノモノニシテ命令書實施ノ際船舶二十年未滿ノ鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ルコト
- 一 政府ニ於テ必要ト認ムルトキハ各航路内ニ於テ寄港地ヲ増加シ又ハ之カ變更ヲ命スルコトアルヘキコト
- 一 旅客貨物ノ運賃ハ政府ノ認可ヲ得テ之ヲ定ムルコト
- 一 政府ニ於テ必要ト認ムルトキハ種類ヲ指定シテ旅客貨物ノ運賃ヲ低減セシムルコトアルヘキコト
- 一 各航路ニ使用スル船舶ニ依リ遞送スル郵便物ハ無賃タルヘキコト
- 一 政府ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ給與シテ各航路ニ使用スル船舶ヲ買收シ又ハ公用ノ爲メニ使用スルヲ得ルコト
- 一 政府ハ契約者ノ費用ヲ以テ各船舶ニ航海修業生三名以内ヲ乗組マシメ政府ノ定ムル手當ヲ支給セシムルコト
- 一 政府ハ非常事變ノ際ニ於テ各航路ノ船舶並ニ船員ヲ使用スルヲ得ルコト但此場合ニハ相當ノ使用料ヲ支給スルコト
- 一 補助金ハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ各航路ニ對シ支給スルコト但航海回数ヲ減シタルトキ又ハ

- 一 命令書ニ規定シタル各地ニ航行セシメ隨テ航海里數ヲ減縮シタルトキハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ補助金ヲ減スルコト
  - 一 事故ノ爲メ若シハ政府ノ認可ヲ受ケ各航路ニ使用スルノ目的ヲ以テ合格船ヲ取得スル爲メ前記ノ資格ニ該當セサル代船ヲ使用スルトキハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ補助金ノ支出額ヲ減少スル場合アルコト
  - 一 航路毎ニ之ニ對シ支給スル補助金ノ額ニ相當スル保證金ヲ徴收スルコト
  - 一 正當ノ事由ナクシテ航海度數ヲ缺キタルトキ、相當ノ船舶ヲ使用セサルトキ、契約期限内ニ船舶ノ修繕若クハ補充ヲ爲ササルトキ、航海時間ヲ超過シタルトキ、起點終點ノ兩港ニ於テル發着日時ヲ變更シタルトキ、郵便物揚卸ノ契約ニ違背シ若クハ寄港地ヲ省キタルトキ其他命令書ノ規定ニ違背シタルトキハ一日若クハ十二時間未滿又ハ一回毎ニ所爲ノ輕重ニ依リ相當ノ金額ヲ徴收スルコト
  - 一 政府ノ認可ヲ得シテ契約者義務ヲ他人ニ移轉シ若クハ船舶ヲ賣讓シ又ハ一年期間ニ於テ命令書ニ規定スル回数ノ航海ヲ爲ササルトキハ契約ヲ解除シ補助金ノ交付ヲ廢止シ當該年期間内ニ執行シタル航海ニ對シ補助金ヲ還納セシメ且保證金ヲ沒收スルコト
  - 一 前數項ニ於テ一年期間ト稱スルハ其年十月一日ニ起リ翌年九月三十日ニ終ル一週年間ヲ謂フ
  - 一 毎年四月及十月ニ於テ前六箇月間ノ航海ニ對スル補助金ヲ交付スルコト
- 第十九
- 北海道沿岸定期航海補助トシテ左ノ條件ニ依リ明治三十八年十月ヨリ明治三十九年九月迄滿一箇年間拾貳萬七千參百參拾壹圓以内ヲ支出スルノ契約ヲ結フコトヲ得

- 一 函館根室線ハ總噸數二千噸以上最速力一時間十一海里以上ノ船舶一艘ヲ備フルコト
- 一 小樽稚内線根室網走線及根室樺捉線ハ各航路毎ニ總噸數五百噸以上最速力一時間十海里以上ノ船舶一艘ヲ備フルコト
- 一 前記ノ中必要ト認ムル航路ニ於テハ相當豫備船ヲ備ヘシムルコト但豫備船ハ本船ニ付キ定ムル資格ニ依テサルヲ得ルコト以下同レ
- 一 函館根室線ハ毎月五回以上一年期間六十回以上ノ航海ヲ爲スコト
- 一 小樽稚内線ハ四月ヨリ十一月マテハ毎月五回以上十二月ヨリ三月マテハ毎月三回以上一年期間五十二回以上航海ヲ爲スコト
- 一 根室網走線ハ四月及十二月ハ毎月一回以上五月ヨリ十一月マテハ毎月三回以上一年期間二十回以上航海ヲ爲スコト
- 一 根室樺捉線ハ五月ヨリ十一月マテ毎月三回以上一年期間二十一回以上航海ヲ爲スコト
- 一 函館根室線小樽稚内線根室網走線根室樺捉線ニ使用スヘキ船舶ハ契約者專屬ノモノニシテ船齡十五年未滿ノ鐵製又ハ鋼製汽船ニ限ルコト
- 一 政府ニ於テ必要ト認ムルトキハ各航路内ニ於テ寄港地ヲ増加シ又ハ之カ變更ヲ命スルコトアルヘキコト
- 一 旅客貨物ノ運賃ハ政府ノ認可ヲ得テ之ヲ定ムルコト
- 一 政府ニ於テ必要ト認ムルトキハ種類ヲ指定シテ旅客貨物ノ運賃ヲ低減セシムルコトアルヘキコト
- 一 各航路ニ使用スル船舶ニ依リ遞送スル郵便物ハ無賃タルヘキコト

- 一 政府ハ命令ヲ發シ相當ノ金額ヲ給與シテ各航路ニ使用スル船舶ヲ買收シ又ハ公用ノ爲メニ使用スルヲ得ルコト
- 一 政府ハ契約者ノ費用ヲ以テ各船舶ニ航海修業生三名以内ヲ乗組マシメ政府ノ定ムル手當ヲ支給セシムルコト
- 一 政府ハ非常事變ノ際ニ於テ各航路ノ船舶並ニ船員ヲ使用スルヲ得ルコト但此場合ニハ相當ノ使用料ヲ支給スルコト
- 一 補助金ハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ各航路ニ對シ支給スルコト但航海回數ヲ減シタルトキ又ハ命令書ニ規定シタル各地ニ航行セス隨テ航海里數ヲ減縮シタルトキハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ補助金ヲ減スルコト
- 一 政府ハ航海回數ヲ減シタル場合ニ必要ト認ムルトキハ同月又ハ翌月ニ之ヲ償ハシムルコトアルヘキコト但此場合ニハ前項但書ノ規定ヲ適用セサルコト
- 一 事故ノ爲メ若クハ政府ノ認可ヲ受ケ各航路ニ使用スルノ目的ヲ以テ合格船ヲ取得スル爲メ前記ノ資格ニ該當セサル代船ヲ使用スルトキハ命令書ノ定ムル所ニ從ヒ補助金ノ支給額ヲ減少スル場合アルコト
- 一 航路毎ニ之ニ對シ支給スル補助金ノ約一割ニ相當スル保證金ヲ徵收スルコト
- 一 正當ノ事由ナクシテ航海度數ヲ缺キタルトキ、相當ノ船舶ヲ使用セサルトキ、契約期限内ニ船舶ノ修繕若クハ補充ヲ爲サ、ルトキ、航海時間ヲ遲延シタルトキ、起點終點ノ兩港ニ於ケル獲著日時ヲ變更シタルトキ、郵便物揚卸ノ契約ニ違背シ若クハ寄港地ヲ省キタルトキ、其他命令書ノ規定ニ違背シタルトキハ一日若クハ十二時間未滿又ハ一回毎ニ所爲ノ輕重ニ依リ相當ノ

### 金額ヲ徵收スルコト

一 政府ノ認可ヲ得シテ契約者義務ヲ他人ニ移轉シ若クハ船舶ヲ賣讓シ又ハ一年期間ニ於テ命  
令書ニ規定スル回數ノ航海ヲ爲サ、ルトキハ契約ヲ解除シ補助金ノ交付ヲ廢止シ該年期間  
既ニ執行シタル航海ニ對シテ補助金ヲ還納セシメ且保證金ヲ沒收スルコト  
一 前數項ニ於テ一年期間ト稱スルハ其年十月二日ニ起リ翌年九月三十日ニ終ル一週年間ヲ謂フ  
一 毎年四月及十月ニ於テ前六箇月間ノ航海ニ對シテ補助金ヲ計算シテ交付スルコト

### 第二十

臺灣總督府特別會計ニ於テ專賣局作場費五萬圓材料藥品購買費四拾萬圓ヲ限リ明治三十九年度ニ  
於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

### 第二十一

臺灣官設鐵道用品資金特別會計ニ於テ臺灣官設鐵道用品費五拾萬圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ  
國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

### 第二十二

煙草專賣局特別會計ニ於テ事業費七拾八萬七千九百四拾五圓煙草賠償及購買費六拾四萬貳千八百  
八拾圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコ  
トヲ得

### 第二十三

東京砲兵工廠特別會計ニ於テ作場費四拾萬圓材料藥品購買費百萬圓大阪砲兵工廠特別會計ニ於テ  
作場費貳拾五萬圓材料藥品購買費七拾五萬圓千住製鐵所特別會計ニ於テ材料藥品購買費貳百萬圓

ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

### 第二十四

東京帝國大學ニ於テ儲外國人教師三名滿期一名死亡ニ付更ニ備繼又ハ代員ヲ備入左ノ契約ヲ結フ  
コトヲ得

一 一名ハ明治三十八年八月一日ヨリ同四十一年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額六百七  
拾五圓ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

一 一名ハ明治三十八年八月一日ヨリ同四十一年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額五百五  
拾圓ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

一 一名ハ明治三十八年八月一日ヨリ同四十一年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額五百圓  
ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

一 一名ハ明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタ  
ル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額六百貳拾五圓ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸國旅費九百

七拾五圓ヲ支給ス

以上ノ四名ハ各家具ヲ備ヘサル家屋一字ヲ貸付ス若シ政府ノ都合ニヨリ家屋ヲ貸付セサルトキハ  
宿料トシテ月額四拾圓ヲ支給ス

### 第二十五

廣島高等師範學校ニ於テ儲外國人教師一名滿期ニ付更ニ備繼明治三十八年八月一日ヨリ同四十一  
年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額參百五拾圓宿料月額參拾圓ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸  
國旅費六百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第二十六

東京商等商業學校ニ於テ傭外國人教師一名滿期ニ付更ニ代員ヲ傭入及一名新ニ傭託シ左ノ契約ヲ結フコトヲ得

一 一名ハ明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

一 一名ハ明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ傭託ノ日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭託手當月額四百圓ヲ支給ス

第二十七

神戸商等商業學校ニ於テ傭外國人教師二名新ニ傭入左ノ契約ヲ結フコトヲ得

一 一名ハ明治三十八年五月一日ヨリ同四十二年四月三十日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額四百圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

一 一名ハ明治三十八年五月一日ヨリ同四十二年四月三十日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

第二十八

長崎商等商業學校ニ於テ傭外國人教師一名新ニ傭入明治三十八年九月一日ヨリ同四十二年八月三十一日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓ヲ支給シ

且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第二十九

第二高等學校ニ於テ傭外國人教師二名滿期ニ付更ニ代員ヲ傭入各明治三十八年九月一日ヨリ同四十二年八月三十一日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓宿料月額參拾圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十

第三高等學校ニ於テ傭外國人教師三名滿期ニ付更ニ傭繼又ハ代員ヲ傭入左ノ契約ヲ結フコトヲ得  
一 二名ハ各明治三十八年八月一日ヨリ同四十年七月三十一日マテノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓ヲ支給ス  
一 一名ハ明治三十八年八月一日ヨリ同四十二年七月三十一日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

以上ノ三名ハ各家具ヲ傭ヘサル家屋一字ヲ貸付ス若シ政府ノ都合ニヨリ家屋ヲ貸付セサルトキハ宿料トシテ月額四拾圓ヲ支給ス

第三十一

第六高等學校ニ於テ傭外國人教師一名滿期ニ付更ニ代員ヲ傭入明治三十八年十一月二十日ヨリ同四十二年十一月十九日マテノ間ニ於テ傭入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ傭給月額參百圓宿料月額參拾圓ヲ支給シ且滿期解傭ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

トヲ得

第三十二

山口高等學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年七月二十二日ヨリ同四十二年七月二十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓満期解備ノ際歸國旅費五百圓ヲ支給シ且家具ヲ備ヘサル家屋一字ヲ貸付ス若シ政府ノ都合ニ依リ家屋ヲ貸付セサルトヤハ宿料トシテ月額貳拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十三

東京高等工業學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓宿料月額四拾圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十四

東京音楽學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年九月一日ヨリ同四十二年八月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額四百圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十五

豫算所特別會計ニ於テ備外國人一名満期ニ付更ニ備置明治三十八年四月一日以降二箇年ノ期限ヲ以テ俸給年額五千圓契約期限中死亡ノ場合若クハ満期解備ノ際手當トシテ千五百圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第三十六

豫算所特別會計ニ於テ事業費五拾萬圓材料藥品購買費百萬圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

第三十七

官設鐵道用品資金特別會計ニ於テ官設鐵道用品費六百九拾七萬七千五百圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日(官報一月二日)

- 内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎
- 海軍大臣 岩倉 山本 權兵衛
- 内務大臣 金子 爵 芳川 謙正
- 大藏大臣 岩倉 爵 實 荒助
- 陸軍大臣 寺内 正毅
- 文部大臣 久保 田 讓

第一

豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件

文部省備外國人一名 現恩給額年ニ明治三十七年一月以降終身恩給年金四百圓ヲ增加支給スルコトヲ得

第二

逓信省備外國人一名ニ明治三十七年十月以降終身恩給年金千五百圓ヲ支給スルコトヲ得

第三

陸軍軍費ニ係ル糧秣費七拾萬圓馬匹費貳萬六千八百圓憲兵費ニ係ル糧秣費四千圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

第四

萬國地震學協會加盟費トシテ明治三十七年度以降毎年獨貨參千貳百圓ヲ支出スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第五

臺灣總督府特別會計ニ於テ專賣局作場費五萬圓材料藥品購買費四拾萬圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

第六

臺灣官設鐵道用品資金特別會計ニ於テ臺灣官設鐵道用品費參拾七萬圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

第七

煙草專賣局特別會計ニ於テ事業費六拾壹萬五千五百八拾四圓煙草賠償及購買費六拾四萬貳千八百八拾壹圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

ヲ得

第八

東京砲兵工廠特別會計ニ於テ作場費四拾萬圓材料藥品購買費百萬圓大阪砲兵工廠特別會計ニ於テ作場費貳拾五萬圓材料藥品購買費七拾五萬圓千住製絨所特別會計ニ於テ材料藥品購買費貳百萬圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

第九

海軍造船材料資金特別會計ニ於テ造船材料費百五拾萬圓海軍造兵材料資金特別會計ニ於テ造兵材料費百五拾萬圓ヲ限リ明治三十八年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十七年度ニ於テ結フコトヲ得

第十

東京帝國大學ニ於テ備外國人教師一名滿期ニ付更ニ備繼明治三十八年四月一日ヨリ同四十一年三月三十一日マテノ期限ヲ以テ俸給月額六百貳拾五圓滿期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給シ且家具ヲ備ヘサル家屋一字ヲ貸付ス若シ政府ノ都合ニ依リ家屋ヲ貸付セサルトキハ宿料トシテ月額四拾圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十一

東京商等師範學校ニ於テ備外國人教師一名滿期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額四百圓ヲ支給シ且滿期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十二

東京高等商業學校ニ於テ備外國人教師二名満期ニ付更ニ代員ヲ備入左ノ契約ヲ結フコトヲ得

一 一名ハ明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額六百圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

二 一名ハ明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額貳百五拾圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

第十三

第一高等學校ニ於テ備外國人教師五名満期ニ付更ニ備繼左ノ契約ヲ結フコトヲ得

一 三名ハ各明治三十八年四月一日ヨリ同四十年九月十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓ヲ支給ス

二 二名ハ各明治三十八年四月一日ヨリ同四十年九月十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給ス

第十四

第四高等學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同四十年九月十日マテノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓宿料月額拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十五

第七高等學校造士館ニ於テ備外國人教師二名満期ニ付更ニ代員ヲ備入各明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給

月額參百圓宿料月額拾五圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十六

山口高等學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同三十九年九月三十日マテ一箇年ノ期限ヲ以テ俸給月額貳百五拾圓満期解備ノ際歸國旅費五百圓ヲ支給シ且家具ヲ備ヘサル家屋一宇ヲ貸付ス若シ政府ノ都合ニ依リ家屋ヲ貸付セサルトキハ宿料トシテ月額貳拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十七

東京外國語學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額貳百五拾圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得

第十八

東京音樂學校ニ於テ備外國人教師一名満期ニ付更ニ代員ヲ備入明治三十八年四月一日ヨリ同四十二年三月三十一日マテノ間ニ於テ備入契約ニ定メタル日ヨリ三箇年間ノ期限ヲ以テ俸給月額參百圓ヲ支給シ且満期解備ノ際歸國旅費九百七拾五圓ヲ支給スルノ契約ヲ結フコトヲ得



朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スヲ要スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セリ

御名 御璽

明治三十八年二月十五日(官報二月十六日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
海軍大臣伯爵山本權兵衛  
大藏大臣伯爵曾根荒助

豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スル件  
海軍工廠資金ニ於テ材料物品費百八拾萬圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

法令全書

勅令

朕非常特別稅法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第一號(官報一月一日)

非常特別稅法施行規則中左ノ通改正ス

第一條ノ二 株式會社又ハ株式合資會社カ所得稅法施行規則第三條ニ依リ損益計算書ヲ所轄稅務署ニ提出スル場合ニ於テハ其ノ事業年度間ニ於テ最多數ナリシ時ニ於ケル株主又ハ株主及社員ノ數ヲ併セ申告スヘシ

第一條ノ三 賣藥營業者ハ毎年一月十五日迄ニ一方劑毎ニ前年中ニ製造シタル賣藥ノ定價總額ヲ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第一條ノ四 通行稅ハ汽車、電車又ハ汽船ノ乘船車賃ヲ領收スルトキ之ヲ徵收スヘシ

第一條ノ五 汽車、電車又ハ汽船營業者ハ拂込書及計算書ヲ添附シ毎月十日迄前月分ノ通行稅ヲ各營業場所所在地ノ金庫ニ拂込ムヘシ但シ營業者カ本店所在地所轄稅務署ノ許可ヲ得タルトキハ之ヲ本店所在地ノ金庫ニ拂込ムコトヲ得  
官設鐵道ニ於テ通行稅ヲ金庫ニ拂込ムトキハ計算書ノ添附ヲ省略スルコトヲ得

第二條中「毛織物又ハ石油ヲ織物ニ改メ左ノ二項ヲ加フ

販賣場ヲ有シテ織物ヲ販賣セムトスル者ハ販賣場ヲ定メ販賣場所轄稅務署ニ申告スヘシ

販賣場ヲ有セズシテ織物ヲ販賣セムトスル者ハ其ノ居所所轄稅務署ニ其ノ旨申告スヘシ

第三條第五條第十條第十八條第十九條第二十二條及第二十二條中「毛織物又ハ石油」ヲ「織物」ニ改ム

第四條中「毛織物又ハ石油」ヲ「織物」ニ改メ左ノ二項ヲ加フ

織物販賣者ニシテ販賣場ヲ有スル者販賣場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ販賣場ヲ定メ所轄稅務署ニ申告スヘシ

織物販賣者ニシテ販賣場ヲ有セザル者其ノ居所ヲ移轉シタルトキハ其ノ旨移轉先ノ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第七條中「毛織物又ハ石油製造業」ヲ「織物製造業又ハ販賣業」ニ改ム

第八條 織物製造者又ハ販賣者其ノ製造又ハ販賣ヲ廢止セムトスルトキハ其ノ旨所轄稅務署ニ申告スヘシ

第九條 外國ニ輸出スル織物又ハ製品ト爲シテ外國ニ輸出セムトスル織物ニ付消費税ノ免除ヲ得ムトスル者ハ製造場ヨリ之ヲ引取り又ハ移出スル都度所轄稅務署ノ承認ヲ受クヘシ

輸出ノ目的ヲ以テ製造セラルル織物ノミヲ製造スル製造場ニシテ所轄稅務署ニ於テ取締上不都合ナシト認メタル場合ニ於テハ所轄稅務署ハ前項ノ承認ノ省略ヲ許可スルコトヲ得製品ト爲シテ外國ニ輸出セムトスル織物ノミヲ製造スル製造場又ハ之ヲ搬置スル貯藏場ニシテ所轄稅務署ニ於テ取締上不都合ナシト認メタルトキ亦同シ

前二項ノ場合ニ於テ所轄稅務署カ織物又ハ其ノ製品ノ運搬、搬置其ノ他ノ事項ニ付條件ヲ指定シタルトキハ其ノ條件ニ從フニ非サルハ消費税ノ免除ヲ受クルコトヲ得ス

第九條ノ二 消費税ヲ納付シタル織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ外國ニ輸出スル場合ニ於テ輸出港稅關ノ検査ヲ受ケ其ノ織物又ハ其ノ物品ノ原料タル織物ニ付現金又ハ印紙ヲ以テ消費税ヲ納付シタルノ證據ヲ具シテ出願シタルトキハ消費税額ニ相當スル金額ヲ交付ス但シ印紙ヲ貼用シタル織物ヲ輸出スル場合ニ於テハ消費税額付ノ證據ヲ具スルコトヲ要セス

第十一條 非常特別稅法第八條ノ二ニ依リ政府ノ承認ヲ得又ハ政府ノ免稅證明ヲ受クヘキ場合ニ於テハ所轄稅務署ニ對シテ其ノ承認又ハ免稅證明ヲ求ムヘシ

第九條第三項ノ規定ハ之ヲ前項ノ場合ニ準用ス

第十二條 非常特別稅法第六條及第八條ノ二ノ場合ノ外製造場ヨリ毛織物ヲ引取ラムトスル者ハ其ノ旨製造場所轄稅務署ニ申告シ併シテ其ノ價格ヲ申告スヘシ

第十二條ノ二 毛織物以外ノ織物ニ印紙ヲ貼用スル場合ニ於テハ織物ニ價格ヲ表記シ之ニ相當スル印紙ヲ貼用シ織物面ト印紙ノ彩紋トニカケテ之ニ消印スヘシ但シ印紙貼用者ハ結目ナキ糸ヲ以テ紙片ヲ織物ニ縫著シ紙片ニ價格ヲ表記シ其ノ糸ノ結束シタル場所ニ相當印紙ヲ貼用シ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ之ニ消印スルコトヲ得

第十二條ノ三 非常特別稅法第七條第二項但書ニ依リ税金ノ納付ヲ爲サムトスル者ハ織物ノ移出前其ノ旨所轄稅務署ニ申出ツヘシ此ノ場合ニ於テハ所轄稅務署ハ織物又ハ織物ニ縫著シタル紙片ニ納稅濟ノ旨ヲ記載シタル切符ヲ貼附シ又ハ織物ニ納稅濟ノ證明ヲ押捺スヘシ

第十四條中「本令」ヲ「非常特別稅法」ニ改ム

第十七條ノ二 印紙ヲ貼用シタル織物又ハ納稅濟ノ證印アル織物ニ加工セムトスル場合ニ於テ所轄稅務署ニ申出テ其ノ承認ヲ得タルトキハ代リ印紙ノ交付ヲ請求シ又ハ更ニ納稅濟ノ證印ヲ請求スルコトヲ得

第十七條ノ三 印紙ヲ貼用シタル織物又ハ納稅濟ノ證印アル織物ヲ小切レト爲シテ販賣セムトスルトキハ成ルヘク印紙貼用又ハ證印ナキ部分ヨリ之ヲ切離スヘシ但シ印紙貼用又ハ證印アル部分ヲ切離スル必要アルトキハ其ノ貼用印紙又ハ證印アル部分ヲ切取り之ヲ保存シ毎月分ヲ取継メ之ヲ所轄稅務署ニ提出シ廢棄ノ處分ヲ受クヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一條ノ三ニ依ル申告ハ明治三十八年ニ限り本令施行後十五日以内ニ之ヲ爲スヘシ

明治三十八年法律第一號附則ニ依リ申告又ハ申請ヲ爲シ若ハ税金納付濟ノ證印ヲ受クヘキ場合ニ於テハ所轄稅務署ニ對シテ之ヲ爲スヘシ

朕非常特別稅法ニ依リ輸入稅ヲ増徴シ及課スヘキ物品ノ從量稅目ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

勅令第二號(官報一月二日)

大藏大臣 野村 浩 助

非常特別稅法第二條ニ依リ輸入稅ヲ増徴スヘキ物品及同法第三條ニ依リ輸入稅ヲ課スヘキ物品ニ付關稅定率法第三條ニ依リ從量稅目左ノ通定ム

乾麵包	甲 船用ノモノ	每斤	〇	〇	四
	乙 菓子製ノモノ	每斤	〇	〇	一
乳油		每斤	〇	〇	一
乾酪		每斤	〇	〇	七
咖啡(種子)		每斤	〇	〇	六
生卵		每斤	一	〇	〇
麥粉		每斤	五	六	九
ハム及ベーコン		每斤	〇	七	四
鮮肉(牛肉)		每斤	〇	〇	七
乳膏		每斤	三	四	七
食鹽(海鹽ト礦鹽トヲ別タス)		每斤	三	四	四
甲 粗製ノモノ		每斤	〇	一	一
乙 精製ノモノ		每斤	〇	一	五
鹹魚		每斤	〇	七	一
鹹肉(牛肉若クハ豚肉ノ榨入ニ爲タルモノ)		每斤	三	一	二
石花菜		每斤	〇	八	〇
人造乳油		每斤	〇	五	九
肌衣(上下ヲ別タス、メリヤス製ノモノ)		每十二箇	一	三	五
綿製ノモノ		每十二箇	一	三	九



重炭酸曹達	結晶曹達(洗濯曹達)	撒里矢爾酸曹達	蘇朮	ツアスリン	黃芩	硼酸	醋酸	單寧	炭酸安母紐膜	炭酸結麗阿曹達	重格魯酸刺篤亞斯	紺青(乾濕別タス酸物ヨリ製シタルモノ)	花緑青	沒食子及五倍子	雌黃	水鹽	鉛粉(各色)	ロソワード越幾斯	栲皮	色油	紅花	蘇木
每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
一五〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
八五九	六五九	二七九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九	〇五九

姜黃	郡青	洋漆	支那漆	朱	碗青	白色亞鉛粉	フアステツク越幾斯	大豆	大麥	胡麻子	小麥	綿種子	鹿皮(生乾若クハ鹽漬等ノ治理ヲ經サルモノ)	山馬皮(生乾若クハ鹽漬等ノ治理ヲ經サルモノ)	獸蹄	牛角及水牛角	鹿角	海馬牙	靴底皮	羊革	印度紅革	真鍮
每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤	每百斤
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
二〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇	九二〇

銅	板	筒及管	條及竿	釘	筒及管	日耳曼鋼(板竿及線)	鐵及軟鋼	線索(電線シタルモノ)	線索(電線セサルモノ)	鉛	板	筒及管	鋼(軟鋼ニ非サルモノ)	線(兼骨用凹形ノモノ)	線索(電線シタルト否トヲ別タス)	黃銅	板	條及竿	錫箔	蠟燭	豆油	
每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每
百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百
斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤
二	二	二	二	二	二	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	一	〇	〇	〇	〇	五	七	七	四	四	四	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
七	七	〇	〇	〇	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	三	九	九	九	九	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	六	六	六	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

寬麻子油(縮入樽入及盛入ノモノ)	落花生豆油	石油	阿列布油(縮入及樽入ノモノ)	砂糖(和蘭糖木色相ノ第十五號未滿)	糖蜜	製本用綿布	毛フェルト地	支那絹細	支那絹細	支那絹細	支那絹紋織子	支那絹織子	麻縮絲(無地若クハ染色ノモノ)	フェルト織	靴襪織布	甲 絹入ノモノ	乙 其ノ他各種	手巾	縮製ノモノ(草製)	麻製ノモノ(草製)	麻縮製ノモノ(草製)	草布(家具等ニ用ナルモノ)
每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每	每
百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百
斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤	斤
〇	〇	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	六	五	五	五	二	二	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	五	五	五	五	四	四	八	八	六	九	二	二	九	七	五	五	八	〇	〇	〇	〇	〇
八	八	八	八	八	四	四	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇





第六條ノ三 酒類製造主其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許取消申請書ヲ所轄稅務署ニ提出ス

第六條ノ四 變更其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因リ酒造稅法第五條ノ制限石數以上ノ製造ヲ爲ササ

リシ事由ノ罷明ハ酒造年度終了後三箇月以内ニ之ヲ爲スヘシ

第三十五條第二項ヲ左ノ如ク改ム

收稅官吏ハ必要ナルト認ムルトキハ前項ノ封緘ヲ爲ササルコトヲ得

收稅官吏ハ必要ト認ムルトキハ酒粕又ハ原料用酒類ニ封緘其ノ他監督上必要ナル方法ヲ施スコ

トヲ得

第三十七條 收稅官吏カ必要ト認メテ酒造用原料品ヲ指定シ其ノ使用前検査ヲ受クヘキコトヲ命

シタルトキハ酒類製造主ハ其ノ検査ヲ受クヘシ

第三十九條 左ニ掲クル場合ニ於テ收稅官吏カ必要ト認メテ承認ヲ受クヘキコトヲ命シタルトキ

ハ酒類製造主ハ其ノ承認ヲ受クヘシ

一 熟成シタル酒母ヲ醗ニ仕込マムトスルトキ

二 熟成シタル醗ヲ酒母ニ代用シ添掛ヲ爲サムトスルトキ

三 酒母醗又ハ原料用酒類ノ容器ヲ變換セムトスルトキ

四 仕込濟ノ醗ニ水ヲ混和セムトスルトキ

五 原料用酒類ノ用途ヲ變更セムトスルトキ

六 釀出前ニ於ケル自己製造ノ酒類ニ買入酒類ヲ混和シ又ハ割水ヲ爲サムトスルトキ

七 前各號ノ外收稅官吏カ指定シタル事項ヲ爲サムトスルトキ

第四十三條ノ二 收稅官吏ハ酒類製造主及販賣主ノ營業ニ關シ職務上知得シタル事項ヲ他ニ漏洩

スルコトヲ得ス

附 則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第二百八十七號酒造稅法施行規則(明治二十九年八月十八日官報抄録)

第一條第二項

製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ製造場ヲ定メ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第三十五條第二項

收稅官吏ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ原料用酒類ニ封緘ヲ附スルコトヲ得

第三十七條 酒造用原料品中酒母又ハ醗ノ検査ハ熟成ノ時ニ於テ之ヲ行フ但シ其ノ熟成シタル酒母又ハ醗ヲ製造場内ニ移

入シタルトキハ其ノ移入ノ時ニ於テスヘシ

第三十九條 酒類製造主左ニ掲クル事項ヲ行ハムトスルトキハ收稅官吏ノ承認ヲ受クヘシ

一 熟成シタル酒母ヲ醗ニ仕込ムコト

二 熟成シタル醗ヲ酒母ニ代用シ添掛ヲ爲スコト

三 酒母醗又ハ原料用酒類ノ容器ヲ變換スルコト

四 仕込濟ノ醗ニ水ヲ混和スルコト

五 原料用酒類ノ用途ヲ變更スルコト

六 釀出前ニ於ケル自己製造ノ酒類ニ買入酒類ヲ混和シ又ハ割水ヲ爲スコト

御 名 御 璽

明治三十七年十二月三十一日

大藏大臣 岡田 敬 助

勅令第四號(官報一月一日)

酒精及酒精含有飲料稅法施行規則中左ノ通改正ス

第一條第二項ヲ削ル

第一條ノ二 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ稅務署ハ酒精又ハ酒精含有飲料製造ノ免許ヲ與ヘサルヘシ

一 市街地又ハ稅務署所在地ヨリ一里以上ノ距離アル場所ニ製造場ヲ設ケムトスルトキ但シ稅務署ニ於テ製造又ハ監督上特別ノ便宜アリト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

二 酒精及酒精含有飲料稅法若ハ本令ニ違反シタル者又ハ其ノ戶主家族同居者雇人其ノ他從業者又ハ稅務署ニ於テ取締上免許ヲ與フルニ不適當ト認ムル者カ免許ヲ申請シタルトキ

第六條第二項ヲ左ノ如ク改ム

相續ノ場合ヲ除クノ外酒精又ハ酒精含有飲料製造業ノ引繼ヲ受ケムトスル者ハ第一條ニ依リ酒精又ハ酒精含有飲料製造ノ免許申請書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造者ハ酒精及酒精含有飲料稅法第五條ニ依リ其ノ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

第六條ノ二 酒精又ハ酒精含有飲料製造者其ノ製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄稅務署ニ申請シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第十五條 左ニ掲クル場合ニ於テ收稅官吏カ必要ト認メテ承認ヲ受クヘキコトヲ命シタルトキハ酒精又ハ酒精含有飲料製造者ハ其ノ承認ヲ受クヘシ

一 醱酵液若ハ原料用酒精又ハ酒精含有飲料ヲ他ノ容器ニ移替ヘムトスルトキ  
二 濾過蒸餾又ハ調合ニ著手セムトスルトキ

- 三 原料用酒精又ハ酒精含有飲料ヲ使用セムトスルトキ又ハ其ノ用途ヲ變更セムトスルトキ
  - 四 酒精又ハ酒精含有飲料ノ殘滓等ヲ製造場外ニ移出シ又ハ之ヲ使用シ若ハ他ノ殘滓等ト混合セムトスルトキ
  - 五 自己ノ所有ト否ト問ハヌ製造用容器、器具、器械ヲ製造場外ニ移出セムトスルトキ
  - 六 製造場外ヨリ製造場内ニ酒精又ハ酒精含有飲料ヲ移入セムトスルトキ
  - 七 前各號ノ外收稅官吏カ指定シタル事項ヲ爲サムトスルトキ
- 第十六條 削除
- 附則
- 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第六十五號酒精及酒精含有飲料稅法施行規則(明治三十四年八月二十四日官報)抄錄

第一條第二項

製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ製造場ヲ定メ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第六條第二項

酒精又ハ酒精含有飲料製造業ヲ引繼サムトスルトキハ該受人ト認メシ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第十五條 酒精又ハ酒精含有飲料製造者ハ左ノ場合ニ於テハ收稅官吏ノ承認ヲ受クヘシ

一 醱酵液若ハ原料用酒精又ハ酒精含有飲料ヲ他ノ容器ニ移替ヘムトスルトキ

二 濾過蒸餾又ハ調合ニ著手セムトスルトキ

三 原料用酒精又ハ酒精含有飲料ヲ使用セムトスルトキ又ハ其ノ用途ヲ變更セムトスルトキ

四 酒精又ハ酒精含有飲料ノ殘滓等ヲ製造場外ニ移出シ又ハ之ヲ使用シ若ハ他ノ殘滓等ト混合セムトスルトキ

五 自己ノ所有ト否ト問ハヌ製造用容器、器具、器械ヲ製造場外ニ移出セムトスルトキ

六 製造場外ヨリ製造場内ニ酒精又ハ酒精含有飲料ヲ移入セムトスルトキ

第十六條 酒精又ハ酒精含有飲料製造者製造場所在地ニ現住セサルトキハ酒精及酒精含有飲料稅ニ關スル事務ヲ處理セシムル爲管理人ヲ定メ所轄稅務署ニ申告スヘシ

朕麥酒稅法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

大藏大臣 野村 浩助

勅令第五號(官報一月二日)

麥酒稅法施行規則中左ノ通改正ス

第一條第二項ヲ削ル

第一條ノ二 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ稅務署ハ麥酒製造ノ免許ヲ與ヘサルヘシ

一 市街地又ハ稅務署所在地ヨリ一里以上ノ距離アル場所ニ製造場ヲ設ケムトスルトキ但シ稅務署ニ於テ製造又ハ監督上特別ノ便宜アリト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

二 麥酒稅法若ハ本令ニ違反シタル者又ハ其ノ戶主、家族、同居者、雇人其ノ他從業者又ハ稅務署ニ於テ取締上免許ヲ與フルニ不適當ト認ムル者カ免許ヲ申請シタルトキ

第六條第二項ヲ左ノ如ク改ム

相續ノ場合ヲ除クノ外麥酒製造業ノ引繼ヲ受ケムトスル者ハ第一條ニ依リ麥酒製造ノ免許申請書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造者ハ麥酒稅法第二條ニ依リ其ノ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

第六條ノ二 麥酒製造者其ノ製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄稅務署ニ申請シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第十五條 左ニ掲グル場合ニ於テ收稅官吏カ必要ト認メテ承認ヲ受クベキコトヲ命シタルトキハ

麥酒製造者ハ其ノ承認ヲ受クヘシ

一 麥芽汁ヲ醱酵桶ニ入レムトスルトキ

二 醱酵液ヲ他ノ容器ニ移替ヘムトスルトキ

三 麥酒ノ濾過ヲ爲サムトスルトキ

四 麥酒ノ殘滓等ヲ用井更ニ麥酒ヲ製造セムトスルトキ

五 麥酒ノ殘滓ヲ製造場外ニ移出シ又ハ他ノ殘滓ト混合セムトスルトキ

六 自己ノ所有ト否トヲ問ハズ製造用容器、器具、器械ヲ製造場外ニ移出セムトスルトキ

七 製造場外ヨリ製造場内ニ麥酒ヲ移入セムトスルトキ

八 前各號ノ外收稅官吏カ指定シタル事項ヲ爲サムトスルトキ

第十六條 削除

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第六十八號麥酒稅法施行規則(明治三十四年八月二十四日官報)抄録

第一條第二項

製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄稅務署ニ申請シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第六條第二項

麥酒製造業ヲ醱酵サムトスルトキハ醱酵受入ト速報シ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第十五條 麥酒製造者ハ左ノ場合ニ於テハ收稅官吏ノ承認ヲ受クヘシ

一 麥芽汁ヲ醱酵桶ニ入レムトスルトキ

- 二 酒精液ヲ他ノ容器ニ移替ヘムトスルトキ
  - 三 麥酒ノ濾過ヲ爲サントスルトキ
  - 四 麥酒ノ濾過等ヲ用非更ニ麥酒ヲ製造セムトスルトキ
  - 五 麥酒ノ殘滓ヲ製造場外ニ移出シ又ハ他ノ殘滓ト混合セムトスルトキ
  - 六 自己ノ所有ト否ト問ハス製造用容器等器具等ヲ製造場外ニ移出セムトスルトキ
  - 七 製造場外ヨリ製造場内ニ麥酒ヲ移入セムトスルトキ
- 第十六條 麥酒製造者製造場所在地ニ現住セサルトキハ麥酒稅ニ關スル事務ヲ處理セシムル爲管理人ヲ定メ所轄稅務署ニ申告スヘシ

朕醬油稅則施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

勅令第六號(官報一月二日)

大藏大臣男爵曾禰荒助

醬油稅則施行規則中左ノ通改正ス

- 第一條 醬油ヲ製造セムトスル者ハ製造場ヲ定メ其ノ住所氏名又ハ名稱ヲ記シタル免許申請書ヲ製造場所轄稅務署長ニ提出スヘシ但シ自家用ノミノ醬油ヲ製造セムトスル者ハ其ノ旨ヲ附記スヘシ
- 第二條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ稅務署長ハ醬油製造ノ免許ヲ與ヘサルヘシ
  - 一 市街地又ハ稅務署所在地ヨリ一里以上ノ距離アル場所ニ製造場ヲ設ケムトスルトキ但シ稅務署長ニ於テ製造又ハ監督上特別ノ便宜アリト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス
  - 二 醬油稅則若ハ本令ニ違反シタル者又ハ其ノ戶主家族同居者雇人共ノ他從業者又ハ稅務署

長ニ於テ取締上免許ヲ與フルニ不適當ト認ムル者カ免許ヲ申請シタルトキ

第七條 醬油製造業ヲ相續シタルトキハ相續人ヨリ其ノ旨所轄稅務署長ニ申告スヘシ

相續ノ場合ヲ除クノ外醬油製造業ノ引繼ヲ受ケムトスル者ハ第一條ニ依リ醬油製造ノ免許申請書ヲ所轄稅務署長ニ提出スヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造人ハ醬油稅則第一條ニ依リ其ノ免許ノ取消ヲ求ムヘシ

第七條ノ二 醬油製造人共ノ製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄稅務署長ニ申請シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第七條ノ三 醬油製造人共ノ製造場ヲ廢止セムトスルトキハ免許取消申請書ヲ所轄稅務署長ニ提出スヘシ

第十二條 左ニ掲クル場合ニ於テ收稅官吏カ必要ト認メテ承認ヲ受クヘキコトヲ命シタルトキハ醬油製造人ハ其ノ承認ヲ受クヘシ

- 一 自己ノ所有ト否ト問ハス容器ヲ製造場外ニ移出セムトスルトキ
  - 二 原料用醬油ヲ使用セムトスルトキ
  - 三 諸味又ハ原料用醬油ノ容器ヲ變換セムトスルトキ
  - 四 前各號ノ外收稅官吏カ指定シタル事項ヲ爲サムトスルトキ
- 第二十條ノ二 收稅官吏ハ醬油製造人ノ營業ニ關シ職務上知得シタル事項ヲ他ニ漏洩スルコトヲ得ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

- 勅令第四十六號 醬油稅則施行規則(明治三十三年三月七日官報)抄錄
- 第一條 醬油ヲ製造セムトスル者ハ其ノ製造場及居所、氏名ヲ記シ稅務署長ニ申請シ其ノ免許ヲ受クヘシ但シ自家用ノミノ醬油ヲ製造セムトスル者ハ此ノ旨ヲ附記スヘシ
- 醬油製造場ヲ移轉セムトスルトキハ稅務署長ニ申請シ其ノ免許ヲ受クヘシ
- 第七條 醬油製造人ノ相續人其ノ製造ヲ繼續セムトスルトキハ稅務署長ニ申請シ其ノ免許ヲ受クヘシ
- 相續ノ場合ヲ除外醬油製造ヲ引繼カムトスル者ハ總テ第一條ニ依リ醬油製造ノ免許ヲ受クヘシ此ノ場合ニ於テハ前製造人ハ醬油製造人ハ左ノ場合ニ於テ收稅官吏ノ承諾ヲ受クヘシ
- 第十二條 醬油製造人ハ左ノ場合ニ於テ收稅官吏ノ承諾ヲ受クヘシ
  - 一 自己ノ所有ト否ト否ト問ハス容器ヲ製造場外ニ移サムトスルトキ
  - 二 原料用醬油ヲ使用セムトスルトキ
  - 三 調味又ハ原料用醬油ノ容器ヲ變換セムトスルトキ
- 第十三條 醬油製造人ハ醬油製造用原料品ノ受渡、醬油ノ仕込製成、出入消費ニ關シ詳細ニ其ノ事實ヲ帳簿ニ記載スヘシ

朕酒母醱及醱取締法施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

大藏大臣 岡田 功

勅令第七號(官報一月一日)

酒母醱及醱取締法施行規則

- 第一條 酒類ノ製造免許ヲ受ケスレテ酒母又ハ醱ヲ製造セムトスル者及販賣ノ爲ニ醱ヲ製造セムトスル者ハ製造場ヲ定メ其ノ住所、氏名又ハ名稱ヲ記シタル免許申請書ヲ製造場所轄稅務署ニ提出スヘシ

第二條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ稅務署ハ酒母、醱又ハ醱製造ノ免許ヲ與ヘサルヘシ

一 市街地又ハ稅務署所在地ヨリ一里以上ノ距離アル場所ニ製造場ヲ設ケムトスルトキ但シ稅務署ニ於テ製造又ハ監督上特別ノ便宜アリト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラス

二 酒母醱及醱取締法又ハ本令ニ違反シタル者又ハ其ノ戶主、家族、同居者、雇人共ノ他從業者又ハ稅務署ニ於テ取締上免許ヲ與フルニ不適當ト認ムル者カ免許ヲ申請シタルトキ

第三條 酒母、醱又ハ醱ノ製造場ハ敷地ノ連續スルト否トヲ問ハス總テ一製造場ト認ムヘキモノヲ謂フ

第四條 所轄稅務署ニ於テ必要ト認メ酒母、醱又ハ醱製造場ノ圖面又ハ製造用容器、器具、器械ノ目錄ヲ提出スヘキコトヲ命ジタルトキハ酒母、醱又ハ醱ノ製造者ハ之ヲ提出スヘシ

前項ニ依リ提出シタル容器、器具、器械ヲ修理シ又ハ前項ノ圖面目錄ニ異動ヲ生シタルトキハ其ノ都度申告スヘシ製造者ノ住所、氏名又ハ名稱ニ異動ヲ生シタルトキ亦同シ

第五條 酒母、醱又ハ醱ノ製造者ヨリ前條第一項ノ目錄ヲ提出シ又ハ同第二項ノ申告ヲ爲シタルトキハ所轄稅務署ハ其ノ容器、器具、器械ヲ檢定シ番號、容量、其ノ他必要ナル事項ヲ標記又ハ烙印ニスルコトヲ得

所轄稅務署ニ於テ必要ト認メ檢定前使用スヘカラスルコトヲ命ジタルトキハ製造者ハ製造用容器、器具、器械ノ使用ヲ爲スコトヲ得ス

第六條 酒母、醱又ハ醱製造者ハ毎年十二月中ニ翌年製造スヘキ見込石數、製造者手ノ時期及製造方法ヲ記載シ所轄稅務署ニ申告スヘシ新ニ免許ヲ受ケタル者ハ事業着手前ニ申告スヘシ

酒母、醱又ハ醱ノ製造者其ノ製造ヲ休止セムトスルトキ若ハ製造休止後更ニ製造セムトスルト

キ又ハ前項ニ依リ申告シタル事項ヲ變更セムトスルトキハ其ノ都度申告スヘシ

第七條 酒母、醱又ハ麴ノ製造業ヲ相繼シタルトキハ相繼人ヨリ其ノ旨所轄稅務署ニ申告スヘシ  
相續ノ場合ヲ除クノ外酒母、醱又ハ麴ノ製造業ノ引繼ヲ受ケムトスル者ハ第一條ニ依リ酒母、醱  
又ハ麴製造ノ免許申請書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ

前項ノ免許申請書ニハ引繼ヲ爲サムトスル者ノ同意書ヲ添附スヘシ

第八條 酒母、醱又ハ麴ノ製造者其ノ製造場ヲ移轉セムトスルトキハ移轉先ノ所轄稅務署ニ申請  
シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第九條 酒母、醱又ハ麴ノ製造者其ノ製造場ヲ廢止シタルトキハ其ノ旨所轄稅務署ニ申告スヘシ第  
七條第二項ニ依リ製造業ノ引繼ヲ爲シタルトキ亦同シ

第十條 收稅官吏ハ隨時酒母、醱又ハ麴ノ製造場若ハ麴ノ販賣場ニ臨ミ酒母、醱又ハ麴其ノ原料製  
造用容器器具、器械、建築物若ハ帳簿書類ヲ検査スヘシ

收稅官吏監督上必要ト認メタル場合ニ於テ製造者ヨリ前項ノ物件ニ封印以外ノ適當ナル方法ヲ  
施サムコトヲ申出テタルトキハ之ヲ承認スルコトヲ得

第十一條 收稅官吏カ必要ト認メテ酒母、醱又ハ其ノ原料品ヲ指定シ其ノ釀渡質入消費又ハ使  
用前検査ヲ受クヘキコトヲ命シタルトキハ酒母、醱又ハ麴ノ製造者ハ其ノ検査ヲ受クヘシ

第十二條 酒母ヲ買入レムトスル者ハ其ノ住所、氏名又ハ名稱、酒母ノ數量、用途及買入先ヲ記シ  
ル書面ヲ所轄稅務署ニ提出シ酒母買入認許證ノ交付ヲ請求スヘシ

第十三條 酒母製造者ハ酒母買入認許證ト引換ニ非サレハ酒母ヲ釀渡スコトヲ得ス

酒母製造者ハ前項ノ買入認許證ヲ以テ酒母ノ移出ヲ收稅官吏ニ證明スヘシ

第十四條 酒母ヲ麴ニ混和シタルモノハ酒母ト看做ス

第十五條 酒母、醱又ハ麴製造者ハ少クトモ左ノ事項ヲ帳簿ニ記載スヘシ

一 原料ノ種類、數量、他ヨリ引取リタルモノニ在リテハ引取ノ日及其ノ引取先

二 使用シタル原料ノ種類、數量及其ノ使用ノ日

三 製造シタル酒母、醱又ハ麴ノ數量及其ノ製造ノ日

四 酒母ヲ麴ニ混和シタルトキハ其ノ酒母及麴ノ數量、其ノ混成數量及其ノ混和ノ日

五 使用又ハ他ニ引渡シタル酒母、醱若ハ麴ノ數量及使用又ハ引渡ノ日、引渡シタルモノノ價額  
及引渡先

第十六條 麴請買者ハ少クトモ左ノ事項ヲ帳簿ニ記載スヘシ

一 引取リタル麴ノ數量、價額、引取ノ日及引取先

二 販賣シタル麴ノ數量、價額、販賣ノ日及賣渡先

小賣ノ場合ニ於テハ前項第二號賣渡先ノ記載ヲ要セス

第十七條 收稅官吏カ必要ト認メテ承認ヲ受クヘキコトヲ命シタル事項ニ付テハ酒母、醱又ハ麴  
ノ製造者ハ其ノ承認ヲ受クヘシ

第十八條 酒母、醱及麴取締法第十六條ノ施行ニ付テハ間接國稅犯則者處分法施行規則ノ規定ヲ  
準用ス

附 則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

酒母、醱及麴取締法第二十一條ニ依リ免許ヲ受クヘキ場合ニ於テハ第一條ニ準シ免許申請書ヲ製

造場所轄稅務署ニ提出スヘシ。  
前項ノ場合ニ於テハ第二條ヲ適用セス。

○ 股酒造組合法施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

大藏大臣 野村 浩将

勅令第八號(會令一月二日)

酒造組合法施行規則

- 第一條 酒造組合法ニ依リ酒造組合ヲ設置セムトスルトキハ五名以上ノ同業者ニ於テ共ノ組合ノ區域及酒類ヲ定メ發起ノ認可ヲ地方長官ニ申請スヘシ
- 第二條 酒造組合設立發起ノ認可アリタルトキハ發起人ハ共ノ組合ノ區域内ニ於ケル同業者ニ左ノ事項ヲ通知シ組合設置ノ同意ヲ求ムヘシ
  - 一 組合ノ名稱、區域及酒類
  - 二 組合員タルヘキ者ノ數但シ各種酒類毎ニ之ヲ區別スヘシ
  - 三 組合事業ノ概目
  - 四 創立費及經費ノ概算
  - 五 同意表示ノ形式及期間
- 第三條 法定ノ同意者アリタルトキハ發起人ハ定款ヲ作り遲滞ナク創立總會ヲ召集スヘシ

創立總會ヲ召集スルトキハ少クトモ二週間前ニ會議ノ目的、日時及場所ヲ組合員タルヘキ者ニ通知シ且之ヲ公告スヘシ

前項ノ通知ニハ定款ヲ添附スヘシ

第四條 定款ハ組合員タルヘキ者ノ三分ノ二以上ノ同意アルニ非サレハ之ヲ確定スルコトヲ得ス但シ二種以上ノ酒類製造者組合員タルヘキ場合ニ於テハ各種酒類製造者毎ニ三分ノ二以上ノ同意アルコトヲ要ス

第五條 創立總會ニ於テハ組合員タルヘキ者ハ書面ヲ以テ表決ヲ爲シ又ハ他ノ組合員タルヘキ者ニ委任シテ其ノ表決權ヲ行フコトヲ得

第六條 創立總會ヲ終リタルトキハ發起人ハ法定ノ同意者アリタルコトヲ證スル書類、定款及創立總會ノ決議録ノ原本ヲ添附シ組合設置ノ認可申請書ヲ地方長官ニ提出スヘシ

第七條 創立總會ニ於テハ其ノ議定シタル定款ノ規定ニ從ヒ役員ヲ選舉シ又ハ經費ノ豫算並徵收方法ヲ議定スルコトヲ得

第八條 發起人發起ノ認可アリタル後六箇月以内ニ組合設置ノ認可ヲ申請セサルトキ又ハ公益ヲ害スル行為ヲ爲シタルトキハ地方長官ハ發起ノ認可ヲ取消スコトヲ得

第九條 酒造組合聯合會ノ創立總會ハ其ノ聯合會ヲ組織セムトスル組合ニ於テ選定シタル委員ヲ以テ之ヲ組織ス

第十條 酒造組合聯合會ノ創立總會ヲ終リタルトキハ酒造組合聯合會設置ノ認可申請書ヲ地方長官ニ提出スヘシ

前項ノ認可申請書ニハ定款ヲ添附スヘシ

- 第十一條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ノ創立費及其ノ償却方法ハ創立總會ノ承認ヲ經ヘシ
- 第十二條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ノ定款ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ但シ酒造組合聯合會ノ定款ニハ第十二號及第十三號ノ記載ヲ要セス
  - 一 名稱
  - 二 區域
  - 三 酒類
  - 四 事務所ノ所在地
  - 五 事業
  - 六 役員ノ權限及其ノ選任解任ニ關スル規定
  - 七 總會召集ノ方法
  - 八 會費ノ方法
  - 九 經費ノ負擔及其ノ徵收方法
  - 十 定款違反者處分ノ方法
  - 十一 定款ノ變更ニ關スル手續
  - 十二 酒類製造者ノ造石稅納付ヲ擔保スル場合ニ於ケル決斷方法
  - 十三 酒造稅法施行規則第三十一條第二項ノ通知ヲ受ケタル場合ニ於ケル處分方法
  - 十四 加入及脫退ニ關スル規定
  - 十五 解散ニ關スル規定
- 定款ニハ前項各號ニ掲グルモノノ外酒造組合又ハ酒造組合聯合會ニ於テ必要トスル事項ヲ記載

スルコトヲ得

- 第十三條 定款ノ變更ヲ請定シタルトキハ認可申請書ニ其ノ變更シタル定款及變更ノ理由書ヲ添附シ地方長官ニ提出スヘシ
- 第十四條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ハ左ノ役員ヲ置クヘシ
  - 組合長又ハ聯合會長 一名
  - 評議員 若干名
- 前項ノ役員ノ外定款ノ規定ニ依リ他ノ役員ヲ置クコトヲ得
- 組合長ハ組合員中ヨリ聯合會長ハ聯合會ヲ組織スル酒造組合ノ組合員中ヨリ之ヲ選舉シ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ
- 前項ノ認可申請書ニハ履歴書ヲ添附スヘシ
- 第十五條 組合長又ハ聯合會長ハ酒造組合又ハ酒造組合聯合會ヲ代表シ之ヲ統轄ス
- 組合長又ハ聯合會長故障アルトキハ定款ノ規定ニ依リ他ノ役員之ヲ代理ス
- 評議員ハ組合長又ハ聯合會長ノ諮詢ニ應ジ又ハ定款ノ規定ニ依リ組合又ハ聯合會ノ事務ノ一部ヲ分掌ス
- 第十六條 組合長又ハ聯合會長ヲ解任アリタルトキ及他ノ役員ノ選任又ハ解任アリタルトキハ酒造組合又ハ酒造組合聯合會ヨリ其ノ氏名ヲ地方長官及稅務監督局長ニ報告スヘシ
- 第十七條 組合又ハ組合聯合會ニ於テ定款ノ執行ニ關スル規則ヲ設ケタルトキハ其ノ都府地方長官及稅務監督局長ニ報告スヘシ
- 第十八條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ハ定款ノ規定ニ依リ組合員ノ製品ヲ検査スルコトヲ得



酒造組合又ハ酒造組合聯合會ハ定款ノ規定ニ依リ連約者ニ對シ過意金ヲ徵收スルコトヲ得

第十九條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會ノ經費ノ豫算並徵收方法ハ定款ノ規定ニ從ヒ之ヲ釐定シ

地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

經費ノ決算及業務成績ハ毎年少クトモ一回酒造組合ニ在リテハ組合員ニ酒造組合聯合會ニ在リ

テハ其ノ組合ニ公示シ且地方長官及稅務監督局長ニ報告スヘシ

第二十條 役員ノ闕ケタル場合ニ於テ補選選舉ノ手續ヲ行フヘキ者アラサルトキハ地方長官ハ組

合員ヲ指定シテ其ノ手續ヲ行ハレム

第二十一條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會解散ヲ爲サルトキハ組合員又ハ聯合會ヲ組織ス

ル組合ノ三分ノ二以上ノ同意ニ依リ其ノ事由ヲ具シ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十二條 酒造組合又ハ酒造組合聯合會解散シタルトキハ組合長又ハ聯合會長ヲ以テ其ノ清算

人トス但シ定款ニ別段ノ規定アルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條 前條ノ規定ニ依リテ清算人タル者アラサルトキハ地方長官之ヲ選任ス

第二十四條 清算人共ノ任ニ適セス又ハ不正ノ行爲アリト認ムルトキハ地方長官ハ清算人ヲ改任

スルコトヲ得

第二十五條 清算終了シタルトキハ其ノ結果ヲ地方長官ニ届出ツヘシ

第二十六條 酒造組合法第十條ノ處分ハ地方長官之ヲ行フ

第二十七條 本令中酒造組合又ハ酒造組合聯合會ニ關シ地方長官ニ屬スル事務ニシテ二府縣以上

ニ涉ルモノハ大藏大臣之ヲ行フ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前酒造組合規則ニ依リ爲シタル酒造組合設置ノ手續ハ本令ニ依リ之ヲ爲シタルモノト看

做ス但シ定款ニ記載スヘキ事項ニシテ組合契約書ニ記載ナキモノハ之ヲ釐定シ本令施行後三箇

月以内ニ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

○ 股間接國稅犯則者處分法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

勅令第九號(官報一月一日) 大藏大臣男爵會福亮助

間接國稅犯則者處分法施行規則中左ノ通改正ス

第一條第十號「毛織物消費稅」ヲ「織物消費稅」ニ改メ第十一號ヲ削ル

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○ [參照]

勅令第五十二號間接國稅犯則者處分法施行規則(明治三十三年三月二十三日官報)抄錄

第一條 間接國稅犯則者處分法ニ於テ間接國稅ト稱スルハ左ノ國稅トス

十 毛織物消費稅

十一 石油消費稅

○

朕鹽專賣法第四十五條ニ依ル鹽製造ノ許可ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第十號(官報一月二日)

稅務署長ハ鹽專賣法第四十五條ニ依ル鹽製造ノ許可ニ關スル事務ヲ執行シ稅務監督局長ハ其ノ事務ヲ監督ス

附則

本令ハ鹽專賣法發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朕鹽專賣ノ準備ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第十一號(官報一月二日)

鹽專賣ノ準備ニ關スル事務ヲ掌理セシムル爲大藏省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ主稅局ニ屬セシム

書記官 專任一人

技師 專任一人

屬 專任五十八人  
技手 專任二十五人

朕鹽專賣ノ準備ニ要スル建築事務ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第十二號(官報一月二日)

第一條 鹽專賣ノ準備ニ關スル建築事務ハ臨時煙草製造準備局ヲシテ之ヲ掌理セシム

第二條 鹽專賣ノ準備ニ要スル建築事務ヲ掌理セシムル爲臨時煙草製造準備局ニ臨時左ノ職員ヲ増置シ建築部ニ屬セシム

技師 專任一人

屬 專任三十八人

技手 專任二十五人

朕非常特別稅法中砂糖消費稅、輸入稅及織物消費稅ニ關スル規定ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年十二月三十一日

内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第十三號 (官報一月一日)

非常特別税法中砂糖消費税、輸入税及織物消費税ニ關スル規定ハ同法第一條ヲ除クノ外之ヲ臺灣ニ施行ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

除陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名、御璽

明治三十八年一月四日

陸軍大臣寺内正毅

勅令第十四號 (官報一月六日)

陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則中左ノ通改正ス

第二條ニ左ノ一項ヲ加フ

歸郷療養ヲ爲シタル者歸郷療養ノ期間ヲ過クルモ服役處分決定ニ至ル迄ノ間亦前項ニ同シ

第三條第一項ヲ左ノ如ク改ム

歸郷療養者ニハ歸郷ノ際必要ニ應ジ病衣一具ヲ貸與ス

第六條中「歸郷療養中」ヲ「第二條ノ給與ヲ受クル期間」ニ改ム

第一表中「士官ノ階級ニアラスレテ士官ノ勤務ニ服スル者」ヲ「見習士官、見習主計、見習醫官、見習藥劑官、見習獸醫官ニシテ士官ノ勤務ニ服スル者」ニ「二等軍曹」ヲ「軍曹」ニ「二等軍曹」ヲ「伍長」ニ改ム

第二表備考第一項ヲ左ノ如ク改ム

見習士官、見習主計、見習醫官、見習藥劑官、見習獸醫官ニシテ士官ノ勤務ニ服スル者ニハ准士官ノ額ヲ給ス

〔參照〕

勅令第九十二號陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則(明治三十七年十二月二十七日官報)抄録

第二條 歸郷療養中手付トシテ軍人ニハ第一表ノ金額軍屬ニハ本條三分ノ二ヲ給ス

第三條 歸郷ノ際歸郷療養ノ者ニ一回限り病衣一具ヲ給ス

第六條 俸給其ノ他從來受クル所ノ給給與ハ歸郷療養中其ノ支給ヲ停止ス

朕艦隊條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名、御璽

明治三十八年一月十二日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第十五號 (官報一月十三日)

艦隊條例中左ノ通改正ス

第二條中「水雷艦隊」ノ下ニ「潜水艦隊」ヲ加フ

〔參照〕

勅令第三百五十六號艦隊條例(明治三十年十月十四日官報)抄録

第二條 艦隊ニハ必要ニ應ジ水雷艦隊、潜水艦隊、水雷敷設隊及運送船病院船工作船等ヲ附ス

朕海軍艦船條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月十二日

海軍大臣 野山 木樨 兵衛

勅令第十六號 (官報一月十三日)

海軍艦船條例中左ノ通改正ス

第三十五條但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ潜水艇ノ乗員及其ノ職務等ニ關シテハ別ニ之ヲ定ム又水雷艇隊ニ編入セサル水雷艇ニ在リ

テハ水雷艇隊司令ノ職權ハ直屬長官之ヲ行フ

第三十六條中「水雷團若クハ要港部ニ屬セシメ」ヲ削ル

〔參照〕

勅令第七十一號海軍艦船條例(明治二十九年三月三十日官報)抄錄

第三十五條 在役艇ニハ水雷團水雷艇隊ノ職員中艦長以下ヲ限ク其ノ職務ニ關シテハ水雷團條例ヲ適用ス但水雷艇隊ニ編入セサル水雷艇ニ在テハ水雷艇隊司令ノ職權ハ直屬長官之ヲ行フ

第三十六條 陸軍艦ハ通常軍港若クハ要港ニ緊密シ水雷團若クハ要港部ニ關セシメ第三十五條ニ掲クル諸員ヲ適宜ニ置クコトヲ得

朕稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月十三日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
大藏大臣 野宮 曾 通 荒助

勅令第十七號 (官報一月十四日)

稅關官制中左ノ通改正ス

第一條第七號中「石油毛織物」ヲ「織物」ニ改ム

第四條中「二百七十六人」ヲ「二百八十四人」ニ「百九人」ヲ「百十二人」ニ「百四十六人」ヲ「百五十二人」ニ「六百六十九人」ヲ「六百八十四人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年一月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第六十一號稅關官制(明治三十二年四月二十二日官報)抄錄

第一條 稅關ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

七 稅關又ハ保險倉庫ヨリ引取ラルル砂糖石油毛織物ノ消費稅及骨牌ノ課稅ニ關スル事項

第四條 稅關ヲ置ク左ノ職員ヲ置ク

事務官補 專任 二百七十六人

監稅 專任 百九人

監定官補 專任 百四十六人

監吏 專任 六百六十九人

朕稅務監督局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月十三日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 男爵 曾根 荒助

勅令第十八號 (官報 一月十四日)

稅務監督局官制中左ノ逋改正ス

第二條中三百九十六人ヲ四百三十三人ニ二百十八人ヲ二百二十八人ニ改メ事務官ノ次ニ左ノ如ク加フ

技師 專任三人

第七條ノ二 技師ハ局長ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ掌ル

附則

本令ハ明治三十八年一月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第二百四十二號稅務監督局官制(明治三十五年十一月一日官報)抄録

第二條 各稅務監督局ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

稅務局 專任三百九十六人 判任

技師 專任百十八人

朕稅務監督官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月十三日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 男爵 曾根 荒助

勅令第十九號 (官報 一月十四日)

稅務監督官制中左ノ逋改正ス

第二條中四千三百六十九人ヲ五千二百七十五人ニ二百八十九人ヲ二百八十八人ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年一月十五日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第二百四十二號稅務監督官制(明治三十五年十一月一日官報)抄録

第二條 各稅務監督局ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

稅務局 專任四千三百六十九人

技師 專任百八十九人

朕擔保トシテ政府ニ納ムヘキ國債證券ノ價格算定ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十日

大藏大臣 男爵 曾根 荒助

勅令第二十號 (官報 一月三十一日)

軍備補充ノ爲及臨時事件費支辨ノ爲發行シタル國債證券ヲ法律命令ノ規定ニ依リ政府ニ納ムヘキ保證金共ノ他ノ擔保ニ充テムトスルトキハ其ノ最低發行價格ニ依リ保證價格ヲ算定スヘシ但シ假證券ノ價格ハ其ノ拂込濟ノ金額ニ依ル

朕明治三十六年勅令第二百八十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十日

大藏大臣 男爵 曾禰 荒助

勅令第二十一號 (官報 一月三十一日)

明治三十六年勅令第二百八十三號第一項中「又ハ」ヲ削リ「日本興業銀行法第十二條」ノ下ニ「又ハ貯蓄債券法」ヲ加フ

〔參照〕

勅令第二百八十三號(明治三十六年十二月十九日官報)抄録  
日本興業銀行法第三十四條又ハ日本興業銀行法第十二條ニ依リ發行スル債券ハ會計規則第六十九條及第三百三條ノ保證金ニ使用スルコトヲ得

朕陸海軍軍人軍屬旅費前金渡ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十日

海軍大臣 男爵 山本 權兵衛  
大藏大臣 男爵 曾禰 荒助  
陸軍大臣 寺内 正毅

勅令第二十二號 (官報 一月三十一日)

陸海軍軍人軍屬ノ旅行ニシテ其ノ種類ニ依リ旅費ノ前金渡ヲ必要トスルトキハ出發ノ際順路ノ行

程ニ應レ旅費ヲ前金渡スルコトヲ得

前金渡ヲ爲スヘキ旅行ノ種類ハ主務大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

附則

本令施行ノ期日ハ主務大臣各別ニ之ヲ定ム

明治三十一年勅令第四十六號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

明治三十一年六月二十勅令第四十六號ハ海軍軍人軍屬旅費前金渡ノ件ナリ

朕臨時陸軍中央金櫃部條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十五日

陸軍大臣 寺内 正毅

勅令第二十三號 (官報 一月二十六日)

臨時陸軍中央金櫃部條例

第一條 臨時陸軍中央金櫃部ハ戰時又ハ事變ニ際シ之ヲ東京ニ置キ臨時陸軍經費ニ關スル收入支出及其ノ計算報告ノ事ヲ掌ル

第二條 臨時陸軍中央金櫃部ニ左ノ職員ヲ置ク

部長 主計正 一人  
部員 主計 十八

但シ内一人ハ三等主計正ト爲スコトヲ得  
下士判任文官 三十八

部員以下ノ職員ハ必要ニ應シ之ヲ増加スルコトヲ得

第三條 部長ハ陸軍省經理局長ニ隸シ部務ヲ掌理ス但シ金額ノ收支ニ關シテハ陸軍會計監督部長ノ區處ヲ受ク

第四條 部員ハ部長ノ命ヲ承ケ部務ヲ分掌ス

第五條 下士判任文官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス

朕在韓國帝國公使館ニ警視ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十八日

内閣總理大臣伯耆桂 太郎  
外務大臣男爵小村壽太郎

勅令第二十四號(官報一月三十一日)

第一條 在韓國帝國公使館ニ警視一人ヲ置クコトヲ得

第二條 警視ハ韓國駐帝國公使ノ命ヲ承ケ警察ニ關スル事項ヲ掌ル

第三條 警視ハ委任トシ其ノ官等ハ高等官四等以下六等以上トス

警視ノ俸給及旅費ニ付テハ其ノ官等ニ應シ公使館ニ等書記官又ハ公使館三等書記官ニ關スル規定ヲ準用ス

朕海軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年一月二十八日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第二十五號(官報一月三十一日)

海軍給與令中左ノ通改正ス

第六表末欄ニ左ノ一號ヲ加フ

六 潜水艦隊司令タル中佐ニハ二圓少佐ニハ一圓七十錢潜水艦長タル大尉ニハ九十錢其ノ他ノ

潜水艦乗員ニハ本表金額ノ二倍ヲ給ス

第七表末欄ニ左ノ一號ヲ加フ

四 潜水艦乗員ニハ本表金額ノ二倍ヲ給ス

朕臺灣總督府國語傳習所官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第二十六號(官報二月三日)

臺灣總督府國語傳習所官制ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕臺灣ニ於ケル蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二日

内務大臣子爵芳川顯正

勅令第二十七號(官報二月三日)

- 第一條 臺灣總督ハ土地ノ狀況ニ依リ蕃人ノ子弟ヲ就學セシムヘキ公學校ヲ設置セシムルコトヲ得
- 第二條 前條ニ依リ設置シタル公學校ニ就學スル蕃人ノ子弟ニ對シテハ授業料ヲ徵收セス
- 第三條 第一條ニ依リ設置シタル公學校ノ經費ハ地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得
- 第四條 第一條ニ依リ設置スル公學校ニハ臺灣公學校令第一條ノ認可ヲ要セス

附則



本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕俘虜收容所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二日

陸軍大臣寺内正毅

勅令第二十八號(官報二月三日)

俘虜收容所條例

- 第一條 俘虜收容所ハ陸軍ノ管轄ニ屬スル俘虜ノ收容及取締ニ關スル事項ヲ掌ル
- 第二條 俘虜收容所ハ必要ニ應ジ之ヲ設置ス其ノ位置及開閉ハ陸軍大臣之ヲ定ム
- 第三條 俘虜收容所ハ所在地衛戍司令官之ヲ管理シ陸軍大臣ノ監督ニ屬ス
- 第四條 俘虜收容所衛戍地外ニ在ルトキハ最寄衛戍地衛戍司令官之ヲ管理ス
- 第五條 所長ハ衛戍司令官ニ隸シ收容所一切ノ事務ヲ掌理ス
- 第六條 所長ハ俘虜ノ取締ニ關シテハ收容所ニ派遣セラレタル衛兵ヲ指揮スルノ權ヲ有ス
- 第七條 所員 軍醫正、軍醫及主計ハ所長ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス
- 第八條 下士判任文官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス
- 第九條 前項ニ依リ派遣セラレタル者ハ所長ノ指揮監督ヲ承クルモノトス

- 第七條 所員 軍醫正、軍醫及主計ハ所長ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス
  - 第八條 下士判任文官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ニ服ス
  - 第九條 前項ニ依リ派遣セラレタル者ハ所長ノ指揮監督ヲ承クルモノトス
- 朕專賣局作業會計規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月四日

大藏大臣野村胡堂

勅令第二十九號(官報二月六日)

專賣局作業會計規則中左ノ通改正ス

第九條中但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ煙草賣拂代金ニ限リ翌年度七月三十一日迄ハ當該年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

〔參照〕

勅令第二十號專賣局作業會計規則(明治三十三年二月二日官報)抄録

第九條 毎年度内ニ歳入ヲ爲スヘキ權利ヲ得テ當該年度内ニ歳入額トナラサルモノハ歳入未済トシテ順次翌年度ニ繰越シ  
現ニ歳入ヲナシタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ但シ明治三十年勅令第三百七十五號ニ依リ延納ヲ許シタル鹽課金ノ代金  
ニ限リ翌年度七月三十一日迄ハ當該年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

朕海軍服制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月四日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第三十號(官報二月六日)

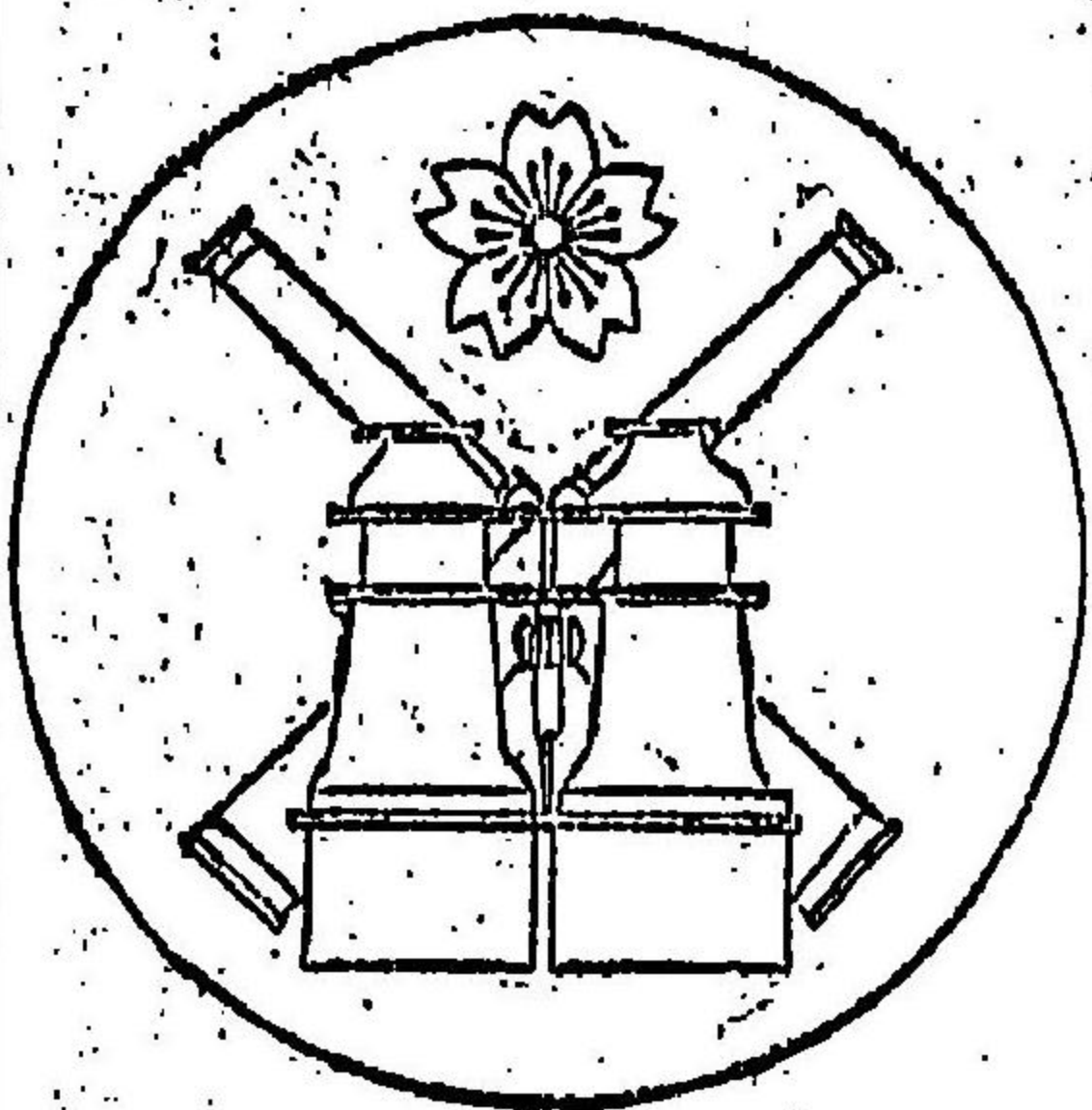
海軍服制中左ノ通改正ス

下士卒臂章表中特技章ノ部信號證狀所有者章ノ欄ヲ左ノ如ク改ム

高等信號修業證書 所有者章	高等信號修業證書ヲ 有スル者	一等信號證狀ヲ 有スル者	二等信號證狀ヲ 有スル者
高等信號修業證書 所有者章	二等信號證狀ヲ交又シタル上 ニ雙眼鏡ヲ附シ其ノ直 上ニ櫻花ヲ附ス	雙眼鏡及櫻花	雙眼鏡

海軍服制圖中臂章ノ部二等水雷兵臂章ノ圖ノ次ニ左ノ圖ヲ加フ

高等信號修業證書ヲ有スル者



除服制ノ地質ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第三十一號(官報二月十四日)

諸服制中地質ニ絨ヲ用ツヘキモノハ當分ノ内適宜ノ地質ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

前項ニ場合ニ於テ地質給與員數使用期限等ニ關シ特別ノ規定ヲ要スルモノハ主務大臣之ヲ定ム

朕農商務省主管ノ國有林產物品ヲ問屋營業者ニ委託シテ隨意契約ニ依ル賣拂ヲ爲スコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十三日

農商務大臣男爵清浦奎吾  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三十二號(官報二月十四日)

農商務省主管ノ國有林產物品ハ海外輸出ノ目的ヲ以テスル場合ニ限リ問屋營業者ニ委託シテ隨意契約ニ依ル賣拂ヲ爲スコトヲ得

前項ニ依リ賣拂ヲ委託スルコトヲ得ヘキ問屋營業者ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ニ限ル

- 一 營業稅年額二百五十圓以上ヲ納ムル者
- 二 資本又ハ金錢ヲ目的トスル出資ノ拂込總額五萬圓以上ヲ有スル會社又ハ組合
- 三 外國ニ在ル者ニ在リテハ帝國領事ニ於テ五萬圓以上ノ資産ヲ有シ信用確實ナリト認メタル者

朕臺灣總督府稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十四日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
內務大臣子爵芳川顯正

勅令第三十三號(官報二月十五日)

臺灣總督府稅關官制中左ノ通改正ス

第一條第六號中「石油、毛織物」ヲ「織物」ニ改ム

〔參照〕

勅令第四十七號臺灣總督府稅關官制(明治三十四年四月十一日官報)抄録

第一條 臺灣總督府稅關ハ臺灣總督ノ管理ニ關シ左ノ事項ヲ掌ル

六 稅關又ハ保險倉庫ヨリ引取ラルル砂糖、石油、毛織物、消費稅及骨牌ノ課稅ニ關スル事項

朕租稅其ノ他ノ歳入金ノ代用證券取扱ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十六日

大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第三十四號(官報二月十七日)

租稅其ノ他ノ歳入金ノ代用トシテ證券ノ納付ヲ受ケタル場合ニ於テハ收入官吏及金庫ヲシテ現金ニ準レテ其ノ取扱ヲ爲サシムルコトヲ得

朕官設鐵道ニ於テ徵收シタル通行稅ノ拂戻金一時繰替支辨ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十六日

大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第三十五號(官報二月十七日)

官設鐵道ニ於テ徵收シタル通行稅ノ拂戻ヲ要スルトキハ逓信省所管官設鐵道特別會計ニ屬スル諸拂戻金ノ現金前渡ヲ受ケタル出納官吏ハ其ノ現金ヲ以テ一時繰替支辨スルコトヲ得

朕明治三十七年勅令第百六十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月十八日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第三十六號(官報二月二十日)

明治三十七年勅令第百六十一號中左ノ通改正ス  
第一條第二項中「百人」ヲ「二百人」ニ改ム

〔參照〕

勅令第百六十一號(明治三十七年五月二十五日官報)抄録  
第一條(續) 備置ノ經費、俸給及製造ヲ擔當セシムル爲メ、海軍省當局ニ見習員ヲ區クコトヲ得  
見習員ノ數ハ百人ヲ越スルコトヲ得ス

陛下兵卒家族救助令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十日

内務大臣子爵芳川顯正

勅令第三十七號(官報二月二十二日)

下士兵卒家族救助令中左ノ通改正ス

第一條中「補充兵役」ノ下ニ「國民兵役」ヲ加フ

第七條中「現役」ヲ延期セシムルノ下ニ「又ハ志願ニ依リ國民軍ニ編入セラレ」ヲ加フ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第九十四號(下士兵卒家族救助令)(明治三十七年四月四日官報)抄録

第一條 職役ニ際シ召集セラレタル準備役後備補充兵役下士兵卒ノ家族ハ其ノ召集中本令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ救助ス  
第七條 本令ノ規定ハ職役ニ際シ召集セラレタル下士兵卒ノ家族ニ之ヲ適用ス

股種検査手数料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十日

農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第三十八號(官報二月二十一日)

第一條 蠶病豫防法ニ據リ蠶種ノ検査ヲ施行スル道廳府縣ハ蠶種検査請求者ヨリ左ノ區別ニ從ヒ  
手数料ヲ徴收スルコトヲ得

一 原種 一 蠶區ニ付 二 厘以内

二 製絲用種 一枚ニ付 三 釵以内

第二條 前條ニ依リ徴收シタル手数料ハ府縣ノ收入トス但シ北海道廳ニ於テハ北海道地方費沖  
繩縣ニ於テハ國庫ノ收入トス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕巡查看守療治料給助料及用祭料給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
陸軍大臣 寺內正毅  
司法大臣 波多野敬直

勅令第三十九號(官報二月二十四日)

巡查看守療治料給助料及用祭料給與令中左ノ通改正ス

第七條中「海軍監獄看守」ノ下ニ「陸軍警守」ヲ加ヘ「及衆議院守衛」ヲ「衆議院守衛及女監取締」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

女監取締ノ明治三十六年三月三十一日以前ニ於ケル勤績年數ハ巡查看守療治料給助料及用祭料給與令第三條ニ規定スル勤績年數ニ非サルモノト看做ス

〔參照〕

勅令第四百十九號巡查看守療治料給助料及用祭料給與令(明治三十四年七月二十六日官報)抄録  
第七條 本令ハ陸軍監獄看守 海軍監獄看守 海軍警守 貴族院守衛及衆議院守衛ニ之ヲ適用ス

○ 朕山口高等學校ヲ山口高等商業學校ト改稱スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十四日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
文部大臣 久保田讓

勅令第四十號(官報二月二十五日)

山口高等學校ヲ山口高等商業學校ト改稱ス

大學豫科ハ現在生徒ノ爲明治三十九年七月迄之ヲ存置ス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○ 朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ捕獲審檢令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十五日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
海軍大臣伯爵山本權兵衛  
外務大臣伯爵小村壽太郎

勅令第四十一號(官報二月二十七日)

捕獲審檢令中左ノ通改正ス

第五條ノ二 高等捕獲審檢所ニ專任事務官一人ヲ置ク

事務官ハ奏任トシ其ノ官等及俸給ハ各省書記官ノ例ニ依ル

第六條中「竝ニ高等捕獲審檢所事務官ヲ削ル

第七條第二項中「判任官」中「ノ下」ニ又ハ其ノ他ヲ加フ

〔參照〕

勅令第四百十九號捕獲審檢令(明治三十七年八月二十一日官報)抄録

第五條ノ二 高等捕獲審檢所ニ事務官一人ヲ置キ高等行政官ヲ以テ之ニ補ス

第六條 捕獲審檢所及高等捕獲審檢所ノ長官 評定官及檢察官竝ニ高等捕獲審檢所事務官ハ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ之ニ補ス

第七條第二項  
書記ハ判任官ノ中ヨリ各長官之ヲ命ス

朕海軍戰時給與規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十五日

海軍大臣 勇 露山 本 權兵衛

勅令第四十二號 (官報 二月二十七日)

海軍戰時給與規則中左ノ通改正ス

第三條第一項中「派遣セララル者」ノ下ニ「並戰地ニ在ラサルモ特別ノ命令ニ依リ對敵ノ行動ヲ取ル艦艇ニ在ル者」ヲ加フ

第三條ニ左ノ一項ヲ加フ

特別ノ命令ニ依リ對敵ノ行動ヲ取ル艦艇ノ軍人軍屬ノ増俸ハ其ノ行動ノ爲出發スル者ニ在リテハ其ノ日ヨリ、出發セサル者ニ在リテハ現ニ對敵ノ行動ヲ取リタル日ヨリ行動ヲ終ヘ歸著シタル日、行動ヲ終ヘタル日又ハ給與停止ノ前日マテ之ヲ給ス

第十一條ノ二中「候補生及文官」ヲ「候補生、文官、第十條ノ二ニ該當スル者」並營舎ニ屯在スル文官及委任判任待選者ニ改メ

附則

第二條及第三條ノ改正規定ハ開戦ノ始ニ溯リテ之ヲ適用ス

朕戰時又ハ事變ニ際シ臨時特設ノ部局又ハ陸海軍ノ部隊ニ配屬セシメタル文官補闕ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十七日

内閣總理大臣 伯 爵 桂 太郎

勅令第四十三號 (官報 二月二十八日)

戰時又ハ事變ニ際シ臨時特設ノ部局又ハ陸海軍ノ部隊ニ配屬セシメタル文官ハ之ヲ所屬官廳ノ定員外トシ共ノ補闕ヲ爲スコトヲ得

朕明治三十二年勅令第百五十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年二月二十七日

内閣總理大臣 伯 爵 桂 太郎  
農商務大臣 勇 爵 清浦 奎吾

勅令第四十四號 (官報 二月二十八日)

明治三十二年勅令第百五十一號中左ノ通改正ス

第二條中「七人」ヲ「三人」ニ「九十五人」ヲ「十五人」ニ改ム

〔參照〕

勅令第百五十一號臨時林野下展處分調査ニ關スル職員ノ件 (明治三十二年四月十八日官報) 抄録  
第二條 山林事務官ハ班任七人山林局鑑定官ハ班任二人山林局圖及技手ハ班任九十五人ヲ以テ定員トス

朕明治三十七年勅令第二十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第四十五號(官報三月八日)

明治三十七年勅令第二十五號中左ノ通改正ス

第一條中主理三人ヲ主理專任一人ニ改ム

第二條中五人以内ヲ專任二人ニ改ム

第三條ヲ削ル

〔參照〕

勅令第二十五號(明治三十七年二月十日官報)抄録

第一條 各陸軍海軍軍法會議及各海軍合團地軍法會議ニ於ケル主理員ノ定員左ノ如ク定ム

主理 三人

主理 三人

第二條 各陸軍海軍軍法會議及各海軍合團地軍法會議ニ海軍醫官ヲ置ク其ノ定員八五人以内トス

第三條 前二條ノ職員ハ總テ本職アル者ヲ以テ兼務セシム

朕明治三十七年勅令第三十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月七日

勅令第四十六號(官報三月八日)

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
海軍大臣男爵山本權兵衛

明治三十七年勅令第三十一號中左ノ通改正ス

第三條 各臨時海軍監獄ニ左ノ職員ヲ置ク

海軍監獄長 主理ヲシテ  
兼務セシム

海軍監獄書記 一人

海軍監獄看守長 專任一人

海軍監獄看守 專任二人

〔參照〕

勅令第三十一號(明治三十七年二月十二日官報)抄録

第三條 各臨時海軍監獄ニ左ノ職員ヲ置ク

海軍監獄長

海軍監獄書記 一人

海軍監獄看守長 二人

海軍監獄看守 五人

前項ノ職員ハ水職アル者ヲ以テ兼務セシム

朕戰役中諸學校校馬糧增加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

陸軍大臣寺内正毅

勅令第四十七號(官報三月十日)

陸軍給與令ニ定ムル諸學校校馬第一種馬ノ馬糧定量ハ戰役中必要ニ應シ大麥六合以内ヲ増加スル

コトヲ得

前項增加馬糧ノ支給區分ハ陸軍大臣之ヲ定ム

朕海軍給與令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第四十八號(官報三月十日)

海軍給與令中左ノ通改正ス

第六表末欄第六號中「潜水艇長タル」ノ下ニ「少佐ニハ一圓二十錢」ヲ加フ

朕高等教育會館規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
文部大臣 久保田謙



勅令第四十九號(官報三月十日)  
 高等教育會議規則中左ノ通改正ス  
 第四條第一項第七號中「高等師範學校長」「高等商業學校長」及第九號中「高等師範學校附屬中學校主  
 事」下ニ各「一人」ヲ加フ

〔參照〕

- 勅令第五十五號高等教育會議規則(明治三十二年六月十八日官報)抄録
- 第四條 高等教育會議ハ左ノ職員ヲ以テ之ヲ組織ス
- 七 高等師範學校長 女子高等師範學校長 札幌農學校長 高等商業學校長 高等工業學校長 一人 高等學校長 一人 醫學專門  
 學校長 一人 東京外國語學校長 東京美術學校長 東京音樂學校長
- 九 高等師範學校附屬中學校主事 女子高等師範學校附屬高等女學校主事

朕火藏省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十一日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 伯爵 有朋 亮助

勅令第五十號(官報三月十三日)  
 大藏省官制中左ノ通改正ス

第一條中保管物ノ下ニ「信託」ヲ加フ  
 第六條ニ左ノ一號ヲ加フ

二十 信託ニ關スル事項

〔參照〕

- 勅令第三百六十九號大藏省官制(明治三十一年十月二十二日官報)抄録
- 第一條 大藏大臣ハ政府ノ財政ヲ總轄シ會計出納租稅權限權限油庫賣國債貸付預金保管物及銀行ニ關スル事務ヲ管理  
 シ附屬市町村及公共組合ノ財政ヲ監督ス
- 第六條 理財局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

朕海軍工廠資金會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十三日

海軍大臣 伯爵 山本 權兵衛  
大藏大臣 伯爵 有朋 亮助

勅令第五十一號(官報三月十四日)  
 海軍工廠資金會計規則

- 第一條 海軍工廠資金ハ貯蓄材料物品賣拂代金ヲ以テ購入トシ材料物品購入代、製作費、改裝費、修  
 理費並其ノ附屬諸費及損失金ヲ以テ支出トス
- 第二條 海軍工廠資金ノ歳出入實際ノ歳入額及資金ニ屬スル現金ノ持越高ヲ以テ支辨スヘシ
- 第三條 歳入歳出ノ豫算決算ハ作業及鐵道會計規則第二章ノ例ニ依ル
- 第四條 收入支出ノ取扱ハ作業及鐵道會計規則第三章ノ例ニ依ル但シ作業支部局長ノ職務ヲ執行  
 スル官吏ハ海軍大臣之ヲ定ム

第五條 貯蓄材料物品ノ原價ハ購入代價、製作費、改製費、修理費並其ノ附屬諸費ヲ以テ計算スヘシ、但シ市價ノ低落又ハ毀損等ニ因リ其ノ實價減少シタルトキハ毎年度ノ終ニ於ケル市價ニ依リ其ノ價格ヲ改定スヘシ

第六條 貯蓄材料物品ヲ賣拂フトキハ原價ニ損減歩合ヲ加フヘシ

第七條 貯蓄材料物品ノ損減歩合ハ前年度及前前年度ノ損減高ヲ參酌シテ之ヲ定ム

第八條 歳入額、收入未済額資金ニ屬スル現金ノ持越尙總材料物品ノ價格及代價支出済未收材料物品ノ價格ヲ以テ受入トシ、歳出額、支出未済額資金額前受金ノ精算未済額賣拂代收済材料物品ノ價格、賣拂代收未済既出材料物品ノ價格、損失ニ歸シタル材料物品ノ價格及損失金ヲ以テ拂出トシ、受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ、過剩アルトキハ材料物品賣拂益金トシ、海軍工廠資金會計法第六條ニ依リ之ヲ取扱フヘシ

第九條 帳簿ニ關スル規定ハ作業及鐵道會計規則第八章ノ例ニ依ル

第十條 本令ニ規定セサル事項ニ關シテハ會計規則ヲ準用ス

附則

第十一條 本令ハ明治三十八年度ヨリ之ヲ施行ス

第十二條 海軍造兵材料資金造船材料資金會計規則ハ之ヲ廢止ス

レテ三十八年度へ繰越スヘキモノハ三十八年度ニ於テ海軍工廠資金ニ併算整理スルモノトス

朕帝國權内ニ入りタル敵國陸軍ニ屬スル衛生部員ヲシテ衛生勤務ニ従事セシメタル場合ニ於ケル

手當及旅費支給ニ關スル件ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十三日

陸軍大臣寺內正毅

勅令第五十二號 (官報三月十四日)

今回ノ戰役ニ際シ帝國權内ニ入りタル敵國陸軍ニ屬スル衛生部員ヲシテ衛生勤務ニ従事セシメタルトキハ其ノ階級又ハ身分ニ應ジ相當ノ手當ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ衛生部員ヲ歸國セシムル場合ニ於テ必要アルトキハ相當ノ旅費ヲ支給スルコトヲ得

前二項ニ依ル手當及旅費ノ額ハ帝國陸軍衛生部員ノ俸給、給料及旅費ノ額ニ準シ陸軍大臣之ヲ定ム

朕實用新案ニ關スル手數料ノ件ヲ裁可シ、茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十三日

農商務大臣野村浩平

勅令第五十三號 (官報三月十四日)

第一條 實用新案ニ關シ出願、請求又ハ届出ヲ爲ス者ハ左ニ掲クル所ニ依リ手數料ヲ納付スヘシ

一 登録出願

每一件 金二圓

二 再審査請求

每一件 金三圓



大不列顛國皇帝陛下ノ政府ハ時時此等邦土ノ表ヲ日本帝國政府へ通牒スヘシ

第四條

本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准ハ可成速ニ東京ニ於テ交換スヘシ本條約ハ批准交換ノ上ハ直ニ實施セラルレ兩締約國ノ一方カ本條約ヲ終了セムトノ意思ヲ表示シタル日ヨリ六箇月ヲ經過スルマテ其ノ效力ヲ有ス  
右證據トシテ上記ノ各全權委員ハ本條約ニ署名調印スルモノナリ  
明治三十七年八月二十九日即西曆千九百四年八月二十九日東京ニ於テ日本文及英文ニテ認メタル本書各一通ヲ作ル

男爵 小村 壽 太郎 印

クロード、エム、マクドナルド 印

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本國皇帝(御名)此書ヲ見ル有業ニ宣示ス  
朕帝國ト大不列顛國トノ間ニ日本印度間ノ通商ニ關シ明治三十七年八月二十九日東京ニ於テ兩國全權委員ノ記名調印シタル條約ノ各條目ヲ親シク閱覽點檢シタルニ善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右條約ヲ嘉納批准ス  
神武天皇即位紀元二千五百六十五年明治三十八年三月十四日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國 璽

外務大臣男爵小村壽太郎 印

朕稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御 璽

明治三十八年三月十七日

內閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第五十四號(官報 三月十八日)

稅關官制中左ノ通改正ス

第四條中「四十五人」ヲ「五十八人」ニ改ム

附 則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十二年 四月二十日勅令第六十一號稅關官制第四條中四十五人ハ專任技手ノ定員ナリ

朕所得稅法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御 璽

明治三十八年三月十七日

大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第五十五號(官報 三月十八日)

所得稅法施行規則中在ノ遺改正ス

第四條ノ二 所得稅法第十二條但書ニ依リ特ニ所得調查委員會ヲ設クヘキ市又ハ北海道ノ區ハ大藏大臣之ヲ指定ス

第七條ノ二 調査委員選舉人ノ選舉終了シタルトキハ市區町村長又ハ戶長ハ當選人ノ氏名ヲ稅務署長ニ報告スヘシ

第七條ノ三 稅務署長所得稅法第二十一條ニ依リ調査委員選舉ノ期日ヲ公示シタルトキハ同時ニ之ヲ調査委員選舉人ニ通知スヘシ

第十一條ノ二 調査委員會ノ開會日數ハ各調査委員會ノ區域内ニ於ケル前年所得稅納稅者ノ數ニ從ヒ左ノ如ク之ヲ定ム

五千人以上ナルトキ 三十日以内

三千人以上ナルトキ 二十五日以内

千人以上ナルトキ 二十日以内

五百人以上ナルトキ 十五日以内

五百人未満ナルトキ 十日以内

第三十八條 稅金ノ一部ヲ納付シタル後所得金額ノ變更ニ因リ所得稅金額ヲ減シタル場合ニ於テ既納ノ稅金カ變更シタル所得稅金額ニ超過スルトキハ其ノ超過額ヲ還付シ不足スルトキハ其ノ不足額ヲ後納期ニ平分シテ徵收ス

第四十條中住所又ハ居所以外ノ地ニ於テ又ハ住所以外ノ地ニ於テニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年法律第三十四號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第七十八號所得稅法施行規則(明治三十二年三月三十日官報)抄録

第三十八條 前納納稅後所得金額ノ變更ニ因リ所得稅金額ヲ減シタルトキ既納ノ稅金金額以上ナルトキハ其ノ超過額ヲ還付シ金額以下ナルトキハ後納期ニ於テ其ノ不足額ヲ徵收スヘシ

第四十條 納稅義務者住所又ハ居所以外ノ地ニ於テ所得稅ヲ納メタルトキ又ハ所得稅法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有セザルトキハ納稅地ヲ定メ其ノ地ノ稅務署ニ申告スヘシ

朕稅關ニ於ケル内國稅賦課徵收ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十七日

大藏大臣男爵曾根克助

勅令第五十六號(官報三月十八日)

外國ヨリ來航セル旅客ノ携帶品中内國稅ヲ課スヘキ物品アルトキハ稅關官吏ハ關稅法施行規則第三條及第五條ニ準シ直ニ稅金ヲ徵收スルコトヲ得

朕明治三十八年法律第六十六號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月十八日

内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾根克助

勅令第五十七號(官報三月二十日)

明治三十八年法律第六十六號ハ之ヲ臺灣ニ施行ス

朕樞密顧問ノ諮詢及貴族院ノ議決ヲ經テ貴族院令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十日

- 内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎
- 海軍大臣 伯爵 山本權兵衛
- 内務大臣 伯爵 芳川 顯正
- 農商務大臣 伯爵 清浦 奎吾
- 大藏大臣 伯爵 曾 禰 荒助
- 外務大臣 伯爵 小村 壽太郎
- 陸軍大臣 寺内 正毅
- 司法大臣 波多野 敬直
- 逓信大臣 大浦 兼武
- 文部大臣 久保 田 讓

勅令第五十八號(官報三月二十二日)

貴族院令中左ノ通改正ス

第四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項議員ノ數ハ通シテ百四十三人以内トシ伯爵子男爵各其ノ總數ニ比例シテ之ヲ定ム但シ伯爵子男爵各其ノ總數ノ五分ノ一ヲ超過スヘカラス

第五條ニ左ノ一項ヲ加フ

前項議員ノ數ハ百二十五人ヲ超過スヘカラス

〔參照〕

勅令第十一號貴族院令(明治二十二年二月十一日)抄録

第四條 伯爵子男爵ヲ有スル者ニシテ滿二十五歳ニ達シ各其ノ同爵ノ選ニ當リタル者ハ七箇年ノ任期ヲ以テ職員タルヘシ其ノ選舉ニ關ル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前項議員ノ數ハ伯爵子男爵各其ノ總數ノ五分ノ一ヲ超過スヘカラス

第五條 國家ニ勤務アリ又ハ學識アル滿三十歳以上ノ男子ニシテ勅任セラレタル者ハ終身職員タルヘシ

朕海軍探炭所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十日

- 内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎
- 海軍大臣 伯爵 山本權兵衛

勅令第五十九號(官報三月二十二日)

海軍探炭所官制中左ノ通改正ス

第二條中海軍探炭所ハノ下ニ海軍大臣ノ指定スルヲ加フ

第三條第一項中所長ノ次ニ軍醫長ヲ加フ

第四條ノ二 軍醫長ハ所長ノ命ヲ承テ醫務衛生ニ關スル事ヲ掌ル

第七條中職員ノ外ノ下ニ海軍看護手ヲ加フ  
別表ヲ左ノ如ク改ム

海軍探炭所定員表

所長	一	一等看護手	一
軍醫長	一	書記	一
主計長	一	技手	三
主計少監	一		
技師	一		
小計	四人		五人
合計	九人		

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

勅令第三百五十三號海軍探炭所官制(明治三十三年九月一日官報)抄録

第二條 海軍探炭所ハ海軍探炭所長ヲ管轄シ石炭ノ採掘ヲ掌ル所トス

第三條 海軍探炭所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

主計長

前項ノ外技師ヲ置ク

第七條 第三條ニ掲タル職員ノ外書記及技手ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ服務セシム

朕海軍探炭官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十日

内閣總理大臣伯爵桂、太郎  
海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第六十號(官報 三月二十二日)

海軍監獄官制中左ノ通改正ス

第七條中四十八人ヲ五十六人ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

勅令第三百三十五號海軍監獄官制(明治三十二年七月八日官報)抄録

第七條 各海軍監獄ヲ通シテ監獄看守四十八人ヲ置ク判任ノ待遇トス上官ノ命ヲ承ケ看守、護送及門衛等ノ事務ニ服ス

朕明治三十七年勅令第七十九號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第六十一號(官報 三月二十二日)

明治三十七年勅令第七十九號中左ノ通改正ス

海軍運送船通信船病院船及工作船ヲ海軍特設船船ニ改ム

別表中少佐及相澤官ノ欄工作長ノ次ニ主計長ヲ加フ

〔參照〕

明治三十七年三月二十號勅令第七十九號八海軍特設船隻員ノ航海加俸ニ關スル件ナリ

朕通信官署經費渡切規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十日

大藏大臣男爵曾根荒助  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第六十二號(官報三月二十二日)

通信官署經費渡切規則

第一條 逓信大臣ハ其ノ特ニ指定シタル通信官署ニ限リ經費ノ全部又ハ一部ヲ渡切ヲ以テ當該局所長ニ交付スルコトヲ得共ノ歳出科目ノ區分ハ大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第二條 渡切經費ハ年額ニ依リ月割額ヲ定ム毎月之ヲ交付ス但シ特殊ノ事由又ハ土地ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ一時ニ數月分ヲ交付スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十八年度ヨリ之ヲ施行ス

朕公使館領事館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

外務大臣男爵小村壽太郎

勅令第六十三號(官報三月二十三日)

公使館領事館費用條例中左ノ通改正ス

第十八條ニ左ノ一項ヲ加フ

別表第三號ニ掲グル各地間ノ旅行日數ハ同表ニ定ムル豫定日數ニ依ル

第十九條第一項中「旅費」ヲ「船車料」ニ改メ第五項中「船車料」ヲ「旅費」ニ改ム

第二十三條第一項中「船車料」ノ實費ヲ當該官吏ノ受クヘキ船車料ノ三分ノ一ニ改メ第三項ヲ削ル

第二十四條第一項中「日當」ハ別表第三號ノ豫定日數ニ應シ陸行中ハ左ノ定額ヲ給シ航行中ハ別ニ

食料ヲ要スル場合ノ外其ノ十分ノ二箇半ヲ給ス但シ別表第三號ニ規定ナキモノハ實際ノ旅行日數

ニ應シ之ヲ給シ往返一日ヲ出テサルトキハ之ヲ給セズ「日當」ハ定額アルモノハ其ノ定額ニ依リ

其ノ他ノ場合ニハ順路ノ旅行ニ要スヘキ日數若クハ實際ノ旅行日數ニ應シ陸行中ハ左ノ定額ヲ給

シ航行中ハ船賃ノ外別ニ食料ヲ要セサルトキハ其ノ十分ノ二箇半、船賃及食料ヲ要セサルトキハ

其ノ十分ノ五、食料ヲ要シ船賃ヲ要セサルトキハ其ノ十分ノ七箇半、船賃及食料ヲ要スルトキハ其

ノ全額ヲ給ス但シ實際ノ旅行日數中外務大臣ニ於テ自己ノ都合ニ依ルモノト認ムルトキハ之ヲ

控除スルコトヲ得ニ改ム

同條第二項中「航行中」ト看做ス「其ノ十分ノ二箇半」ヲ給スニ改メ第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

「一旅行ニシテ往返一日ヲ出テサルトキハ一日分ノ日當ヲ給シ一旅行終了ノ日更ニ他ノ旅行ヲ命

セラレ直ニ出發シメルトキハ再ヒ其ノ日ノ日當ヲ給セズ



第三十五條 削除

第二十八條第二項中「全額ヲ給ス」ノ下ニ其ノ妻死亡ノトキ亦同シヲ加フ  
別表第二號中「モントリール」ヲ「オツタワ」ニ改メ左ノ如ク加フ

別表第三號ニ左ノ如ク加フ

比沙	5000	1	1000	1000	1	1000
豫定日數表 丙	日數					
津島	天	津間	二			
同	芝	宗間	二			
上	海	草間	二			
笠	山	山間	一			
米	津	山間	二			
群	山	川間	二			
鐵	南	津間	二			
元	山	津間	三			
京城金山	(河車旅行ニ限リ)		二			
比	特	スツツホルト間	四			
オ	ツ	坂間	七			

附則  
本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

【參照】

勅令第百七十一號公使館領事館費用條例(明治二十六年十月三十一日官報)抄録  
第十九條第一項第五項

旅費ハ定額アルモノハ其ノ定額ニ依リ其ノ他ノ場合ニハ總テ實費ヲ給ス但シ經由取附申定額ニ依リ得ル者ハ各其ノ定額ニ依ル

船車料ノ定額ハ外務大臣大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第三十三條第二項第三項

特命全權公使辦理公使臨時代理公使赴任ハ公用機關購取贈物又ハ兼任國及其ノ他ハ旅行スル場合ニ於テ現ニ從者ヲ隨伴スルトキハ從者一人ヲ限リ船車料ノ實費ヲ給ス

從者ノ給給スルハ實費ハ特別ノ場合ヲ除ク外三等船車料ニ限ル

第二十四條 日當ハ別表第三號ノ規定日數ニ應ジ履行中ハ左ノ定額ヲ給シ履行中ハ別ニ食料ヲ要スル場合ノ外其ノ十分ノ二箇中ヲ給ス但シ別表第三號ニ規定ナキモノハ實際ノ旅行日數ニ應ジ之ヲ給シ往返一日ヲ出アサルトキハ之ヲ給セス

甲

乙

丙

尋常全權公使	二十八圓	二十十五圓	十六圓
臨時代理公使	二十八圓	二十十五圓	十六圓
公使館一等書記官	十八圓	十五圓	十圓
公使館二等書記官	十八圓	十五圓	十圓

公使館三等書記官	十四圓
副領事官	十二圓
領事官	八圓
領事官補	八圓
外務書記官	六圓
外務書記官補	六圓
前項甲乙丙各地間ヲ往還スル場合ニ於テハ前項ノ規定ニ依リ其ノ多キニ從ヒ之ヲ給シ海陸兩路ニ跨リタル日ハ陸路定額ヲ給ス但シ本邦内ニ於ケル陸路留日ハ航行中ト看做ス	
第二十五條 航行中船車料及食料ヲ要セサル場合ニ於テハ前條ノ規定ニ從ヒ其ノ日當ノ十分ノ五ヲ給ス食料ヲ要シ船車料ヲ要セサル場合ニ於テハ其ノ十分ノ七前半ヲ給ス	
第二十八條第二項 實費ヲ給スハキ放中ニ於テ死亡シタル者ニハ日當ハ死亡當日ヲ船車料ハ其ノ既ニ拂ヒタル金額ヲ給ス	

朕外國在勤警部巡查任用及支給規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

外務大臣男爵小村壽太郎

勅令第六十四號(官報三月二十三日)

外國在勤警部巡查任用及支給規則中左ノ通改正ス

第八條第一項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ住所ニ於テ免職若ハ休職ヲ命セラレタル者ニハ其ノ命令到達ノ當月迄月俸及在勤月手當ヲ給シ死亡シタル者ニハ死亡ノ當月迄在勤月手當ヲ給ス

第十條中「拾圓ヲ二十五圓ニ改ム」

第十一條第一號ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ外國在勤中ノ巡查ニシテ警部ニ任セラレタル者ニハ五十圓以内ヲ給スルコトヲ得

同條第二號ヲ左ノ如ク改ム

人馬船車料及日當ハ外務大臣大藏大臣ト協議シテ定ムル所ノ定額ニ依リ之ヲ給ス其ノ定額ナキ場合ニ於テハ人馬船車料ハ外務大臣ニ於テ必要ト認メタル實費ヲ給シ日當ハ出發當日ヨリ到着當日迄ノ日數中ヨリ自己ノ都合ニ依リテ費シタル日數ヲ除キ一日ニ付警部ニハ五圓巡查ニハ二圓ノ割合ニ依リ陸路ニ在リテハ其ノ金額海路ニ在リテハ警部ニハ其ノ十分ノ三巡查ニハ其ノ十分ノ五ヲ給ス但シ汽車汽船等ノ實費ヲ給スルトキ其ノ料金ニ等差アルトキハ警部ニハ一等巡查ニハ二等ノ額ヲ給ス海陸兩路ニ跨ルノ日及海路ト雖船賃ノ外別ニ食料ヲ要スルトキハ日當ノ全額ヲ給ス

同條第三號削除

同條第四號ニ左ノ一項ヲ加フ

一旅行ニシテ往返一日ヲ出テサルトキハ一日分ノ日當ヲ給シ一旅行終了ノ日更ニ他ノ旅行ヲ命セラレ直ニ出發シタルトキハ再ヒ其ノ日ノ日當ヲ給セス

同條第五號中「別表ノ日當ヲ日當定額ニ改ム」

同條第六號中「別表ノ日當ヲ日當定額ニ本令ニ依リ日當ヲ給ス」ヲ「本令ニ依リ日當ヲ給スルコトヲ得」ニ前項ヲ前號ニ改ム

同條第七號中「別表ノ日當ヲ日當定額ニ別表ニ規定ヲ定額ニ改ム」

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第十四號外國在勤警部巡査任用及支給規則(明治二十五年二月三日官報)抄録

第八條 外國在勤警部ノ月俸ハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル  
第十條 臨時ノ需要ニ依リ外國在勤巡査ニ代用スル備員ニハ月俸拾圓以内ヲ給シ在勤手當ヲ給セス  
第十一條 外國在勤警部巡査ノ旅費ハ支度料、人馬船車料及日當トシ左ノ各項ニ依リ赴任公用歸朝、賜暇歸朝其他公務ヲ帶  
ル旅行スル場合ニ於テ之ヲ支給ス

一 支度料ハ薪ニ任用セラレタル警部赴任ノトキニ限り左ノ範圍内ニ於テ外務大臣相當ノ額ヲ定メ之ヲ給ス朝鮮國ニ於テ  
薪ニ任用セラレタル警部赴任ノトキ亦同シ其赴任前死亡又ハ官ノ都合ニ依リ其官職ヲ免セラレタル者ニハ其半額ヲ  
給ス

警部 百五十圓以内  
巡査 五十圓以内

二 人馬船車料ハ外務大臣大藏大臣ト協議シテ定ムル所ノ定額ニ依リ之ヲ給ス其定額ナキ場合ニ於テハ實費ヲ給ス但  
車、馬、船等ノ實費ヲ給スルトキ其料金ニ等差アルトキハ警部ニハ一等巡査ニハ二等ノ額ヲ給ス

三 日當ハ別表ニ依リ之ヲ給ス別表中規定ナキ場合ニ於テハ往返一日ヲ超ニタル者三限リ、山嶽ノ日當ハ別表ノ日當ナキ  
日數ニ應ジ一日ニ付警部ニハ五圓巡査ニハ二圓ノ割合ニ依リ隨路ニ在テハ其全額海路ニ在テハ警部ニハ其ノ十分ノ  
三巡査ニハ其ノ十分ノ五ヲ給ス但海陸兩路ニ跨ルノ日及海路ト陸路トニ其全額ノ支拂ヲ要スルトキハ全額ヲ給ス

四 人馬船車料定額及別表ノ日當ヲ給スル場合ノ外本邦内ニ旅行又ハ滞留スルトキハ人馬船車料日當ハ内國旅費規則ニ  
依リ之ヲ給ス但巡査ハ別表ノ例ニ依ル

五 別表ノ日當ヲ給スル場合ニ於テ特別ノ命令ニ依リ又ハ已ニ得サル事故ノ爲メ中途ニ滞留シ豫定日數ヲ超過シタル  
トキハ其超過ノ日數ニ對シ本邦内ニ在テハ内國旅費規則外國ニ在テハ本令ニ依リ日當ヲ給ス但巡査ニ關シ本邦内ニ  
於テハ前項ノ例ニ依ル

六 旅行中ニ死亡シタル者ニハ人馬船車料定額及別表ノ日當ヲ給ス但人馬船車料ハ定額ナキ場合ニハ既ニ支給タル金  
額日當ハ別表ニ規定ナキ場合ニハ死亡ノ日ヤテノ金額ヲ給ス

朕明治三十七年勅令第五百五十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 伯爵 曾根 荒助

勅令第六十五號(官報 三月二十三日)

明治三十七年勅令第五百五十五號中左ノ通改正ス

第一條中「東京又ハ京都ヲ」東京、京都又ハ大阪ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第五百五十五號(明治三十七年五月二十五日官報)抄録

第一條 東京又ハ京都煙草製造所ノ所長タル煙草製造所事務官又ハ技師ニハ俸給表内ヨリ年額五百圓以内ノ手當ヲ給ス  
ルニトシテ得

朕明治三十七年勅令第七十號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

大藏大臣 伯爵 曾根 荒助

勅令第六十六號(官報 三月二十三日)

明治三十七年勅令第七十號中「煙草製造所」ヲ「煙草製造」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十七年六月廿六日勅令第七十號ハ櫻葉製造所ノ現業ニ從事スル判任官及雇員ニハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ勸進手續ヲ給メルトコトヲ得ルノ件ナリ

朕國稅徵收法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第六十七號(官報三月二十三日)

國稅徵收法施行規則中左ノ通改正ス

第二十四條第一項ヲ左ノ如ク改ム

賣却シタル財産ニ付滯納者ヲシテ權利移轉ノ手續ヲ爲サシムル必要アルトキハ收稅官吏ハ期限ヲ指定シ共ノ手續ヲ爲サシムヘシ

附則

本令ハ明治三十八年法律第四十六號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第三百三十五號國稅徵收法施行規則明治三十五年四月十一日官報抄録

第二十四條 配名式又ハ指圖式有價証券賣却シタルトキハ收稅官吏ハ期限ヲ指定シ滯納者ヲシテ權利移轉ノ手續ヲ爲サシムヘシ

朕相續稅法施行規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第六十八號(官報三月二十三日)

相續稅法施行規則

第一條 相續開始地ノ稅務署ヲ以テ相續稅ノ所轄稅務署トス

相續開始地カ相續稅法施行地ニ在ラサルトキハ同法施行地ニ在ル相續財產所在地ノ稅務署ヲ以テ所轄稅務署トス相續財產カ二箇以上ノ稅務署管内ニ在ルトキハ其ノ主タル財產ノ所在地ノ稅務署ヲ以テ所轄稅務署トス

第二條 相續開始シタルトキハ相續人 遺言執行者又ハ相續財產管理人ハ相續稅法第十一條第一項ニ定メタル期間内ニ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル書面ニ相續財產目錄及相續財產ノ價格中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ添附シ之ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ但シ相續人二人以上ナル場合ニ於テ其ノ一人ヨリ本條ニ依ル書類ヲ提出シタルトキハ他ノ相續人ハ之ヲ提出スルコトヲ要セズ

- 一 被相續人ノ氏名
- 二 相續開始地
- 三 相續開始ノ日
- 四 家督相續 遺產相續ノ區別
- 五 被相續人カ相續開始前一年内ニ相續稅法施行地ニ在ル財産ニ付贈與ヲ爲シタルトキハ其ノ財産ノ價額及受贈者ノ住所氏名

六 相續人ノ住所氏名

七 相續人ト被相續人トノ續柄

前項ノ書類ヲ提出スル場合ニ於テ相續人確定セサルトキハ前項第六號及第七號ノ代リニ相續人ノ確定セサル理由ヲ記載スヘシ

前項ノ場合ニ於テ相續人確定シタルトキハ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ第一項第六號及第七號ニ掲グル事項ヲ記載シタル書面ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ

相續税法第二十三條ニ依リ遺產相續ノ開始ト看做サルヘキ場合ニ於テハ第一項第一號乃至第三號第六號及第七號ノ事項ヲ記載シタル書面ヲ提出スルヲ以テ足ル

第三條 稅務署長ハ相續財産ノ價額ヲ評定シテ課稅價格ヲ決定シ之ヲ相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ニ通知スヘシ

相續人、遺言執行者又ハ相續財産管理人ハ前項ノ決定ニ對シ其ノ説明ヲ求ムルコトヲ得

第四條 課稅價格ノ決定ニ對シ異議アル者再審査ヲ求ムトスルトキハ其ノ理由ヲ附記シ相續税法第十四條ニ定メタル期間内ニ所轄稅務署長ニ申出ツヘシ

第五條 稅務署長再審査ノ請求ヲ受ケタルトキハ相續稅審査委員會ノ諮問ヲ經テ課稅價格ヲ決定シ之ヲ異議申立人ニ通知スヘシ

第三條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條 各稅務署所轄内ニ相續稅審査委員會ヲ設ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市又ハ北海道沖繩縣ノ區ニ付テハ大藏大臣ハ特ニ審査委員會ヲ置クコトヲ得

第七條 審査委員會ハ大藏大臣ノ命ニ應ジテ收稅官並ニ二名及直接國稅百圓以上ヲ納ムル者三名ヲ以テ之ヲ組織ス

テ之ヲ組織ス

審査委員ノ任期ハ三年トス

第八條 審査委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第九條 審査委員會ハ毎年度初ノ開會ノ時ニ於テ審査委員中ヨリ會長ヲ選舉スヘシ

第十條 審査委員會ノ會長出席セサルトキハ出席シタル審査委員中ノ年長者ヲ代理スヘシ

第十一條 審査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席セルニ非サルハ決議スルコトヲ得

附事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第十二條 審査委員ハ自己又ハ自己ノ親族ノ相續ニ關スル審査ノ附事ニ與ルコトヲ得ス

第十三條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第十四條 相續人二人以上ナル場合ニ於テ相續稅納付前相續財産ノ分割ヲ爲スモ相續稅ハ各相續人連帶シテ之ヲ納付スルコトヲ要ス

第十五條 相續稅ノ年賦延納ヲ求ムトスル者ハ擔保ノ種類及延納期間ヲ記シ相續税法第十七條ノ期間内ニ所轄稅務署ニ出願スヘシ

第十六條 擔保ノ種類ハ左ニ掲グルモノニ限ル

一 稅務署長ニ於テ確實ト認ムル有價證券

二 土地

三 建物

四 稅務署長ニ於テ納稅保證ニ堪フル資力アリト認ムル保證人

第十七條 擔保トシテ有價證券ヲ提供セムトスル者ハ之ヲ供託シ其ノ供託要領書ヲ提出スヘシ

擔保トシテ土地建物ヲ提供シタル者アルトキハ稅務署長ハ抵押權ノ登記ヲ登記所ニ囑託スヘシ  
第十八條 稅務署長ニ於テ擔保物ノ價格減少シタリト認ムルトキハ又ハ保證人ノ資力納稅保證ニ堪  
ヘサルニ至リタリト認ムルトキハ増擔保ヲ提供セシメ又ハ保證人ヲ變換セシムルコトヲ得

第十九條 年賦延納金額ハ相續稅金額ヲ超納年間ニ平分シテ之ヲ定ム

第二十條 増擔保ヲ提供スヘキ場合ニ於テ之ヲ提供セシメ又ハ保證人ヲ變換スヘキ場合ニ於テ之ヲ  
變換セサルトキハ稅務署長ハ年賦延納ノ許可ヲ取消シ稅金ヲ一時ニ徵收スヘシ年賦延納金滯納  
ノ場合ニ於テモ亦同シ

第二十一條 年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續稅ヲ滯納シタルトキハ擔保物アルトキハ擔保物ヲ  
以テ其ノ稅金ニ充テ保證人アルトキハ保證人ニ通知シテ其ノ稅金ヲ納メシム

擔保物ヲ以テ稅金ニ充ツヘキ場合ニ於テ之ヲ公賣ニ付シ相續稅及公賣ノ費用ニ充テ不足アル  
トキハ之ヲ追徵シ殘餘アルトキハ之ヲ還付ス

保證人ニ於テ稅金ヲ完納セサルトキハ納稅者ニ對シ滯納處分ヲ行ヒ仍稅金ニ不足アルトキハ保  
證人ニ對シ滯納處分ヲ行フ

第二十二條 年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續稅ヲ完納シタルトキハ稅務署長ハ擔保解除ノ手續  
ヲ爲スヘシ

第二十三條 相續人、遺言執行者又ハ相續財產管理人相續稅法第十一條ニ依ル書類ヲ期限迄ニ提  
出セサルトキハ所轄稅務署長ハ期間ヲ定メテ之ヲ催告スヘシ

前項ノ期間内ニ書類ヲ提出セサルトキハ所轄稅務署長ハ其ノ認ムル所ニ依リ課稅價格ヲ決定ス  
ヘシ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕監獄官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

內閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
司法大臣 波多野敬直

勅令第六十九號 (宣稱三月二十三日)  
監獄官制中左ノ通改正ス

第三條中「專任七百三十四人」ヲ「專任七百三十一人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十六年三月二十日 勅令第三十五號監獄官制第三條中專任七百三十四人ハ看守長ノ定員ナリ

朕明治二十六年勅令第九十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

文部大臣久保田龍

勅令第七十號(官報 三月二十三日)

明治二十六年勅令第九十三號中左ノ通改正ス

文科大學ノ部國史ヲ國史學ニ改メ、支那哲學、支那史學、支那文學ニ改メ、心理學、倫理學、論理學ニ附座ノ次ニ宗教學一附座ヲ加ヘ、農科大學ノ部家畜內科學、家畜外科學ニ附座ノ次ニ家畜衛生學、家畜藥物學一附座ヲ加フ

朕明治二十六年勅令第六十八號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十二日

文部大臣久保田龍

勅令第七十一號(官報 三月二十三日)

明治三十六年勅令第六十八號中左ノ通改正ス

京都醫科大學ノ部法醫學一附座ノ次ニ耳鼻咽喉科學一附座ヲ加ヘ、福岡醫科大學ノ部病理學一附座ノ次ニ藥物學一附座ヲ加ヘ、內科學ノ下ニ附座ヲ改メ、其ノ次ニ婦人科學、產科學一附座ヲ加フ

朕臨時臺灣土地調查局官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第七十二號(官報 三月二十四日)

臨時臺灣土地調查局官制ハ明治三十八年三月二十二日限り之ヲ廢止ス

朕株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十三日

大藏大臣男爵曾根荒助  
外務大臣男爵小村壽太郎

勅令第七十三號(官報 三月二十四日)

第一條 株式會社第一銀行ノ韓國ニ於ケル業務ハ外務大臣及大藏大臣ノ監督ニ屬ス

第二條 株式會社第一銀行ハ韓國貨幣整理事務、韓國官金取扱及銀行券發行ニ關スル業務ニ付テハ韓國京城ニ設置シタル支店ヲ以テ韓國總支店ト爲シ、韓國各支店、出張所及代理店ヲ總轄セシム

第三條 株式會社第一銀行ハ支店、出張所若ハ代理店ヲ韓國ニ設置シ、又ハ之ヲ廢止セシムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ株式會社第一銀行ニ命ジテ韓國ニ支店又ハ出張所ヲ設置セシムルコトヲ得

第四條 株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ營業業務ノ爲ニ特ニ資本金額ヲ定メテ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 株式會社第一銀行ハ韓國各支店及出張所ニ於テ營業ハキ業務ノ種類及方法ヲ定メテ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 株式會社第一銀行ハ每營業年度韓國各支店及出張所ノ損益勘定ヲ集計シ其ノ總益金ヨリ總損金ヲ差引タル利益金ノ二十分ノ一以上ヲ少クトモ韓國ニ於ケル營業資本金ノ半額ニ達スル迄積立テ特別準備金トシテ京城支店ニ備ヘ置クヘシ

第七條 株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ公私一切ノ取引ニ無制限ニ通用スヘキ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第八條 株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ發行シタル銀行券ハ韓國各支店及出張所ニ於テ營業時間中何時ニテモ通貨ヲ以テ引換フヘシ但シ京城以外ノ支店及出張所ニ於テハ京城支店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其ノ引換ヲ延期スルコトヲ得

第九條 株式會社第一銀行京城支店ハ韓國ニ於ケル其ノ銀行券發行總高ニ對シ同額ノ金貨、金銀地金及日本銀行兌換銀行券ヲ置キ其ノ引換準備ニ充ツヘシ但シ銀地金ハ引換準備總額ノ四分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

前項準備ニ依ルノ外株式會社第一銀行ハ一千萬圓ヲ限リ國債證券、商業手形其ノ他確實ナル證券ヲ保證トシテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ準備價格ハ主務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムヘシ

經濟上ノ景況ニ依リ必要アル場合ニ於テハ主務大臣ノ特ニ指定スル條件ニ依リ前二項ノ外更ニ

銀行券ノ發行ヲ爲スコトヲ得

主務大臣ハ韓國貨幣整理ノ經過又ハ金融ノ狀況ニ依リ必要ト認ムルトキハ銀行券ノ種類及發行高ヲ制限スルコトヲ得

第十條 銀行券ノ種類及種類ニ關シテハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十一條 銀行券ノ所有者ハ韓國ニ於ケル株式會社第一銀行ノ財産ニ付先取特權ヲ有ス

第十二條 株式會社第一銀行ハ韓國政府ト契約ヲ締結シ又ハ韓國政府ヨリ特許特權ヲ受ケムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十三條 主務大臣ハ株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ營業業務ニ關シ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ其ノ韓國各支店、出張所及代理店ノ金庫、券書庫、帳簿其ノ他ノ文書ヲ検査シ又ハ諸般ノ景況及計算ニ關スル報告書ヲ差出サシムルコトヲ得

第十四條 主務大臣ハ必要ト認ムルトキハ株式會社第一銀行ハ韓國ニ於テ營業、貸付、割引ノ金額及方法又ハ其ノ利率歩合其ノ他爲替料等ニ關シ相當ノ制限ヲ爲スコトヲ得

第十五條 主務大臣ハ株式會社第一銀行監理官ヲ置ク

監理官ハ主務大臣ノ指揮ヲ承ケ株式會社第一銀行韓國各支店、出張所及代理店ノ業務ヲ監視ス第十六條 株式會社第一銀行監理官ハ何時ニテモ株式會社第一銀行韓國各支店、出張所及代理店ノ金庫、券書庫、帳簿其ノ他ノ文書ヲ検査シ又ハ諸般ノ景況及計算ニ關スル報告書ヲ差出サシムルコトヲ得

第十七條 株式會社第一銀行ハ銀行券ノ發行額及引換準備ニ關スル平均高表ヲ公告スヘシ公告ノ方法ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依ル



第十八條 株式会社第一銀行ノ定款ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス  
 第十九條 株式会社第一銀行ハ認可ヲ受ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ更ニ認可ヲ受クヘシ  
 第二十條 主務大臣ハ株式会社第一銀行カ法令又ハ定款ニ背反シ若ハ本令ニ基キテ發シタル命令ニ違反シ共ノ他公益ヲ害スル行爲アリト認ムルトキハ役員ノ更任ヲ命ジ、認可ヲ取消シ又ハ轉國ニ於テ營業ノ全部若ハ一部ノ停止ヲ命スルコトヲ得

附則

本令施行前株式会社第一銀行カ韓國ニ於テ發行シタル銀行券ハ本令ニ依リテ發行シタルモノト看做ス

朕花菱検査所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第七十四號(官報三月二十四日)

花菱検査所官制

第二條 花菱検査所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ輸出花菱ノ検査及試験ニ關スル事務ヲ掌ル  
 第二條 花菱検査所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任 三人  
 書記 專任 六人  
 技手 專任 十二人

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中一切ノ事務ヲ掌理ス  
 第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ掌ル  
 第五條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス  
 第六條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス  
 第七條 花菱検査所ニ臨時商議員十名以内ヲ置クコトヲ得  
 商議員ハ現ニ花菱業ニ従事スル者又ハ花菱業ニ關シ學識若ハ經驗アル者ノ中ニ就キ農商務大臣之ヲ命ス  
 第八條 商議員ハ農商務大臣ノ諮詢ニ應シ花菱ノ検査ニ關シ必要ナル事項ヲ審議ス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕製鐵所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第七十五號(官報 三月二十四日)

製鐵所官制中左ノ通改正ス

第二條中四十六人ヲ五十八人ニ七十八人ヲ八十八人ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

明治三十二年四月二十日勅令第三百七號製鐵所官制第二條中四十六人ハ專任書記七十八人ハ專任技手ノ定員ナリ

朕臨時専用漁業免許處分調査ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十三日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第七十六號(官報 三月二十四日)

専用漁業免許處分ノ調査ヲ掌理セシムル爲農商務省ニ臨時左ノ職員ヲ置ク

水産局書記官 專任 二人

技師 專任 三人

屬 專任 十二人

技手 專任 十八人

水産局書記官ハ委任トシ其ノ官等及俸給ハ各省書記官ノ例ニ依ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕登録税法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十四日

大藏大臣男爵曾根克助

勅令第七十七號(官報 三月二十五日)

登録税法施行規則中左ノ通追加ス

第五條ノ二 管海官廳カ船舶法第十四條第二項ニ依リ抹消ノ登録ヲ爲シ其ノ官稅務署ニ通知シ

ルトキハ稅務署ハ納稅告知書ヲ發シ現金ヲ以テ登録稅ヲ徵收スヘシ

附則

本令ハ明治三十八年法律第六十八號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朕明治三十八年法律第十二號ニ依リ英國倫敦及北米合衆國紐育ニ於テ募集スル公債ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十六日

内閣總理大臣伯爵桂 犬郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第七十八號

第一條 明治三十八年法律第十二號ニ依リ英國倫敦及北米合衆國紐育ニ於テ英貨公債三千萬磅ヲ募集ス

本公債ハ引受人ヲ定メ引受發行セシム

第二條 本公債ノ利率ハ一箇年百分ノ四半トス

第三條 本公債ノ元金ハ明治五十八年二月十五日ニ於テ額面金額ヲ以テ之ヲ償還ス但シ明治四十二年二月十五日以後ハ政府ノ都合ニ依リ何時ニテモ六箇月前ニ新聞紙ヲ以テ廣告シ其ノ全部又ハ一部ヲ償還スルコトヲ得

一 償還ノ場合ニハ橫濱正金銀行倫敦支店及橫濱正金銀行紐育出張所ニ於テ慣例ニ從ヒ抽籤ヲ執行シ當籤シタル公債證券ノ記番號ハ元金仕拂ノ期日ヨリ一箇月前ニ新聞紙ヲ以テ廣告スヘシ  
第四條 本公債ノ利子ハ毎年二月十五日及八月十五日ニ於テ各其ノ月末マテノ前六箇月分ヲ仕拂フヘシ

第五條 本公債證券ハ無記名札附トシ英貨ヲ以テ其ノ金額ヲ記載シ百磅、二百磅及五百磅ノ三種トス

英貨ト米貨トノ換算率ハ英貨一磅ニ付米貨四弗八十七仙トス

第六條 本公債元利金ノ償還ハ煙草專賣益金ヲ以テ優先ニ擔保セラルルモノトス  
第七條 本公債發行價格ハ額面百磅ニ付九十磅トス

第八條 本公債ノ元金ハ明治三十八年三月ヨリ同年七月マテニ拂込ムヘシ

前項公債募集金ニ對シテハ明治三十八年八月十五日ニ於テ全年箇年分ノ利子ヲ仕拂フヘシ

朕船舶登記規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十五日

司法大臣波多野敬直  
遞信大臣大浦兼武

勅令第七十九號 (官報 三月二十七日)

船舶登記規則中左ノ通改正ス

第三十條第一項ニ左ノ一號ヲ加フ

五 船舶カ船舶法第二十條ニ掲グル船舶トナリタルトキ

附則

本令ハ明治三十八年法律第六十八號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第二百七十號船舶登記規則(明治三十二年六月十五日)抄録  
第三十條 左ノ場合ニ於テハ所有權ノ登記名義人ハ申請書ニ專山ヲ記載シテ登記ノ抹消ヲ申請スルコトヲ要ス

朕明治三十八年法律第六十七號施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十五日

勅令第八十號(官報三月二十七日)

明治三十八年法律第六十七號ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕在外公館職員定員令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十七日

勅令第八十一號(官報三月二十八日)

在外公館職員定員令中左ノ通改正ス

第一條中「公使館三等書記官ハ通シテ三十人」ヲ「公使館三等書記官ハ通シテ三十二人ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

勅令第二百八十一號在外公館職員定員令(明治三十二年六月二十日官報)抄録

第一條中

公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記官ハ通シテ三十人

司法大臣波多野敬直

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
外務大臣男爵小村壽太郎

總領事館事務官ハ通シテ三十七人

朕大藏省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十七日

勅令第八十二號(官報三月二十八日)

大藏省官制中左ノ通改正ス

第一條中「樟腦樟腦油」ノ下ニ「及鹽」ヲ加フ

第二條中「八人」ヲ「九人」ニ改ム

第五條ニ左ノ一號ヲ加フ

十一 鹽ノ製造、收納、賣渡、輸出入及取締ニ關スル事項

第七條 大藏省ニ專任技師七人ヲ置ク技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ掌ル

第八條 大藏省ニ專任技師十七人ヲ置ク技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ従事ス

第九條中「百九十人」ヲ「二百二十四人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年勅令第十一號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

勅令第三百六十九號大藏省官制(明治三十一年十月二十二日)抄録  
 第一條 大藏大臣ハ政府ノ財務ヲ總括シ會計出納租稅糧賦酒鹽茶葉國貨貨幣預金保管物信託及銀行ニ關スル事務ヲ管理シ府縣郡市町村及公共組合ノ財務ヲ監督ス  
 第二條 大藏省專任事務官ハ二人專任書記官ハ八人ヲ以テ定員トス  
 第三條 主税局長ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル  
 第七條 大藏省ニ專任鑑定官三人專任技師一人ヲ置ク與任トス 鑑定官ハ主税局長ニ技師ハ必要ニ依リ大臣官房其ノ他ニ屬シ其ノ事務ヲ掌ル  
 第八條 大藏省ニ專任鑑定官補四人專任技師三人ヲ置ク與任トス 鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承テ鑑定ノ事務ニ從事シ技師ハ上官ノ指揮ヲ承テ鑑定及ハ電報ノ事務ニ從事ス  
 第九條 大藏省專任局員ハ百九十九人ヲ以テ定員トス  
 明治三十八年三月廿七日勅令第十一號ハ鹽務局ノ設備ニ關スル職員ノ件ナリ

鹽務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御圖

明治三十八年三月二十七日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 男爵 實 業 助

勅令第八十三號(官報三月二十八日)

鹽務局官制

第一條 鹽務局ハ大藏大臣ノ管理ニ屬シ鹽ノ製造收納賣渡輸出入及取締ニ關スル事務ヲ掌ル  
 第二條 各鹽務局ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク  
 局長 專任六人 獎 任

事務官 專任二十五人 獎 任

技師 專任一人

屬 專任九百人 判 任

技手 專任二百十五人

第三條 局長ハ大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理ス

第四條 事務官ハ出張所長メシテ除クノ外鹽務局ニ分屬シ局長ノ指揮ヲ承ケ局務ヲ掌ル

第五條 技師ハ局長ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 屬ハ出張所長メシテ除クノ外局所長ノ指揮ヲ承ケ庶務及検査ニ從事シ技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス

第七條 大藏大臣ハ必要ト認ムル地ニ鹽務局出張所ヲ設ケ鹽務局ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

第八條 鹽務局出張所ニ所長ヲ置キ事務官又ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ

第九條 鹽務局ノ名稱位置及管轄區域ハ別表ニ依ル

附 則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別表)

事務	位	區	管	轄	區	域
札幌鹽務局	北海道	札幌區	北海道			
東京鹽務局	東京府	東京市	東京府	埼玉縣	千葉縣	山梨縣

京都鐵務局	京都府京都市	京都府滋賀縣
大阪鐵務局	大阪府大阪市	大阪府奈良縣 和歌山縣
横濱鐵務局	神奈川縣横濱市	神奈川縣 靜岡縣
神戸鐵務局	兵庫縣神戸市	兵庫縣 (印南郡、飾磨郡、揖保郡、赤穂郡ヲ除ク)
長崎鐵務局	長崎縣長崎市	長崎縣 佐賀縣
長野鐵務局	長野縣長野市	新潟縣 長野縣
宇都宮鐵務局	栃木縣宇都宮市	栃木縣 茨城縣 群馬縣
名古屋鐵務局	愛知縣名古屋市	愛知縣 三重縣 岐阜縣
仙臺鐵務局	宮城縣仙臺市	宮城縣 岩手縣 福島縣
秋田鐵務局	秋田縣秋田市	青森縣 秋田縣 山形縣
金澤鐵務局	石川縣金澤市	石川縣 福井縣 富山縣
松江鐵務局	島根縣松江市	島根縣 鳥取縣
赤穂鐵務局	兵庫縣赤穂郡赤穂町	兵庫縣 (印南郡、飾磨郡、揖保郡、赤穂郡ヲ除ク) 岡山縣 和氣郡
味野鐵務局	岡山縣兒島郡味野村	岡山縣 (和氣郡ヲ除ク) 香川縣 香川郡直島村、仲多度郡本島村、與島村、內與島村
尾道鐵務局	廣島縣尾道市	廣島縣 愛媛縣 (越智郡岩城村、生名村ヲ除ク)
三田尻鐵務局	山口縣佐波郡中關村	山口縣
坂出鐵務局	香川縣坂出郡坂出町	香川縣 (香川郡直島村、仲多度郡本島村、與島村、內與島村ヲ除ク) 愛媛縣 越智郡岩城村、生名村ヲ除ク

播磨鐵務局	徳島縣坂野郡播磨町	徳島縣 高知縣
熊本鐵務局	熊本縣熊本市	熊本縣 福岡縣 大分縣
鹿児島鐵務局	鹿児島縣鹿児島市	鹿児島縣 宮崎縣 沖縄縣

朕明治三十八年勅令第十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十七日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
大藏大臣 伯爵 曾根 荒助

勅令第八十四號 (官報 三月二十八日)

明治三十八年勅令第十二號中左ノ通改正ス

第二條中「一人ヲ二人ニ」「三人ヲ五人ニ」「二十五人ヲ三十五人ニ」改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第十二號(明治三十八年一月一日官報)抄録

第二條 鐵道ノ設備ニ要スル建築事務ヲ掌理セシムル爲臨時鐵道建築備局ニ臨時左ノ職員ヲ増設シ建築部ニ屬セシム

技師 專任一人  
技師 專任三人  
技手 專任二十五人

朕高等官官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第八十五號(官報三月二十八日)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條中各省ノ部樟腦事務局事務官ノ次ニ「鹽務局長ヲ「稅務監督局事務官」ノ次ニ「鹽務局事務官」ヲ加ヘ「大藏省鑑定官」ヲ削ル

文武高等官官等表中大藏省ノ部四等乃至八等ノ欄樟腦事務局事務官ノ次ニ「鹽務局長」ヲ六等乃至九等ノ欄稅務監督局事務官ノ次ニ「鹽務局事務官」ヲ加ヘ四等乃至八等ノ欄大藏省鑑定官ヲ削ル  
高等文官官等相當俸給表中「樟腦事務局事務官」ノ次ニ「鹽務局長」ヲ「稅務監督局事務官」ノ次ニ「鹽務局事務官」ヲ加ヘ「大藏省鑑定官」ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕明治三十一年勅令第三百十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十七日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵會禰荒助

勅令第八十六號(官報三月二十八日)

明治三十一年勅令第三百十五號中「煙草專賣局屬及樟腦事務局屬」ヲ「煙草專賣局屬樟腦事務局屬及鹽務局屬」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十一年勅令第三百十五號ハ前任官俸給令別表ニ掲ケル最低額以下ノ月俸ヲ給スルコトヲ得ル者ノ件ナリ

朕内務省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第八十七號(官報三月二十九日)

内務省官制中左ノ通改正ス

第五條第九號中「官設鐵道」ヲ削ル  
第七條ニ左ノ一號ヲ加フ

六 河川、道路、港灣及砂防ニ係ル事業ノ調査ニ關スル事項  
 第十二條第一項中「五人ヲ三十八人ニ」一人ヲ五人以内ニ第二項中「十二人ヲ九十五人ニ」第三項中「百五十九人ヲ百七十六人ニ」改ム  
 第十二條ノ二 内務大臣ハ必要ニ應シ地方ニ出張所ヲ置キ直轄土木工事並河川、道路、港灣及砂防ノ調査ニ關スル事務ヲ分掌セシムルコトヲ得  
 出張所ニ所長ヲ置キ技師ヲ以テ之ニ充ツ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

土木監督官制明治二十七年勅令第八十四號及同年勅令第八十五號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

- 勅令第二百五十九號内務省官制(明治三十一年十月二十二日)抄録
- 第五條 地方局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
- 九 北海道ニ於ケル林野、官設鐵道及拓殖ニ關スル事項其ノ他北海道ニ關スル事項ニシテ他局ノ所掌ニ屬セサルモノ
- 第七條 土木局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
- 第十二條 内務省ニ專任技師五人ヲ置ク内一人ヲ勅任トス
- 内務省ニ專任技師十二人ヲ置ク
- 内務省屬八百五十九人ヲ以テ定員トス
- 明治二十七年四月四日勅令第八十四號河川、道路、港灣調査ニ關スル職員ノ件、同第八十五號ハ内務省直轄臨時土木工事施行ニ關スル職員ノ件ナリ

朕傳染病研究所官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
内務大臣 子爵 芳川 顯正

勅令第八十八號(宣稱三月二十九日)

傳染病研究所官制

第一條 傳染病研究所ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ傳染病其ノ他病原ノ檢索豫防治療方法ノ研究豫防消毒治療材料ノ檢査、傳染病研究方法ノ講習及痘苗血清其ノ他細菌學的豫防治療品ノ製造ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 傳染病研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長 一人
- 技師 專任七八
- 技手 專任二十三
- 書記 專任七八

前項定員ノ外二十人以内ノ無給技手ヲ置クコトヲ得

第三條 所長ハ勅任トス内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ヲ監督ス

第四條 技師ハ所長ノ指揮ヲ承ケ檢査、研究、講習及製造ニ關スル事務ヲ分掌ス

第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ檢査、研究、講習及製造ニ關スル事務ニ從事ス

第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則



本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
血清藥院官制、痘苗製造所官制、明治二十九年勅令第二百二十四號及明治三十二年勅令第二百二十九號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

明治二十九年五月十九日勅令第二百二十四號ハ血清藥院ニ關シテノ件、同三十二年四月廿四日勅令第二百二十九號ハ痘苗製造所ニ關シテノ件ナリ

朕臺灣總督府專賣局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第八十九號(官報 三月二十九日)

臺灣總督府專賣局官制中在ノ通改正ス

第一條第一項第一號中「及食鹽」ヲ「食鹽及煙草」ニ改メ第三號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

四 煙草ノ耕作及取締ニ關スル事項

第三條中「百人」ヲ「百十八人」「四十人」ヲ「四十九人」「四人」ヲ「八人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第三百六號臺灣總督府專賣局官制(明治三十四年五月二十四日官報)抄録

第一條 臺灣總督府專賣局ハ臺灣總督ノ管理ニ關シテ左ノ事務ヲ掌理ス

一 煙草、樟腦、油、阿片及食鹽ノ收納、貯藏、賣渡、保管、製造及檢査ニ關スル事項

第三條 臺灣總督府專賣局ニ左ノ職員ヲ置ク

審判官 專任百人 判任

技師 專任四十人 判任

通譯 專任四人 判任

朕臺灣總督府地方官官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第九十號(官報 三月二十九日)

臺灣總督府地方官官制中在ノ通改正ス

第一條中「桃仔園廳」ヲ「桃園廳」ニ「阿猴廳」ヲ「阿緬廳」ニ改ム

第三條中「千二百三十八人」ヲ「千二百六十八人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第三百三號臺灣總督府地方官官制(明治三十四年十二月十一日官報)抄録

第一條 臺灣ニ左ノ職ヲ置テ其ノ位置及定員ハ國務卿之ヲ定ム  
第三條 裁判官ハ各縣ヲ通シテ主任千二百三十人ヲ以テ定員トス

朕明治三十五年勅令第七十三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第九十一號(官報 三月二十九日)

明治三十五年勅令第七十三號中左ノ通改正ス

第二條 港務部ヲ置キメル縣ニハ左ノ職員ヲ置ク但シ福岡縣ニハ港務獸醫官、港務獸醫官補ヲ置カス

港務長

港務官

港務獸醫官

屬

港吏

港務醫官補

港務獸醫官補

港務關劑手

第三條 港務長ハ一人、港務官ハ二人、港務醫官ハ一人及港務獸醫官ハ一人委任トス

屬港吏、港務醫官補、港務獸醫官補及港務關劑手ハ判任トシ通シテ七十九人ヲ以テ定員トシ其ノ

各縣ノ定員ハ内務大臣之ヲ定ム其ノ各官ノ定員ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム

第四條中一海港檢疫ニ關スル事項ノ次ニ二輸入獸類ノ檢疫及検査ニ關スル事項ヲ加フ

第八條ノ二 港務獸醫官ハ上官ノ指揮ヲ承ケ獸畜ニ關スル醫務ニ從事ス

第十一條ノ二 港務獸醫官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ獸畜ニ關スル醫務ニ從事ス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第七十三號(明治三十五年三月二十八日官報)抄録

第二條 港務部ヲ置キメル縣ニハ左ノ職員ヲ置ク

港務長

港務官

港務獸醫官

屬

港吏

港務醫官補

港務獸醫官補

一 海軍省官制ニ關スル事項

朕文部省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 答 御 廳

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
文部大臣 久保田 釧

勅令第九十二號(官報三月二十九日)

文部省官制中左ノ通改正ス

第八條ノ二中「四人ヲ五人ニ改ム

第十一條中「五十三人ヲ五十五人ニ改ム

附 則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第二百七十九號文部省官制(明治三十一年十月二十二日)抄録

第八條ノ二 文部省ニ專任補佐四人ヲ附シ擔任トス教科用圖書ノ編修ヲ掌ル

第十一條 文部省員ハ五十三人ヲ以テ定員トス

朕東京帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 廳

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
文部大臣 久保田 釧

勅令第九十三號(官報三月二十九日)

東京帝國大學官制中左ノ通改正ス

第五條第二項中「五十二人ヲ四十九人ニ改ム

第七條第一項中「百十八人ヲ百二十二人ニ改ム

第八條第一項中「五十五人ヲ五十六人ニ改ム

第九條中「百二十二人ヲ百二十四人ニ改ム

附 則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(參照)

勅令第二百十號東京帝國大學官制(明治三十年六月二十二日官報)抄録

第五條第二項

東京帝國大學及分科大學書記ハ通計五十二人ヲ以テ定員トス

第七條 教授ハ專任百十八人擔任又ハ勅任トス各分科大學ニ區ク所ノ講座ヲ擔任シ學生ヲ教授シ其ノ研究ヲ指導ス

第八條 助教授ハ專任五十五人擔任トス教授ヲ助ケテ授業及實驗ニ從事ス

第九條 助學ハ專任百二十二人勅任トス教授助教授ノ指導ヲ承ケ學術技能ニ關スル職務ニ服ス

朕東京帝國大學官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
文部大臣 久保田 讓

勅令第九十四號(官報 三月二十九日)

京都帝國大學官制中左ノ通改正ス

第七條第一項中「六十九人」ヲ「七十六人」ニ改ム

第八條第一項中「三十七人」ヲ「三十九人」ニ改ム

第九條中「九十一人」ヲ「九十六人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第二百一十一號京都帝國大學官制(明治三十年六月二十二日官報)抄録

第七條 教授ハ專任六十九人委任又ハ勅任トス各分科大學ニ置ケルノ講座ヲ擔任シ學生ヲ教授シ其ノ研究ヲ指導ス

第八條 助教授ハ專任三十七人委任トス教授ヲ助ケテ授業及實驗ニ從事ス

第九條 助手ハ專任九十一人勅任トス教授助教授ノ指揮ヲ承ケ學術技術ニ關スル職務ニ服ス

除史料編纂ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
文部大臣 久保田 讓

勅令第九十五號(官報 三月二十九日)

第一條 大日本史料、大日本古文書及之ニ附隨スル書類ノ編纂ヲ爲サシムル爲東京帝國大學文科

大學ニ左ノ職員ヲ置ク

史料編纂官 專任五人委任内一人ヲ勅任ト爲スコトヲ得

史料編纂官補 專任十人判任

史料編纂書記 專任三人判任

第二條 史料編纂官ノ官等ハ高等官二等以下トシ其ノ年俸ハ別表ニ依ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別表)

一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級
上 二千二百圓	千八百圓	千五百圓	千三百圓	千圓	九百圓	七百圓	五百圓
下 二千圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓	八百圓	六百圓	五百圓

朕文部省直轄諸學校官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
文部大臣 久保田 讓

勅令第九十六號(官報 三月二十九日)

文部省直轄諸學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「神戸高等商業學校」ノ次ニ「長崎高等商業學校」ヲ「京都高等工業學校」ノ次ニ名古屋高等工業學校ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第八十六號文部省直轄諸學校官制(明治二十六年八月二十五日官報)抄録  
第一條 文部省直轄諸學校ハ左ノ如シ

朕文部省直轄諸學校職員定員令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
文部大臣 久保田 謙

勅令第九十七號(官報 三月二十九日)

文部省直轄諸學校職員定員令中左ノ通改正ス

東京高等師範學校ノ部教授ノ欄五十八人ヲ五十一人ニ助教諭ノ欄十一人ヲ八人ニ廣島高等師範學校ノ部教授ノ欄二十七人ヲ三十九人ニ改メ助教諭ノ欄十四人ヲ加ヘ助教授ノ欄五人ヲ六

人ニ改メ助教諭ノ欄二人ヲ訓導ノ欄三人ヲ加ヘ女子高等師範學校ノ部教授ノ欄七人ヲ十人ニ助教諭ノ欄十三人ヲ十一人ニ訓導ノ欄十八人ヲ十九人ニ札幌農學校ノ部教授ノ欄十四人ヲ十五人ニ盛岡高等農林學校ノ部教授ノ欄十三人ヲ十六人ニ助教授ノ欄十一人ヲ十五人ニ東京高等商業學校ノ部教授ノ欄三十八人ヲ三十一人ニ神戸高等商業學校ノ部教授ノ欄十一人ヲ十三人ニ助教授ノ欄五人ヲ六人ニ第四高等學校ノ部助教授ノ欄十人ヲ五人ニ東京高等工業學校ノ部教授ノ欄二十四人ヲ二十五人ニ大阪高等工業學校ノ部教授ノ欄十六人ヲ十七人ニ東京音樂學校ノ部教授ノ欄九人ヲ十一人ニ助教授ノ欄十一人ヲ十三人ニ改ム  
神戸高等商業學校ノ次ニ左ノ如ク加フ

長崎高等商業學校 一人 六人 二人 三人

京都高等工業學校ノ次ニ左ノ如ク加フ

名古屋高等工業學校 一人 八人 一人 三人

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕農商務省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 清浦 奎 吾

勅令第九十八號(官報三月二十九日)

農商務省官制中左ノ通改正ス

第十一條中「地質」ノ下「土性」ヲ削ル

第十四條中「三十五人」ヲ「三十九人」ニ「五十一人」ヲ「六十二人」ニ改ム

第十五條中「八十九人」ヲ「九十五人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔参照〕

勅令第二百八十二號農商務省官制(明治三十一年十月二十二日)抄錄

第十一條 地質調査所ニ於テハ地質、土性、地形、油田及分析ニ關スル事務ヲ掌ル

第十四條 農商務省ニ專任技師三十五人專任技手五十一人ヲ置ケ

第十五條 農商務省ハ八十九人ヲ以テ定員トス

朕鐵山監督官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第九十九號(官報三月二十九日)

鐵山監督官制

第一條 鐵山監督署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ鐵業ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 鐵山監督署ヲ通シテ左ノ職員ヲ置ク

鐵山監督署長

五人

奏任

事務官

專任七人

奏任

技師

專任二十二人

書記

專任四十五人

判任

技手

專任百五人

第三條 鐵山監督署長ハ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署中全般ノ事務ヲ掌理ス

鐵山監督署長事故アルトキハ農商務大臣ニ於テ其ノ署高等官ノ一人ニ署長ノ職務代理ヲ命

ス

第四條 事務官ハ鐵山監督署ニ分屬シ事務ヲ掌ル

第五條 技師ハ鐵山監督署ニ分屬シ技術ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル事務ニ從事ス

第八條 鐵山監督署ノ名稱、位置及其ノ管轄區域ハ別表ニ依ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別表)

鐵山監督署名稱位置管轄區域表

名稱	位置	管轄區域
東京鐵山監督署	東京府東京市	東京府 神奈川縣 新潟縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 茨城縣 栃木縣 愛知縣 靜岡縣 山梨縣 岐阜縣 長野縣
仙臺鐵山監督署	宮城縣仙臺市	宮城縣 福島縣 陸奥手縣 青森縣 山形縣 秋田縣
大阪鐵山監督署	大阪府大阪市	京都府 大阪府 兵庫縣 奈良縣 三重縣 滋賀縣 福井縣 石川縣 富山縣 島根縣 岡山縣 廣島縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 愛媛縣 高知縣
福岡鐵山監督署	福岡縣福岡市	長崎縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣 大分縣
札幌鐵山監督署	北海道札幌市	北海道
備考	鐵業ノ區域カニ以上ノ鐵山監督署ノ管轄區域ニ跨カルトハ農商務大臣管轄鐵山監督署ヲ指シテス	

朕農事試驗場官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

勅令第百號(官報三月二十九日)

農事試驗場官制中左ノ通改正ス

第四條中「三十一人」ヲ「三十四人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第十八號農事試驗場官制(明治二十六年四月八日官報)抄錄

第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ職務ヲ履行スル事任技師ハ三十一人ヲ以テ定ムトス

朕遞信省官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

勅令第百一號(官報三月二十九日)

遞信省官制中左ノ通改正ス

第二條中「北海道官設鐵道」ヲ削ル

第三條中「七八」ヲ「八」ニ改ム

明治三十八年三月 勅令 第百一號

內閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
農商務大臣 男爵 浦清奎

內閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
遞信大臣 大浦兼武

第八條中「三十二人」ヲ「三十人」ニ改ム

第九條中「二百二十一」人ヲ「二百四十三人」ニ改ム

第十條中「七十五人」ヲ「七十七人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

- 勅令第百九十五號逓信省官制(明治三十一年十月二十二日抄録)
- 第一條 逓信大臣ハ官設鐵道郵便、小包郵便、郵便爲替、郵便貯金、電信、電話及航路標識ヲ管理シ北海邊官設鐵道、私設鐵道、電氣鐵道、水陸運轉ニ關スル事業及航路船舶海員ヲ監督ス
- 第二條 逓信省專任參事官ハ三人專任郵便官ハ七人ヲ以テ定ム
- 第八條 逓信省ニ專任技師三十二人ヲ置ク但シ内三人以内ヲ勅任トス
- 第九條 逓信省屬ハ專任二百二十一一人ヲ以テ定ム
- 第十條 逓信省ニ專任技師七十五人ヲ置ク

朕明治三十六年勅令第百五十一號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第百二號(官報 三月二十九日)

明治三十六年勅令第百五十一號中左ノ通改正ス

第一條中「十四人」ヲ「十七人」ニ「三十人」ヲ「三十三人」ニ「二千二百十五人」ヲ「二千二百七十七人」ニ「三百五十八人」ヲ「三百四十七人」ニ「二千八百六十八人」ヲ「二千八百六十九人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

- 勅令第百五十一號(明治三十六年十二月五日官報)抄録
- 第一條 逓信省屬職員ノ定員ハ左ノ通トス但シ三等郵便局長ハ定員ノ外トス
- 逓信事務官 專任 十四人
- 逓信技師 專任 三十人
- 逓信屬 專任 二千二百十五人
- 逓信技手 專任 三百五十人
- 逓信手 專任 二千八百六十八人

朕航路標識管理所官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第百三號(官報 三月二十九日)

航路標識管理所官制中左ノ通改正ス

第六條中「三十二」人ヲ「三十三人」ニ改ム



附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第四百五十四號 鐵路標識管理所官制(明治二十六年十月三十一日官報)抄録  
第六條 技師ハ三十二人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承ケ航路標識ニ關スル技術ニ従事ス

朕東京郵便電信學校官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 大郎  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第四百四號(官報 三月二十九日)

東京郵便電信學校官制ハ明治三十八年三月三十一日限り之ヲ廢止ス

朕鐵道作業局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣 伯爵 桂 大郎  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第四百五號(官報 三月二十九日)

鐵道作業局官制中左ノ通改正ス

第六條中「十九人」ヲ「二十二」人ニ改ム

第七條中「八十六人」ヲ「百人」ニ改ム

第八條中「千三百八十人」ヲ「千三百九十四」人ニ改ム

第九條中「三百八十二人」ヲ「四百九十八」人ニ改ム

第十條中「五百五十九人」ヲ「五百八十二」人ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第四百六十八號 鐵道作業局官制(明治三十年八月十八日官報)抄録  
第六條 鐵道事務官ハ主任十九人ヲ任ス各部ニ分屬シ部務ヲ掌ル  
第七條 鐵道技師ハ主任八十六人ヲ以テ定員トシ内三人以内ヲ勅任トス  
第八條 鐵道技師ハ千三百八十人ヲ任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス  
第九條 鐵道技師ハ千三百八十一人ヲ以テ定員トス  
第十條 鐵道技師ハ千五百五十九人ヲ任トス上官ノ指揮ヲ承ケ電報ノ事務ヲ助ク

朕北海道鐵道部官制廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第百六號 (官報 三月二十九日)

北海道鐵道部官制ハ明治三十八年三月三十一日限り之ヲ廢止ス

朕高等官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第百七號 (官報 三月二十九日)

高等官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條第一項中各省ノ部「東京郵便電信學校長」一級俸 二千五百圓 二級俸 二千二百圓 三級俸 一千八百圓及「東京郵便電信學校教授」ヲ削リ第三項中「東京郵便電信學校長」ヲ削ル

文武高等官等俸表中遞信省ノ部三等乃至五等ノ欄「東京郵便電信學校長」六等乃至九等ノ欄「東京郵便電信學校教授」北海道廳ノ部五等乃至七等ノ欄「北海道廳鐵道事務官」ヲ削リ府縣ノ部五等乃至八等ノ欄「府縣港務警官」ノ次ニ「府縣港務警官」ヲ加フ

高等文官等相俸給表中「東京郵便電信學校教授」及「北海道廳鐵道事務官」ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕高等官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第百八號 (官報 三月二十九日)

高等官等俸給令中左ノ通改正ス

第九條中各省ノ部「大林區署事務官」ノ次ニ「鑛山監督署長」ヲ加ヘ「鑛山監督官」ヲ「鑛山監督署事務官」ニ改ム

文武高等官等俸表中農商務省ノ部「大林區署事務官」ノ次三等乃至七等ノ欄ニ「鑛山監督署長」ヲ加ヘ「鑛山監督官」ヲ「鑛山監督署事務官」ニ改ム

高等文官等相俸給表中「大林區署事務官」ノ次ニ「鑛山監督署長」ヲ加ヘ「鑛山監督官」ヲ「鑛山監督署事務官」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕明治三十二年勅令第九十四號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第三百九十九號 (官報 三月二十九日)

明治三十二年勅令第九十四號中「部長ハ高等官三等以下七等以上トシテ附ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治三十二年三月十一日勅令第九十四號ハ傳染病研究所長ハ高等官三等トシ部長ハ高等官三等以下七等以上トシ其ノ年俸ハ技術官俸給令ニ依ルノ様ナリ

朕港務部高等官俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第三百十號 (官報 三月二十九日)

港務部高等官俸給令中左ノ通改正ス

第一條第二項中「港務警官」ノ下ニ「及港務獸醫官」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十八年四月二日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第七十四號港務部高等官俸給令(明治三十五年三月二十八日官報)抄録  
第一條第二項  
港務警官ノ年俸ハ技術官俸給令ニ依ル

朕北海道廳高等官俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第三百十一號 (官報 三月二十九日)

北海道廳高等官俸給令中左ノ通改正ス

第一條中「鐵道事務官」ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第三百十二號 (官報 三月二十九日)

文武判任官等級表申左ノ通改正ス

「帝國大學助手」ノ次ニ

史料編纂官補同	史料編纂官補同	史料編纂官補同	史料編纂官補同
史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同
史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同
史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同	史料編纂書記同

ヲ加ヘ「商船學校助教」ヲ「商船學校助教」ニ改メ「北海道廳鐵道書記」及「北海道廳鐵道技手」ノ項ヲ削リ「港務醫官補」ノ次ニ

港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同
港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同
港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同
港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同	港務醫官補同

ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕北海道廳災救助基金法施行期日ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

内務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第四百十三號(官報三月二十九日)

北海道廳災救助基金法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕漁洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ漁業ノ種類 船舶ノ噸數ノ制限並漁業員ノ資格及定員ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十八日

農商務大臣男爵清浦奎吾  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第四百十四號(官報三月二十九日)

第一條 漁洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ漁業ノ種類左ノ如ク

- 一 鯨漁業
- 二 鰐魚鰓魚類漁業
- 三 旋網漁業
- 四 打網漁業
- 五 流網漁業
- 六 延繩漁業
- 七 立繩漁業
- 八 簗釣漁業

第二條 漁洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ船舶ノ噸數ノ制限左ノ如ク

- 一 鯨漁業 (本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 汽船總噸數八十噸以上百五十噸以下 漁艇ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數百噸以上四百噸以下)

- 一 丙種漁業免狀  
二 丙種漁業免狀
- 二 丙種漁業免狀  
漁獲ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數二十噸以上二百噸以下
- 三 旋網漁業 漁艇ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 汽船總噸數五十噸以上二百噸以下  
帆船總噸數五十噸以上二百噸以下
- 四 打網漁業 本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 汽船總噸數五十噸以上二百噸以下  
帆船總噸數二十噸以上二百噸以下
- 五 流網漁業 本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數三十噸以上三百噸以下  
汽船總噸數三十噸以上三百噸以下
- 六 延繩漁業 本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數三十噸以上二百五十噸以下  
汽船總噸數三十噸以上二百五十噸以下
- 七 立繩漁業 本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數三十噸以上二百五十噸以下  
汽船總噸數三十噸以上二百五十噸以下
- 八 鯉釣漁業 本船ヲ以テ漁獲ヲ爲スモノ 帆船總噸數三十噸以上二百五十噸以下  
汽船總噸數三十噸以上二百五十噸以下
- 九 漁獲物處理運搬業 汽船總噸數八十噸以上三百五十噸以下  
帆船總噸數十五噸以上五百五十噸以下

第三條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ漁獲員ハ漁獲長及漁獲手又ハ漁獲員ニテ年齢滿十六年以上ノ男子ニ限ル

第四條 漁獲長及漁獲手タルヘキ者ハ主務大臣ノ定ムル規定ニ依リ左ノ免狀ヲ有スルコトヲ要ス  
一 甲種漁獲長免狀  
二 乙種漁獲長免狀

乙種漁獲長免狀ヲ有スル者ハ近海航路ニ於テ漁獲業ニ使用スル遠洋漁船ニ限リ、丙種漁獲長免狀ヲ有スル者ハ總噸數二十噸未満ノ遠洋漁船ニ限リ、其ノ漁獲長タルコトヲ得

第五條 遠洋漁業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ下付スルコトヲ得ヘキ漁獲員ノ定員左ノ如シ

業種	船種	定		員	
		漁獲長	漁獲手	漁獲長	漁獲手
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1
汽船	汽船	1	1	1	1
帆船	帆船	1	1	1	1

附則  
本令ハ明治二十八年四月二日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十年勅令第百七十六號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

明治三十年勅令第百七十六號ハ海軍流業獎勵法ニ依リ獎勵金ヲ受クヘキ流業ノ種類及場所並船舶乘組定員ノ件ナリ

朕港務部職員服制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十九日

勅令第百十五號(官報 三月三十日)

港務部職員ノ服制中左ノ通改正ス

港務部職員服制圖例中左ノ如ク改ム

「港務醫官」ヲ「港務醫官」ニ「港務醫官補」ヲ「港務醫官補」ニ改ム

上衣ノ部「袖章」ノ次ニ左ノ如ク加フ

港務醫官ハ左襟ニ金線ヲ以テ「V」ノ形狀圖ノ如シ	港務醫官補ハ左襟ニ金線ヲ以テ「V」ノ形狀圖ノ如シ
-------------------------	--------------------------

服制圖中左ノ如ク改ム

港務長、港務官、港務醫官上衣ノ圖ノ次ニ港務醫官上衣ノ圖ヲ加ヘ港吏、港務醫官補、檢疫員、檢疫

醫官上衣ノ圖ノ次ニ港務醫官補上衣ノ圖ヲ加ヘ上衣袖章、外衿袖章ノ部「港務醫官」ノ次ニ港務醫官補「港務醫官補」ノ次ニ「港務醫官補」ヲ加フ

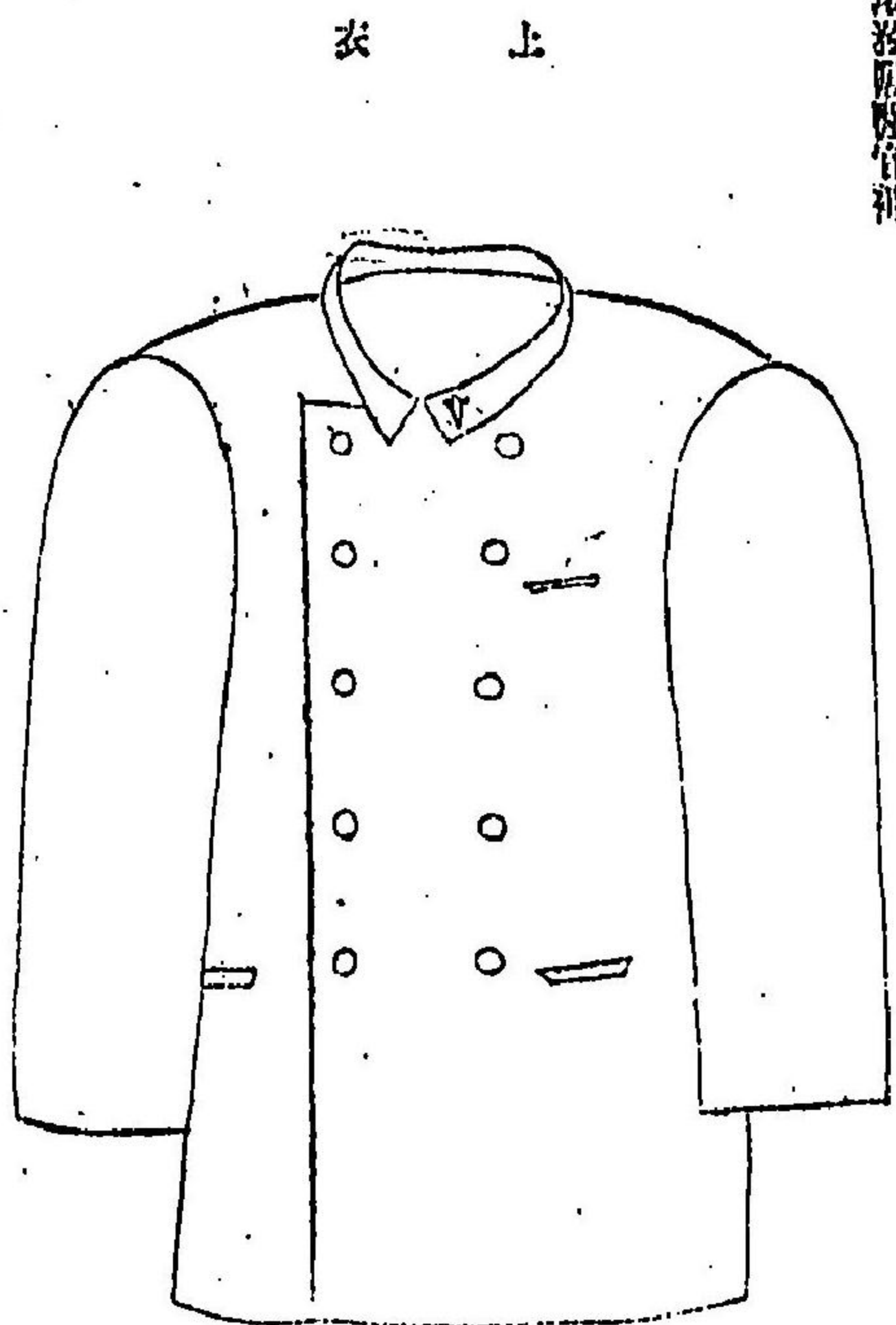
附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

港務醫官



港務監督官制



朕臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第四百七十六號(官報三月三十日)

臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令中左ノ通改正ス

第三條中「百十二人」ヲ「專任百九十一人」ニ改ム

第四條中「五十人」ヲ「專任三十五人」ニ改ム

第九條ノ二 判官檢察官ノ法院内ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ俸給同シキ者ハ種給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第三百七十號臺灣總督府法院職員官等俸給及定員令(明治三十二年八月十四日官報)抄錄

第三條 書記ハ各院ヲ通シテ百十二人トス

第四條 通譯ハ各院ヲ通シテ五十八人トス

朕判事檢察官等俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
司法大臣 渡多野敬直

勅令第四百十七號(官報三月三十日)

判事檢察官等俸給令中左ノ通改正ス

第三條中「三十二人」ヲ「三十一人」ニ改ム  
「百二十人」ヲ「百十八人」ニ改ム  
「三十八人」ヲ「二十九人」ニ改ム  
「八十三人」ヲ「七十

人ニ三百六十一人ヲ二百九十八人ニ三百十八人ニ九十一人ニ五百二十六人ヲ五百九十六人ニ百七十八人ヲ百九十五人ニ改ム

第三條 中地方裁判所ノ部「熊本」ノ下ニ「福岡札幌」ヲ加ヘ「委任八級俸乃至委任五級俸」ヲ「委任七級俸乃至委任四級俸」ニ「委任十一級俸乃至委任九級俸」ヲ「委任十一級俸乃至委任五級俸」ニ改メ「地方裁判所」ノ部「熊本」ノ下ニ「福岡札幌」ヲ加ヘ「委任十一級俸乃至委任九級俸」ヲ「委任十一級俸乃至委任四級俸」ニ「區裁判所」ノ部「委任十一級俸乃至委任九級俸」ヲ「東京 監督判事 委任五級俸又ハ委任四級俸」ニ改メ其ノ次ニ「其ノ他委任十一級俸乃至委任五級俸」ヲ加ヘ「區裁判所」ノ部「委任十一級俸乃至委任五級俸」ヲ「東京 監督判事 委任五級俸又ハ委任四級俸」ニ改メ其ノ次ニ「其ノ他委任十一級俸乃至委任五級俸」ヲ加フ

第四條 勅任五級俸以下ノ俸給ヲ受ケヘキ「地方裁判所」長、檢事正又ハ「區裁判所」監督判事、上席檢事ニシテ其ノ職ノ最高俸給ヲ受ケ五年以上ニ至リ功績アル者ニハ勅任官ニ在リテハ五百圓以内、委任官ニ在リテハ三百圓以内ノ加俸ヲ給スルコトヲ得

第五條 削除  
第六條 削除

第七條 中年俸五百圓ヲ給スルヲ六百圓以内ノ年俸ヲ給スルニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第四百五十三號 裁判事務官等俸給令(明治三十二年四月十八日官報)抄錄

第二條 判事檢事ノ各職ニ付人員ヲ定ムルコト左ノ如シ

控訴院ハ院長七人部長七人判事百二十人ヲ以テ定ム

控訴院檢事局ハ檢事長七人檢事三十人ヲ以テ定ム

地方裁判所ハ所長四十九人部長八十三人判事三百六十一人ヲ以テ定ム

地方裁判所檢事局ハ檢事正四十九人檢事百十人ヲ以テ定ム

區裁判所ハ判事五百二十六人ヲ以テ定ム

區裁判所檢事局ハ檢事百七十七人ヲ以テ定ム

第四條 地方裁判所判事及區裁判所判事ニシテ豫備掛ヲ命セラレタル者ハ百四十五人ヲ限リ委任八級俸乃至委任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第五條 地方裁判所及區裁判所檢事ノ中百二十人ヲ限リ委任八級俸乃至委任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第六條 區裁判所判事ノ内百二十八人ヲ限リ委任八級俸乃至委任五級俸ヲ給スルコトヲ得

第七條 豫備判事及豫備檢事ニハ年俸五百圓ヲ給ス

朕裁判所書記長書記定員及俸給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十九日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎  
司法大臣 波多野敬直

勅令第四百十八號(官報三月三十日)

裁判所書記長書記定員及俸給令中左ノ通改正ス

第二條 中「五百二十五人」ヲ「五百五人」ニ「三千七百五十二人」ヲ「三千七百四人」ニ改ム

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス



〔参照〕

明治二十六年十月三十日勅令第三百七十七號裁判所書記長書記定員及俸給令第二條中五百三十五人ハ地方裁判所書記三千七百五十二人ハ區裁判所及區裁判所檢察局書記ノ定員ナリ

朕特許局官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月二十九日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第三百十九號(官報 三月三十日)  
特許局官制中左ノ通改正ス

第一條第一項中「發明」ノ下ニ「實用新案」ヲ加フ

第二條中「四人」ヲ「八人」ニ「十五人」ヲ「二十四人」ニ「二十人」ヲ「三十一人」ニ「十人」ヲ「二十二」人」ニ「三人」ヲ「六人」ニ改ム

第四條第二項中「特許」ノ下ニ「實用新案」ヲ加フ

第五條中「特許」ノ下ニ「實用新案」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

勅令第三百二十四號特許局官制(明治三十六年十二月五日官報)抄録

第一條 特許局ハ農商務大臣ヲ管理シ職シ發明、意匠及商標ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 特許局長ハ局長ヲ充テ

事務官

專任 四人 兼任

技師

專任 十五人 兼任

審査官

專任 二十人 兼任

審査官補

專任 十人 兼任

技師

專任 三人

第四條第二項

發明官ハ特許、意匠及商標ニ關スル裁判ヲ掌ル

第五條

審査官ハ局長ノ指揮ヲ承テ特許、意匠及商標ニ關スル審査ヲ掌ル

朕權密顧問ノ諮詢ヲ經テ鹽務局職員特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第三百二十號(官報 三月三十一日)

鹽務局職員特別任用令

第一條 鹽務局長ハ當分ノ内滿三年以上高等行政官トシテ稅務、專賣又ハ水產ノ事務ニ從事シタル者ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

第二條 鹽務局事務官ハ當分ノ内左ニ掲クル者ノ中ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

- 一 高等行政官トシテ稅務專賣又ハ水産ノ事務ニ從事シタル者
- 二 滿五年以上稅務專賣又ハ水産ノ事務ニ從事シ判任官四級俸以上ノ俸給ヲ受ケ現ニ其ノ職ニ在ル者
- 三 帝國大學分科大學若ハ高等商業學校專攻科ヲ卒業シ滿一年以上又ハ高等商業學校ヲ卒業シ滿二年以上專賣ノ事務ニ從事シタル者
- 第三條 鹽務局屬ハ當分ノ内左ニ掲グル者ノ中ヨリ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得
  - 一 大藏屬
  - 二 稅務屬
  - 三 樟腦事務局屬
  - 四 煙草專賣局屬
- 第四條 大藏省稅務監督局、稅務署、樟腦事務局及煙草專賣局ノ雇ニシテ鹽務局雇トナル者ハ文官任用令第六條ノ勅續者トス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際ニ限リ鹽務局長ハ滿三年以上高等技術官トシテ稅務專賣若ハ水産ノ事務ニ從事シタル者ヨリ、鹽務局事務官ハ高等技術官トシテ稅務專賣若ハ水産ノ事務ニ從事シタル者ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

本令施行ノ後二箇年間ニ限リ鹽務局屬ハ滿三年以上鹽製造ノ業務ニ從事シタル者ヨリ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

鹽委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第二百二十一號(官報三月三十一日)

明治二十六年勅令第九十六號中左ノ通改正ス

第一條中「樟腦事務局」ノ下ニ「鹽務局」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔參照〕

明治二十六年十月三十日勅令第九十六號八月條十五圖未滿ノ判任官特別任用ノ件ナリ

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ鹽務局見習員ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第二百二十二號(官報三月三十一日)

第一條 鹽ノ鑑定事務ヲ練習セシムル爲鹽務局ニ見習員ヲ置クコトヲ得

見習員ノ數ハ各鹽務局ヲ通シテ五十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 見習員ハ高等小學校ヲ卒業シ若ハ中學校二年以上ノ課程ヲ修メタル者又ハ之ト同等以上ノ學科ヲ修メタル者ヨリ之ヲ採用ス

第三條 二年以上見習員トシテ勤続シタル者ハ文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ鹽務局ノ技手ニ任用スルコトヲ得

第四條 見習員ニハ月額十五圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行後二箇年間ハ本令第三條ノ年限ニ拘ラス見習員ヲ技手ニ任用スルコトヲ得

朕明治三十三年勅令第三百八十五號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第二百二十三號(官報三月三十一日)

明治三十三年勅令第三百八十五號中「六十四人」ヲ「四百八十五人」ニ改ム

〔參照〕

明治三十三年ハカニ勅令第三百八十五號臨時國有林野特別經營ニ關スル職員ノ件中六十四人ハ專任營林技師八百五人ノ專任山林局書記及營林技師ノ定員ナリ

朕臨時國有林作業ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第二百二十四號(官報三月三十一日)

國有林作業ニ關スル業務ヲ整理セシムル爲農商務省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ山林局及林區署ニ分屬セシム

山林局技師 專任 七人

山林局技手 專任 十五人

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ鑛山監督署事務官特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
農商務大臣男爵清浦奎吾

勅令第二百二十五號(官報三月三十一日)

明治三十八年勅令第九十九號鑛山監督官制施行ノ際ニ限リ鑛山監督官ノ職ニ在ル者ハ鑛山監督

署事務官ニ任用スルコトヲ得

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ北海道廳鐵道部職員ヨリ鐵道作業局職員ニ特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
逓信大臣 大浦兼武

勅令第二百二十六號 (官報 三月三十一日)

第一條 北海道廳鐵道部事務官ニシテ北海道鐵道部官制廢止ノ際在職ノ者ハ本令施行ノ際ニ限リ鐵道事務官又ハ鐵道事務官補ニ任用スルコトヲ得

第二條 北海道廳鐵道書記ニシテ北海道鐵道部官制廢止ノ際在職ノ者ハ本令施行ノ際ニ限リ鐵道書記ニ任用スルコトヲ得

第三條 北海道鐵道部事業手及雇ニシテ北海道鐵道部官制廢止ノ際滿五年以上勤續ノ者ハ鐵道書記ニ滿一年以上勤續ノ者ハ鐵道書記補ニ本令施行ノ際ニ限リ任用スルコトヲ得

第四條 北海道鐵道部事業手及雇ニシテ北海道鐵道部官制廢止ノ際鐵道作業局雇トナリタル者ハ文官任用令第六條ノ勤續者トス

附則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

朕臺灣總督府稅關官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年三月三十一日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
內務大臣子爵芳川顯正

勅令第二百二十七號 (官報 四月一日)

臺灣總督府稅關官制中左ノ通改正ス

第四條中專任二百人ヲ專任二百十四人ニ改ム

〔參照〕

明治三十四年四月十一日 勅令第四十九號臺灣總督府稅關官制第四條中專任二百人ハ變更ノ定員ナリ

朕沈沒船舶賣拂ノ場合ニ於ケル買受人資格ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月七日

海軍大臣男爵山本權兵衛  
大藏大臣男爵曾根荒助

勅令第二百二十八號 (官報 四月八日)

海軍ニ於テ沈沒船舶ヲ賣拂ハムトスルトキハ必要ニ應シ海軍大臣ハ特ニ省令ヲ以テ買受人ノ資格ヲ定ムルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○ 朕臨時取締ノ爲屬府縣ニ警部ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第三百二十九號(官報四月十一日)

臨時取締ノ爲屬府縣ニ警部ヲ置ク

前項警部ノ定員ハ四十八トシ其ノ配置ハ内務大臣之ヲ定ム

○ 朕俸給放棄其ノ他諸給與仕拂ノ際錢位未滿ノ端數切捨ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三百二十號(官報四月十一日)

國庫ヨリ俸給、放棄其ノ他ノ給與ヲ仕拂クノ際其ノ仕拂額ニ錢位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨ツ但シ法律ノ結果又ハ契約ニ因ルモノハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○ 朕地租條例施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十日

大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三百二十一號(官報四月十一日)

地租條例施行規則中左ノ通改正ス

第二條第五號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

六 百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的トナルトキ

〔參照〕

勅令第三百十一號地租條例施行規則(明治三十二年三月三十一日)抄録

第三條 一筆ノ土地中一部分左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ分割ス

○ 朕海軍機關術練習所條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十日

海軍大臣男爵山本權兵衛

勅令第三百三十二號(官報四月十一日)

海軍機關術練習所條例中左ノ通改正ス

第三十條 戰時又ハ事變其ノ他必要ニ際スルトキハ學生及練習生ヲ退學セシムルコトヲ得  
戰時又ハ事變ニ際シテハ第十五條及第十六條ニ依ラヌ適宜ノ規格ヲ定メ練習生ヲ選拔スルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十七年八月及明治三十八年一月ノ兩度ニ於テ假ニ入所セシムル練習生ハ本令ニ依リ入所セシムル者ト看做ス

〔參照〕

勅令第三百七十六號海軍機關術練習所條例(明治三十六年十二月七日官報)抄錄  
第三十條 戰時又ハ事變ニ際シ必要アルトキハ學生及練習生ヲ退學セシムルコトヲ得

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第十四條ニ依リ戒嚴宣告ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十三日

內閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
海軍大臣 男爵 山本 權兵衛  
陸軍大臣 寺內 正毅

勅令第三百三十三號(官報四月十四日)

澎湖島馬公要港境域内及其ノ沿海ヲ臨戰地境ト定メ本令發布ノ日ヨリ戒嚴ヲ行フコトヲ宣告ス  
澎湖島戰時指揮官ヲ以テ前項戒嚴地ノ司令官トス

朕鹽專賣法ヲ施行セサル地方ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十三日

大藏大臣 男爵 曾 廣 荒助

勅令第三百三十四號(官報四月十四日)

鹽專賣法第四十二條ニ依リ左ノ地方ニハ當分ノ内同法ヲ施行セシム

一 東京府管下 小笠原島及伊豆七島

一 鹿兒島縣管下 馬毛島、口ノ永良部島、竹島、硫黃島、鷹島、津唐瀨、黑島、東島、宇治島、雙島、草垣島、口之島、中之島、臥蛇島、小臥蛇島、平島、甌防瀨島、惡石島、島子島、寶島、上ノ根島、橫濱島、喜界島、諸島、與路島、德之島、沖永良部島及與論島

一 沖繩縣管下 伊平屋島、伊是名島、具志川島、野甫島、屋奈葉島、古宇利島、伊江島、瀬底島、面那島、伊計島、宮城島、平安座島、渡島、津堅島、久高島、前島、黑島、渡嘉敷島、座間味島、屋加比島、阿嘉島、慶留間島、久場島、渡名喜島、粟國島、島島、久米島、奧武島、大葉島、池間島、大神島、來間島、水納島、多良間島、竹富島、嘉瀨真島、小瀨島、黑島、新城島、西表島、內離島、外離島、沖神島、鳩間島、波照間島、大東島、魚釣島及與那國島

朕間接國稅犯則者處分法施行規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十三日

大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三百三十五號(宣稱 四月十四日)

間接國稅犯則者處分法施行規則中左ノ通改正ス

第一條中第十號ノ次ニ左ノ一號ヲ加テ

十一 鹽稅

朕鹽專賣法第三十八條ニ依リ間接國稅犯則者處分法中收稅官吏又ハ稅務署長ニ屬スル職務ヲ行フ  
ハキ官吏ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十三日

內務大臣子爵芳川顯正  
大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三百三十六號(宣稱 四月十四日)

鹽專賣法第三十八條第二項ニ依リ間接國稅犯則者處分法中收稅官吏ニ屬スル職務ヲ行フハキ官吏  
ハ鹽務官吏收稅官吏稅關官吏粗製煉鹽機油若ハ煙草專賣ニ從事スル官吏又ハ警察官吏トシ稅

務署長ニ屬スル職務ヲ行フハキ官吏ハ鹽稅ノ犯罪ニ關スル場合ヲ除クノ外鹽務局長又ハ鹽務局出張所長トス

朕鹽專賣法第四十四條ニ依リ鹽稅徵收ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十三日

大藏大臣男爵曾禰荒助

勅令第三百三十七號(宣稱 四月十四日)

第一條 本令ハ鹽專賣法施行ノ際販賣ノ目的ヲ以テ所有シ又ハ所持スル鹽ニ關シ之ヲ適用ス

第二條 鹽ヲ所有シ又ハ所持スル者ハ明治三十八年六月五日迄ニ其ノ數量及所在ヲ鹽所在地ノ所轄稅務署ニ申告スヘシ

第三條 鹽ノ數量ハ鹽所在地ノ所轄稅務署之ヲ査定ス

第四條 鹽ヲ所有シ又ハ所持スル者ハ前條ノ査定數量ニ依リ明治三十八年六月二十日迄ニ其ノ鹽稅ヲ納ムヘシ

納稅者ハ前條ノ査定數量ヲ區分シ前項ノ期限内ニ於テ各區分ニ對スル鹽稅ヲ分納スルコトヲ得  
第五條 鹽ヲ所有シ又ハ所持スル者ハ鹽稅ニ相當スル擔保ヲ提供シ三箇月以內鹽稅ノ延納ヲ請求  
スルコトヲ得

前項ニ依リ提供スヘキ擔保物ハ金錢又ハ稅務署長ノ適當ト認メタル有價證券ニ限ル  
擔保ヲ提供セシトスル者ハ前項ノ擔保物ヲ供託シ其ノ供託受領證ヲ稅務署ニ提出スヘシ

第六條 收稅官吏又ハ鹽務官吏ハ必要ト認ムルトキハ鹽ノ貯藏場、鹽ノ販賣場其ノ他鹽ノ所在ト認ムル場所ニ立入り検査ヲ爲スコトヲ得

朕警視廳官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第三百三十八號 (官報 四月十九日)

警視廳官制中左ノ通改正ス

第四條中二百五十六人ヲ二百四十四人ニ改ム

第十條 警視總監ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ奏任官ノ功過ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第二十二條第二項ヲ削ル

第二十二條ノ二 警視廳ニ警務長ヲ置キ第一部長タル警視ヲ以テ之ニ充ツ

警務長ハ警察事務ノ執行ニ關シ警視總監ノ命ヲ承ケ警察署長、警部及巡查ヲ指揮監督ス

〔參照〕

勅令第三百五十九號警視廳官制(明治二十六年十月三十一日官報)抄録

第四條第二項

警部警視廳消防士、警察醫及消防機關士ノ定員ハ通シテ二百五十六人トシ其ノ各官ノ定員ハ主務大臣ノ認可ヲ經テ警視

務長ニシテ定ム

第十條 警視總監ハ所部ノ官吏ヲ監督シ奏任官ノ進退ハ主務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ行フ

第二十二條第二項

第一部長ハ警察事務ニ付警察署長以下ヲ指揮スルコトヲ得

朕北海道廳官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第三百二十九號 (官報 四月十九日)

北海道廳官制

第一條 北海道廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

事務官

支廳長

警視

技師

廳

視學

警部



技手

通譯

第二條 長官ハ勅任トス

第三條 事務官ハ七人奏判トス但シ第一部長ニ充ツル事務官ハ勅任ト爲スコトヲ得

第四條 支廳長ハ奏任トス

第五條 警視ハ專任九人奏任トス

第六條 技師ハ專任十五人ヲ以テ定員トス

第七條 屬視學、警部及通譯ハ判任トス

屬警部ハ通シテ四百人視學ハ八人技手ハ百十五人通譯ハ二人ヲ以テ定員トス

第八條 前各條ノ定員ノ外農事試験ニ關スル職員ヲ置ク其ノ定員ハ專任技師三人及專任技手二人トス

第九條 長官ハ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ各省ノ主務ニ付テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ北海道ノ拓地殖民ノ事務及部内ノ行政事務ヲ總理ス

第十條 長官ハ北海道ノ事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其ノ一部ニ聯合ヲ獲メルコトヲ得

第十一條 長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警備ノ爲兵備ヲ要スルトキハ師團長ニ移駐シ出兵ヲ請フコトヲ得

第十二條 長官ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ高等官ノ功過ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ行フ

第十三條 長官ハ所部ノ高等官ノ懲戒ヲ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ニ付テハ之ヲ行フ

第十四條 長官ハ支廳長ノ處分又ハ命令ノ成規ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

長官ハ行政事務ニ付其ノ部内ノ區長ヲ指揮監督シ其ノ處分ニ付テハ前項ノ例ニ依ル

第十五條 長官ハ屬中職務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十六條 長官事故アルトキハ第一部長タル事務官其ノ職務ヲ代理ス

長官及第一部長タル事務官共ニ事故アルトキハ内務大臣ニ於テ他ノ事務官ノ一人ヲレテ長官ノ職務ヲ代理セシム

長官ハ遺囑ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十七條 長官ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ支廳長又ハ區長ニ委任スルコトヲ得

第十八條 北海道廳長官官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム

一 官吏ノ進退及身分ニ關スル事項

二 文書ノ往復及記録編纂ニ關スル事項

三 官印圖印ノ管守ニ關スル事項

四 雜費ニ關スル事項

第十九條 道廳ニ部ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ

第一部

一 支廳、后長役場、郡町村總代人及區町村其ノ他公共組合ニ關スル事項

二 職員、警部、北陸道會及北海道地方費ニ關スル事項

- 三 賑恤救済ニ關スル事項
- 四 道廳ニ關スル國庫費ノ會計ニ關スル事項
- 五 地方費經濟ニ屬スル收支出納ニ關スル事項
- 六 道廳所管ノ官有財産及物品ニ關スル事項
- 七 地方費經濟ニ屬スル財産及物品ニ關スル事項
- 八 外國人ニ關スル事項
- 九 他ノ主掌ニ屬セサル事項

第二部

- 一 教育學藝ニ關スル事項
- 二 學事ノ視察ニ關スル事項
- 三 兵事ニ關スル事項
- 四 社寺及宗教ニ關スル事項
- 五 民籍ニ關スル事項

第三部

- 一 農工商ニ關スル事項
- 二 水産漁獵ニ關スル事項
- 三 度量衡ニ關スル事項

第四部

- 一 高等警察ニ關スル事項

- 二 行政警察ニ關スル事項
- 三 衛生ニ關スル事項

第五部

- 一 殖民地ノ選定經營其ノ他殖民ニ關スル事項
- 二 土地ノ處分及開墾ニ關スル事項
- 三 地籍ニ關スル事項
- 四 官有地管理ニ關スル事項
- 五 土地收用ニ關スル事項
- 六 森林原野ニ關スル事項

第六部

- 一 土木ニ關スル事項
- 二 水陸運輸ニ關スル事項
- 三 水面埋立ニ關スル事項

第二十條 部長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ長官ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ指揮監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十一條 部長事故アルトキハ長官ニ於テ道廳官吏ノ一人ヲシテ其ノ事務ヲ代理セシム

第二十二條 第一部長タル事務官ハ長官ヲ佐ケ廳務ヲ整理シ各部ノ事務ヲ監督ス

第二十三條 部長ニ充テラレタル事務官ハ長官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

長官ハ事務官ノ一人ヲシテ審議立案ヲ掌ラシムルコトヲ得

第二十四條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第二十五條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第二十六條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第二十七條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第二十八條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第二十九條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十一條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十二條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十三條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十四條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十五條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十六條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十七條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十八條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第三十九條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

第四十條 支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

支廳長官ノ職務ニ係ルニ係リテ其ノ職務ニ充テ之ニ充ツ

附則

従前ノ法律命令ニ於テ北海道郡區長ノ管掌ニ屬シタル事項ハ北海道廳支廳長ニ於テ處理スヘキモ

従前郡區長ノ兼掌シタル戸長ノ事務ハ支廳長ニ於テ之ヲ共ニ廳在勸勵ニ委任スルコトヲ得

北海道廳支廳長ノ發スル支廳令ニハ明治二十六年勅令第九十九號中郡令ニ關スル規程ヲ適用ス

朕地方官官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第四百四十號(官報四月十九日)

地方官官制

第一條 各府縣ニ左ノ職員ヲ置ク

知事

事務官

警視

技師

屬

視學

警部

技手

通譯

第二條 知事ハ勅任トス

第三條 事務官ハ四人委任トス但シ内務大臣ノ指定スル府縣ニ於テハ五人ヲ置クコトヲ得

警視ハ委任トス

第四條 屬視學、警部及通譯ハ判任トス

屬及警部ハ各府縣ヲ通シテ四千八百一人ヲ以テ定員トシ其ノ每府縣ノ定員ハ内務大臣之ヲ定メ

其ノ各官ノ定員ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム

視學ハ各府縣ヲ通シテ九十二人ヲ以テ定員トシ其ノ每府縣ノ定員ハ内務大臣之ヲ定ム

第五條 警視、技師、技手及通譯ハ府縣ノ須要ニ依リ俸給豫算定額内ニ於テ之ヲ置クコトヲ得但シ

警視ハ第四部ニ屬スル者ハ大阪府ハ二人、其ノ他ノ府縣ハ一人、警察署長ニ充ツル者ハ各府縣ヲ

通シテ八十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條 知事ハ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ各省ノ主務ニ付テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命

令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理ス

第七條 知事ハ部内ノ行政事務ニ付共ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其ノ一部ニ府縣

令ヲ發スルコトヲ得

第八條 知事ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲兵備ヲ要スルトキハ師團長又ハ旅

團長ニ移駐シテ出兵ヲ請フコトヲ得

第九條 知事ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ委任官ノ功過ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之

ヲ行フ

第十條 知事ハ所部ノ委任官ノ懲戒ヲ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ニ付テハ之ヲ行フ

第十一條 知事ハ郡長島司ノ處分又ハ命令ノ成規ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認

ムルトキハ其ノ處分又ハ命令ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

知事ハ行政事務ニ付共ノ部内ノ市長ヲ指揮監督シ其ノ處分ニ付テハ前項ノ例ニ依ル

第十二條 知事ハ廳中職務ノ細則ヲ設クルコトヲ得

第十三條 知事事故アルトキハ第一部長タル事務官其ノ職務ヲ代理ス

知事及第一部長タル事務官共ニ事故アルトキハ内務大臣ニ於テ他ノ事務官ノ一人ヲシテ知事ノ

職務ヲ代理セシム

知事ハ府縣ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第十四條 知事ハ其ノ職務ニ關スル事務ノ一部ヲ部長、司長、副司長ハ市長ニ委任スルコトヲ得

第十五條 各府縣ニ知事官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム

一 官吏ノ進退及身分ニ關スル事項

二 文書ノ往復及記録編纂ニ關スル事項

三 官印府縣印ノ管守ニ關スル事項

四 褒賞ニ關スル事項

第十六條 各府縣ニ部ヲ置キ事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ

第二部

一 國庫選舉ニ關スル事項

二 府縣行政及郡市町村共ノ他公共團體ノ行政ノ監督ニ關スル事項

三 府縣經濟及郡市町村共ノ他公共團體ノ經濟ノ監督ニ關スル事項

四 賑恤救濟ニ關スル事項

五 土木ニ關スル事項

六 地理ニ關スル事項

七 土地收用ニ關スル事項

八 府縣ニ關スル國庫費ノ會計ニ關スル事項

九 府縣經濟ニ關スル收支出納ニ關スル事項

十 他ノ主要ニ關スル事項

東京府ニ於テハ右ノ外衛生ニ關スル事項

第三部

一 警察ニ關スル事項

二 消防ニ關スル事項

三 公衆衛生ニ關スル事項

四 陸海及空軍ニ關スル事項

五 各種機關ニ關スル事項

六 裁判ニ關スル事項

第四部

一 農林ニ關スル事項

二 林業ニ關スル事項

三 度量衡ニ關スル事項

第五部

一 府縣警察ニ關スル事項

二 行政警察ニ關スル事項

三 衛生ニ關スル事項

第六條 知事ハ其ノ職務ニ關スル事務ノ一部ヲ部長、司長、副司長ハ市長ニ委任スルコトヲ得

第七條 知事ハ其ノ職務ニ關スル事務ノ一部ヲ部長、司長、副司長ハ市長ニ委任スルコトヲ得

第八條 部長等ハ其ノ職務ニ關スル事務ノ一部ヲ代理セシム

第十九條 部長ニ充テラレサル事務官ハ知事ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス  
 知事ハ事務官ノ一人ヲレテ審議立案ヲ掌ラシムルコトヲ得  
 第二十條 各府縣ニ警務長ヲ置キ第四部長タル事務官ヲ以テ之ニ充ツ  
 警務長ハ警察事務ノ執行ニ關シ知事ノ命ヲ承ケ警視、警部及巡查ヲ指揮監督ス  
 第二十一條 警視ハ第四部ニ屬シ又ハ内務大臣ノ指定シタル警察署ノ署長ト爲リ上官ノ指揮ヲ承  
 ケ其ノ部署ノ事務ヲ掌理ス  
 第二十二條 各部ニ分限ヲ設ケルコトヲ要スルトキハ知事之ヲ定メ内務大臣ニ報告スヘシ  
 第二十三條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス  
 第二十四條 視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ従事ス  
 第二十五條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス  
 第二十六條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ翻譯通譯ニ従事ス  
 第二十七條 各都市ニ警察署ヲ置ク但シ内務大臣ハ地方ノ必要ニ應シ別ニ區域ヲ定メテ警察署ヲ  
 置クコトヲ得  
 知事必要アリト認ムルトキハ警察署ノ下ニ警察分署ヲ置クコトヲ得  
 第二十八條 警察署長ハ警視ヲ以テ充ツル場合ヲ除クノ外警部ヲ以テ之ニ充テ警察分署長ハ警部  
 ヲ以テ之ニ充ツ  
 警察署長及警察分署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス  
 第二十九條 各府縣ニ巡查ヲ置ク判任官ノ待遇トス  
 巡查ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十條 府縣ニ警察醫ヲ置クコトヲ得  
 警察醫ハ判任官ノ待遇トス上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル醫務ニ従事ス  
 第三十一條 東京府ノ警察ニ關スル事項ハ警視廳官制ニ依ル  
 第三十二條 各郡ニ左ノ職員ヲ置ク  
 郡長  
 郡書記  
 郡視學  
 第三十三條 郡長ハ委任トス知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部内ニ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌  
 理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス  
 第三十四條 郡長ハ行政事務ニ付其ノ部内ノ町村長ヲ指揮監督ス  
 第三十五條 郡長ハ町村長ノ處分成規ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキ  
 ハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得  
 第三十六條 郡長ハ部下ノ判任官ノ進退ヲ知事ニ具申スルコトヲ得  
 第三十七條 郡長ハ法律命令ニ依リ又ハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付郡令ヲ發スルコトヲ得  
 第三十八條 郡長事故アルトキハ上席郡書記其ノ職務ヲ代理ス  
 第三十九條 郡長ハ郡ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得  
 第四十條 郡書記ハ判任トス其ノ定員ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ知事之ヲ定ム  
 郡書記ハ郡長ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス  
 第四十一條 郡視學ハ一人判任トス郡長ノ命ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ従事ス

第四十二條 知事ハ須要ニ依リ郡ニ技手ヲ置クコトヲ得

第四十三條 勅令ヲ以テ指定スル島地ニ島廳ヲ置ク

知事必要アリト認ムルトキハ内務大臣ノ認可ヲ經テ島廳出張所ヲ置クコトヲ得

第四十四條 各島廳ニ左ノ職員ヲ置ク

島司

島廳書記

島廳視學

第四十五條 島司ハ委任トス知事ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ部内ニ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第四十六條 島司ハ法律命令ニ依リ又ハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付島廳令ヲ發スルコトヲ得

第四十七條 島司ハ部下ノ判任官ノ進退ヲ知事ニ具申スルコトヲ得

第四十八條 島司ハ行政事務ニ付其ノ部内ノ町村長ヲ指揮監督ス

第四十九條 島司ハ町村長ノ處分成規ニ違ヒ、公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第五十條 島司事故アルトキハ上席島廳書記其ノ職務ヲ代理ス

第五十一條 島司ハ島廳ノ官吏ヲシテ其ノ事務ノ一部ヲ臨時代理セシムルコトヲ得

第五十二條 島廳出張所長ハ島廳書記ヲ以テ之ニ充ツ

島廳出張所長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ知事ノ定ムル所ニ依リ出張所主管ノ事務ヲ處理シ部下ノ官吏

ヲ指揮監督ス

第五十三條 島廳書記ハ判任トス其ノ定員ハ其ノ府縣判任官ノ定員内ニ於テ知事之ヲ定ム

島廳書記ハ島司ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第五十四條 島廳視學ハ一人判任トシ當分ノ内島廳書記ヲシテ之ヲ兼キシム島司ノ命ヲ承ケ學事ノ觀察其ノ他學事ニ關スル庶務ニ従事ス

第五十五條 知事ハ須要ニ依リ島廳ニ技手ヲ置クコトヲ得

第五十六條 木令中市長トアルハ東京市、京都市、大阪市其ノ他人口二十萬以上ノ市ノ區長、町村長トアルハ戸長其ノ他之ニ準スヘキモノヲ包含ス

附則

明治三十三年勅令第二百四十三號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕

明治三十三年八月廿四日勅令第二百四十三號ハ府縣ノ警視ニ關スル件ナリ

朕高等官官等條例給令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣 伯耆 桂 太郎

勅令第四百四十一號 (官報 四月十九日)  
高等官官等條例給令中在ノ通改正ス

文武高等官等表及府縣ノ部ヲ左ノ如ク改ム

府 縣	北海道									
		府 知事	同	上						
					府 縣 事務	同				
					府 長 官	同				
					府 縣 長 官	同				
					府 縣 立 校 長 官	同				
					府 縣 警 務 長 官	同				
					府 縣 醫 務 長 官	同				
					府 縣 監 獄 長 官	同				
					府 縣 監 獄 監 事	同				
					府 縣 監 獄 吏 長	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				
					府 縣 監 獄 吏	同				

朕文武判任官等級表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

勅令第四百十二號(官報 四月十九日)

文武判任官等級表中左ノ道改正ス

北海道 視學ノ次ニ左ノ如ク加フ

北海道廳通稱	同	北海道廳通稱	同	北海道廳通稱	同	北海道廳通稱	同	北海道廳通稱	同

朕北海道廳高等官俸給令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎

内務大臣子爵芳川顯正

文部大臣 久保田讓

勅令第四百十三號(官報 四月十九日)

北海道廳高等官俸給令



第一條 北海道廳高等官ノ年俸ハ左ノ如シ

長	一級	四千五百圓
	二級	四千圓
勅任事務官	一級	三千三百圓
	二級	三千圓
委任事務官	一級	二千二百圓
	二級	二千圓
	三級	一千八百圓
	四級	一千六百圓
	五級	一千四百圓
	六級	一千二百圓
	七級	一千圓
支廳長 <small>(警務局長タル者ヲ除ク)</small>	一級	千八百圓
	二級	千六百圓
	三級	千四百圓
	四級	千二百圓
	五級	千圓
	六級	八百圓
	七級	六百圓
警視 <small>(警務局長タル者ヲ除ク)</small>	一級	千二百圓
	二級	千圓
	三級	八百圓

第二條 函館支廳長ノ年俸ハ特ニ二千二百圓迄ヲ給スルコトヲ得

第三條 委任事務官以下ノ商榷文官ニシテ最高俸ヲ受ケ在職五年以上ニ至リ功績アル者ニ限リ事務官ニ在リテハ五百圓以内共ノ他ニ在リテハ三百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

附則

明治三十二年勅令第二百五十六號ハ之ヲ廢止ス  
當分ノ内支廳長ノ年俸ハ最下級以下六百圓迄ヲ給スルコトヲ得  
本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セラレサル者ハ現ニ受クル俸額ニ相當スル等級俸又ハ前項ノ俸額ヲ受クルモノトス

〔參照〕

明治三十二年六月十五號勅令第二百五十六號ハ北海道廳視學官俸給ノ件ナリ

朕地方商榷官俸給令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 各 御 璽

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣 伯耆桂 太郎  
內務大臣 金子爵 芳川 顯正  
文部大臣 久保田 讓

勅令第四百四十四號(官報四月十九日)

地方高等官俸給令

第一條 地方高等官ノ年俸左表ノ如シ

官名	一級	二級	三級	四級	五級	六級
知事	三千六百圓	三千三百圓	三千圓			
本務官	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓
警務官	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓
警視	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓
警長	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓
警視長	千圓	九百圓	八百圓	七百圓	六百圓	五百圓

第二條 東京府、京都府、大阪府、神奈川縣、兵庫縣、長崎縣、新潟縣、愛知縣、宮城縣、廣島縣、福岡縣及熊本縣ノ知事及事務官ハ別ニ左表ノ加俸ヲ受ケ

府	縣	官名	知事	事務官	第一部長	其ノ他					
東京府	京都府	大阪府	神奈川縣	兵庫縣	長崎縣	新潟縣	愛知縣	宮城縣	廣島縣	福岡縣	熊本縣
			四百圓	四百圓	四百圓	二百圓					
			二百圓	二百圓	二百圓	二百圓					
			二百圓	二百圓	二百圓	二百圓					
			二百圓	二百圓	二百圓	二百圓					

第三條 內務大臣ニ於テ特ニ指定シタル地ノ島司及郡長ハ別ニ二百圓ノ加俸ヲ受ケ

附則

當分ノ內事務官ノ年俸ハ第一條ノ規程ニ拘ラス最下級以下八百圓迄ヲ給スルコトヲ得  
 本令施行ノ際別ニ辭令書ヲ交付セラレサル者ハ現ニ受ケル俸給額ニ相當スル等級俸ヲ受ケルモノトス

除權審顧問ノ諮詢ヲ經テ道廳府縣事務官特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

內閣總理大臣 伯耆 桂 太郎  
 內務大臣 子爵 芳川 顯正

勅令第四百四十五號(官報四月十九日)

從前特別任用ノ規程ニ依リ任用セラレタル道廳府縣警部長 府縣參事官及道廳府縣視學官ニシテ現ニ其ノ職ニ在ル者ハ本令施行ノ際ニ限リ警部長ハ第四部長ニ充テラルヘキ事務官、視學官ハ第二部長ニ充テラルヘキ事務官、參事官ハ第二部長第三部長ニ充テラルヘキ事務官又ハ部長ニ充テラレサル事務官ニ任用スルコトヲ得  
 前項ニ依リ警部長及視學官ヨリ任用セラレタル事務官ハ高等官三等ニ、參事官ヨリ任用セラレタル事務官ハ高等官四等以上ニ陞敘セラルルコトヲ得ス

除權審顧問ノ諮詢ヲ經テ明治三十二年勅令第三號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月 勅令 第四百四十五號 第四百四十六號

一七七

明治三十八年四月十八日

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

勅令第四百四十六號 (官報 四月十九日)

明治三十二年勅令第三號中警視ハノ下ニ北海道廳支廳長及府縣郡長ノ職ニ在ル者並ニヲ加フ

〔參照〕

勅令第三號(明治三十二年二月十一日官報)

警視廳長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警務ニ關スル職務ニ從事シ判任官五級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セズ又官試委員ノ銜ヲ經テ任用スルコトヲ得

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ警部消防士特別任用令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

内閣總理大臣伯爵桂 太郎  
内務大臣子爵芳川顯正

明治三十八年四月十八日

勅令第四百四十七號 (官報 四月十九日)

警部消防士特別任用令

第一條 警部及消防士ハ考試合格證書ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得

第二條 考試合格證書ハ巡查在職滿三年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其ノ職ニ在ル者ニ就キ考試委員共ノ實務ノ成績ヲ考查シ及學術ヲ試験シ合格シタル者ニ之ヲ付與ス

第三條 考試委員ハ警視廳ニ在リテハ本廳勤務警視三人 北海道廳及府縣ニ在リテハ事務官三人

ヲ以テ之ヲ組織ス

考試委員ハ警視總監又ハ地方長官之ヲ命ス

第四條 考查ノ方法及試験ノ科目ハ主務大臣之ヲ定ム

附則

明治二十三年勅令第十號ニ依リ警部ニ任用セラレタル者ニシテ警察監獄學校ノ課程ヲ修了シタル者及明治三十年勅令第二百十五號警部消防士特別任用令ニ依リ警部又ハ消防士ニ任用セラレタル者ハ本令ニ依リ考試合格證書ヲ有スル者ト看做ス

朕警部官及消防官服制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

内務大臣子爵芳川顯正

明治三十八年四月十八日

勅令第四百四十八號 (官報 四月十九日)

警察官及消防官服制中「警部長」ヲ「警務長」ニ「警察部」ヲ「第四部」ニ改ム

朕明治三十二年勅令第二百二十二號中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

内務大臣子爵芳川顯正

勅令第四百九十九號(官報四月十九日)

明治二十二年勅令第四百二十二號中警部長ヲ警務長ニ改ム

〔參照〕

明治二十二年四月三日勅令第四百二十二號ハ警察官及消防官制ノ制ナリ

除明治三十八年度歳出豫算中第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ

御名 御璽

明治三十八年四月十八日

大藏大臣 野宮 曾 禰 荒 助

勅令第五百五十號(官報四月十九日)

明治三十八年度歳出豫算中第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途左ノ通之ヲ定ム

- 退官賜金
- 死傷賜金
- 賠償及訴訟費
- 官吏療治料
- 外務本省及在外公館電信料
- 常設仲裁裁判所費分擔金
- 地所家屋公課
- 在外國難民貸與金
- 阿片
- 萬國版權及工業所有權保護同盟費分擔金
- 衛生試驗所依頼試驗用諸費
- 痘苗及血清類調製配送費
- 巡查看守衛及警查給助
- 巡查及看守滿年賜金
- 遺失物取扱及遺失物及相續人賦缺財產取得費

- 褒賞恩賜及救助費
- 徵兵入營附添人檢丁及新兵旅費
- 傳染病豫防費補助
- 警察費連帶支辨金
- 度量衡檢定出張旅費
- 刑罰被告人犯罪人護送押送留置及除罪刑罰附隨費
- 難破物除却費
- 海港檢疫費
- 行政處分強制費
- 小笠原島及沖繩縣傳染病豫防費
- 小學校教員恩給補充費
- 精神病者監護費
- 文官軍人學校職員及巡查看守恩給
- 沖繩縣僧侶飯米代
- 帝國議會議長副議長議員歳費及旅費
- 貴族院及衆議院議案類印刷費
- 稅關官吏及傭人臨時勤勞手當
- 從價稅品買上代
- 收容貨物及無請求品費

- 所得稅及營業稅調查費
- 歲入事務取扱市町村交付金
- 稅法違犯者懲罰事變犯罰者及租稅帶納處分費
- 印紙 鑑札 類 諸 費
- 災害地免租處分費
- 臺灣國庫金及補助貨幣遞送費
- 貨幣交換差金
- 仕拂命令及保管金引出切符用紙製造費
- 公債證書製造及在外公債取扱費
- 諸拂戻及缺損補填金
- 製造煙草輸出交付金
- 樟腦樟腦油補償金
- 樟腦樟腦油運搬及荷造費
- 日本興業銀行補助
- 罹災救助基金補助
- 陸軍下士退營賜金
- 埋葬
- 陸軍兵器職工扶助金
- 糧米代